

長崎県文化財調査報告書 第 97 集

長崎県埋蔵文化財調査集報 XIII

1990

長崎県教育委員会

発刊にあたって

このたび、長崎県埋蔵文化財調査集報XIIを刊行することになりました。
集報には、長崎県教育委員会が実施してきた緊急調査のなかで比較的小規模な調査の結果を収録しております。

今回の集報XIIには、肥賀太郎遺跡（島原市）、七腕遺跡（江迎町）、平川原池遺跡（世知原町）、および唐比北森ノ木遺跡（森山町）の調査結果を収録いたしました。

埋蔵文化財は、私たちが遠い祖先から受け継いできた貴重な遺産であり、損ねることなく保存するとともに、活用しながら後世に伝えることが文化財保護行政の責務であります。

従って、発掘調査に当たっては、できるだけ精密な観察と詳細な記録を取るように努めました。

この報告書が文化財に対する理解と愛護への一助となり、学術研究の新たな資料として役立つことを願うものであります。

平成2年3月

長崎県教育委員会教育長 吉次邦夫

総 目 次

I. 肥賀太郎遺跡	1
II. 七腕遺跡	67
III. 平川原池遺跡	103
IV. 唐比北森ノ木遺跡	125

凡 例

1. 本書は、長崎県教育委員会が行った下記遺跡の発掘調査報告書である。

肥賀太郎遺跡 縄文時代晩期を中心とする鳥原市所在の遺跡。

七腕遺跡 ナイフ形石器等の旧石器時代の遺物を出土した江迎町所在の遺跡。

平川原池遺跡 平川原池周辺の縄文時代早期の遺物を出土した世知原町所在の遺跡。

唐比北森ノ木遺跡 丸木舟を出土した森山町所在の低湿地遺跡。

2. 本書の編集は、伴耕一朗が担当した。

表 目 次

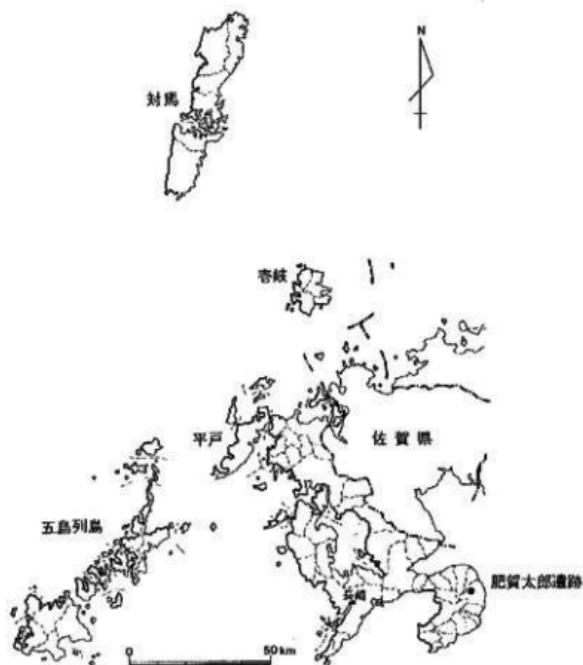
表 1 周辺の遺跡	2
表 2 縄文土器観察表①	24
表 3 縄文土器観察表②	25
表 4 縄文時代の石器観察表①	35
表 5 縄文時代の石器観察表②	36
表 6 出土土器数量表	39

図 版 目 次

図版 1 遺跡近景	53
図版 2 調査風景	54
図版 3 遺物出土状況	55
図版 4 調査完了状況	56
図版 5 上層断面	57
図版 6 縄文土器①	58
図版 7 縄文土器②	59
図版 8 縄文土器③	60
図版 9 縄文時代の石器①	61
図版10 縄文時代の石器②	62
図版11 縄文時代の石器③	63
図版12 縄文時代の石器④	64
図版13 上飾器・勾玉・土製品	65

I 肥賀太郎遺跡

島原市北千本木町所在



例　　言

1. 本報告は、昭和62年度に実施した、長崎県島原市北千本木町（字肥賀太郎）2,463-7に所在する肥賀太郎遺跡発掘調査報告書である。
2. 調査は、長崎県島原振興局建設部道路課が事業主体となり、長崎県教育庁文化課が調査を担当した。

調査関係者は下記のとおりである。

事業主体　島原振興局建設部道路課

調査主体　長崎県教育庁文化課

　　文化財保護主事　宮崎貴夫（現主任文化財保護主事）

　　指導主事　　川道　寛（現県立西陵高等学校教諭）

3. 本報告の執筆は、宮崎貴夫と伴　耕一朗（文化財調査員）が分担執筆し、文責は本文目次に記している。
4. 調査時の写真撮影は宮崎、遺物写真撮影は宮崎・伴による。
5. 本報告編集は、宮崎・伴による。
6. 出土遺物および図面・写真類は、現在県文化課で保管している。

本文目次

I 遺跡の立地と環境	1 (伴)
II 調査	
1. 調査概要	5 (宮崎)
2. 土層	5 (夕)
3. 遺構	9 (夕)
4. 出上状況	10 (夕)
III 遺物	
1. 縄文時代の土器	18 (宮崎)
2. 縄文時代の石器	26 (伴)
3. 古墳時代の土器	37 (宮崎)
4. その他の遺物	38 (夕)
IV 小結	
1. 土器について	39 (宮崎)
2. 小型円盤状石器について	42 (伴)
3. まとめにかえて	46 (宮崎)

挿図目次

第1図	島原半島の縄文時代遺跡	1
第2図	周辺の遺跡(1:50,000)	3
第3図	調査区配置図(1/500)	6
第4図	土層断面図(1/60)	折込
第5図	2層遺物出土状況(1/60)	折込
第6図	3層遺物出土状況(1/60)	折込
第7図	4層遺物出土状況(1/60)	折込
第8図	5層遺物出土状況(1/60)	17
第9図	縄文土器①(1/2)	19
第10図	縄文土器②(1/2)	20
第11図	縄文土器③(1/2・1/4)	21
第12図	縄文土器④(1/2)	22
第13図	縄文時代の石器①(2/3)	27
第14図	縄文時代の石器②(2/3)	28
第15図	縄文時代の石器③(1/2)	29
第16図	縄文時代の石器④(2/3)	30
第17図	縄文時代の石器⑤(1/3・1/2)	31
第18図	縄文時代の石器⑥(2/3)	33
第19図	縄文時代の石器⑦(2/3)	34
第20図	土師器(1/3)	38
第21図	不明土製品(1/2)	38
第22図	勾玉(1/1)	38
第23図	縄文土器の層位別出土数量	40
第24図	層位別土器出土数量	40
第25図	時期別・種類別土器出土数量	40
第26図	小型円盤状石器集成	42
第27図	小型円盤状石器出土遺跡	43
第28図	小型円盤状石器長幅比・厚さグラフ	44
第29図	島原半島北東部の縄文後期～弥生前期の遺跡	47

I 遺跡の立地と環境

肥賀太郎遺跡は、長崎県南東部の島原半島にあり、行政的には長崎県島原市北千本木町字肥賀太郎に所在する。

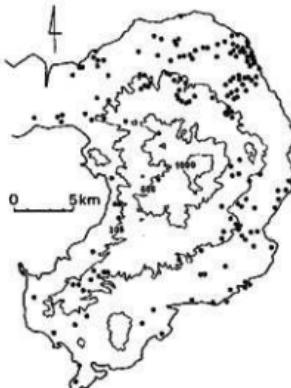
島原半島は、西九州の肥前半島から愛野地峡を境に南東へ派生した半島で、東に有明海・島原湾、西に千々石(橘)湾、南は早崎海峡越しに天草を望む。

半島の主部には雲仙火山群がそびえ、主峰普賢岳(1,359m)を起点として北東に向かって傾斜する標高270~290mのところに本遺跡は立地する。現在は県道、愛野・島原線が遺跡中央を通る。

地形分類によると、火山性の山地と崩壊地(千本木山麓)のちょうど境目にあたり、東側を除く周囲はかなり急傾斜で山地が迫っている(第3図参照)。このような地形の影響下にあって周辺は湧水点が多く山からの清水が豊富である。遺跡に隣接する焼山では「ソーメン流し」等の観光開発も行われており、特に夏には避暑を兼ね販賣をみせている。また、西に控える舞岳(703m)南側を通る雲仙(普賢岳)への登山ルート入口にあたる所でもある。

現在、島原半島には440ヶ所あまりにおよぶ遺跡が知られており、これは長崎県内における遺跡の約13%強を占める。内訳は、先土器時代22、縄文時代163、弥生時代99、古墳時代95である。大きな遺跡はたいてい各年代が複合しており、占地条件の良好な遺跡はかなり盛んに生活が営まれたことが察せられる。

また、ゆるやかな火山性山麓扇状地が広がりをみせる島原半島の北東部は、遺跡の数も多く、国見町の東側から有明町の一帯にかけては、先土器時代や縄文時代の遺跡が集中する地域でもある。特に、縄文時代晩期の遺跡が目立ち第3図に示すように、肥賀太郎遺跡(30)をはじめ、堀田B・C遺跡(2・3)、百花台遺跡群(4)、二ツ石遺跡(7)、灰ノ久保遺跡(10)、原口A遺跡(12)、下油堀遺跡(13)、長賀A・B遺跡(17・18)、三会中学校遺跡(20)、下宮遺跡(21)、稗田遺跡(22)、尻無遺跡(25)、大タブ沢遺跡(26)、立野遺跡(27)、弓弦遺跡(28)、馬渡遺跡(29)、平の山A・B遺跡(31・32)が挙げられる。そして、これらの遺跡の核的な要素を示しているのが本遺跡より北に1kmほどの所にある礫石原遺跡(16)である。礫石原遺跡はかなり広範囲に遺跡は広がり、部分的ではあるがこれまでに幾度かの発掘調査が行われている。黒川式土器を中心に、祭祀に関連



第1図 島原半島の縄文時代遺跡

表1 周辺の遺跡

番号	名 称	種 別	時 代	所 在 地
1	栗 山 遺 跡	遺 物 包 藏 地	繩 文	国見町多比良八斗木字栗山
2	堀 囲 B 遺 跡	タ	先・繩	タ 百花台字堀囲
3	堀 囲 C 遺 跡	タ	タ	タ
4	百 花 台 遺 跡	タ	タ	タ
5	魚 洗 川 遺 跡	タ	タ	タ 土黒字横道上・西田
6	森 囲 遺 跡	タ	繩 文	有明町戸田名字横道
7	二 ツ 石 遺 跡	タ	タ	タ 字地藏辻
8	下 源 在 高 野 遺 跡	タ	タ	タ 大野名字下源在高野
9	上 源 在 高 野 遺 跡	タ	タ	タ 字上源在高野
10	灰 ノ 久 保 遺 跡	タ	タ	タ 三之沢名字灰ノ久保
11	上 一 野 遺 跡	タ	タ	タ 字上一野・下蓮輪
12	原 口 A 遺 跡	タ	繩・弥	島原市(三会)尖石・原口上他
13	下 油 堀 遺 跡	タ	タ	タ 油堀町下油堀
14	上 油 堀 遺 跡	タ	繩 文	タ 上油堀
15	一 本 松 遺 跡	タ	タ	有明町大野名字一本松高野
16	礫 石 原 遺 跡	集落・墳墓・祭祀	タ	島原市(三会)礫石原町
17	長 貢 A 遺 跡	遺 物 包 藏 地	先・繩	タ 長貢町桔高野
18	長 貢 B 遺 跡	タ	繩・弥	タ 仁田平・津吹町
19	津 吹 遺 跡	タ	タ	タ 津吹町三段畠
20	三 会 中 学 校 遺 跡	タ	繩 文	タ 下富・出の川町
21	下 宮 遺 跡	タ	繩・弥・近	タ 下宮町園田・焼木
22	稗 田 原 遺 跡	タ	タ	タ 稗田原町
23	大 塚 後 遺 跡	タ	繩 文	タ 大塚後
24	坪 浦 遺 跡	タ	タ	タ 西町坪浦
25	尻 無 遺 跡	タ	タ	タ 広高野町尻無
26	大 タブ 沢 遺 跡	タ	繩・中	タ 大タブ沢
27	立 野 遺 跡	タ	繩 文	タ 立野
28	弓 弦 遺 跡	タ	タ	タ (杉谷)立野町弓弦
29	馬 渡 遺 跡	散 布 地	繩 文	タ 立野町内1896-20
30	肥 賀 太 郎 遺 跡	遺 物 包 藏 地	タ	タ 肥賀太郎
31	平 の 山 A 遺 跡	タ	タ	タ 北千本木町平の山
32	平 の 山 B 遺 跡	タ	タ	タ
33	矢 植 遺 跡	タ	タ	タ 南千本木町矢植
34	三 会 下 町 海 中 遺 跡	タ	繩・弥	タ (三会)下町(海中)
35	大 手 浜 遺 跡	タ	繩~古・近	タ 高島町大手浜



第2図 周辺の遺跡 (1: 50,000)

する石組造構や甕棺の検出も報告されている。住居址は未確認であるが、出土遺物や遺跡の性格からみて集落址であることは確実であろう。つまり、島原半島の北東部に乱立する縄文時代晚期の遺跡群は砾石原遺跡の影響下にあり、肥賀太郎遺跡もその中の一つであったものと考えられる。

参考文献

- 1 太田一也 「雲仙火山」「雲仙の自然と歴史」1984
- 2 副島和明・伴 耕一朗 『百花台広域公園建設に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書』長崎県文化財調査報告書第92集 長崎県教育委員会 1988
- 3 副島和明・伴 耕一朗 『魚洗川B遺跡』全国植樹祭会場造成工事に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書 長崎県文化財調査報告書第95集 長崎県教育委員会 1989
- 4 高野晋司編 『弘法原遺跡』吾妻町の文化財7 吾妻町教育委員会 1983
- 5 秀島貞康 『有喜貝塚』諫早市文化財報告書第5集 諫早市教育委員会 1984
- 6 古田正隆 『筏遺跡』縄文後・晚期の埋葬遺跡 百人委員会文化財報告第4集 百人委員会 1974
- 7 古田正隆 『山の寺梶木遺跡』長崎県南高来郡深江町山の寺梶木遺跡の報告 百人委員会文化財報告第1集 百人委員会 1973
- 8 古田正隆 『長賀遺跡緊急調査概報』島原市文化財調査報告書第3集 島原市教育委員会・長賀遺跡調査団
- 9 古田正隆 『砾石原遺跡』縄文晚期農耕生産文化の姿相 百人委員会文化財報告第7集 百人委員会 1977
- 10 町田利幸・浦田和彦 『砾石原遺跡』島原市文化財調査報告書第4集 島原市教育委員会 1988
- 11 藤田和裕・安楽 勉 『朝日山遺跡』小浜町文化財調査報告書第1集 長崎県小浜町教育委員会 1981
- 12 宮崎貴夫・町田利幸 『今福遺跡 III』県道矢次・南有馬線改良工事に伴う埋蔵文化財調査報告書第三冊 長崎県文化財調査報告書第95集 長崎県教育委員会 1989

II 調査

1. 調査概要

本遺跡は、山麓の狭隘な傾斜地にあり、中央を県道愛野・島原線が貫通している。道路建設の折に、この附近から多数の土器が出土したといわれており、最近でも切り通しから縄文早期の塞ノ神式上器や縄文晩期の遺物が採集され、東西200m、南北150mほどの遺跡の広がりが推測されていた。

今回の調査は、県道改良工事に伴うもので、カーブの南西側が最大8mほど拡幅されるために、島原振興局建設部道路課が事業主体となり、緊急発掘調査を実施したものである。調査は県文化課が担当し、昭和63年1月11日～1月23日の13日間実施した。

調査区は、道路拡幅部分にあわせて、調査域を2箇所設定し、北側を第1区、南側を第2区とし、122m²を発掘した。包蔵状況が良好な2層より、遺物を平板測量によってとりあげ、ドットマップを作成した。

調査の結果、3,700点ほどの遺物が出土したが、そのほとんどを占めるのは縄文晩期のものである。晩期の遺物は、1層～4層にかけて出土し、主なものとして黒色研磨や粗い条痕の土器、扁平打製石斧・磨石・石鎌などの石器、他に硬玉製勾玉、不明土製品がみられる。

5層上部からは、塞ノ神式、押型文と無文の3点の土器が出土し、少量ではあるが縄文早期の遺物が確認されたことは、礫石原遺跡、百花台遺跡の状況と比較する上で注目される。

また、この他に古墳前期の土師器が1層～3層にかけて91点出土しており、土層の整合性の点から検討を要することになった。

2. 土層(第4図)

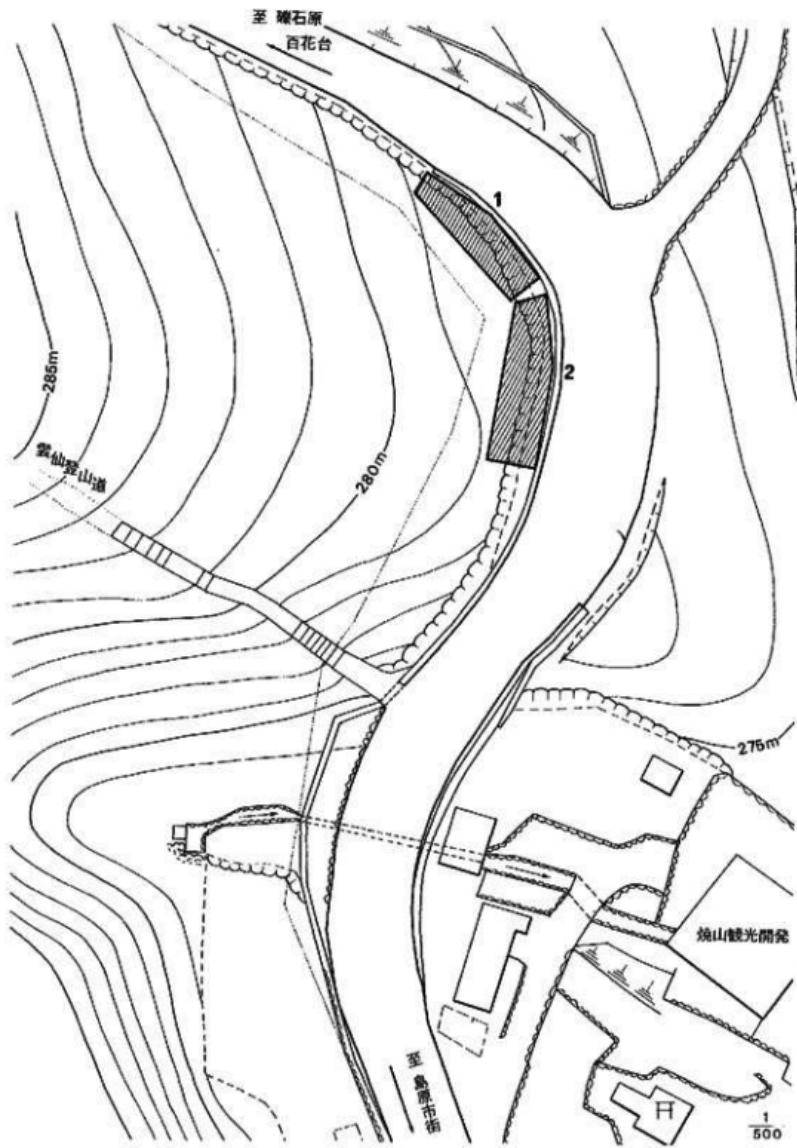
土層の堆積状況をみると、第1区と第2区の境附近が一番低くなっている。7.5～8.5%の傾斜をもっている。屋根状に張り出す地形であるが、中央がやや凹んだ状況になっている。

本遺跡の土層は以下のとおり分けられる。

第1層 現地表面をなす表土層である。植林地のために上部は腐植質に富んでいる。黒褐色のサラサラしたしまりのない土層で、部分的に暗褐色を呈する1'層がある。層厚20～30cm。

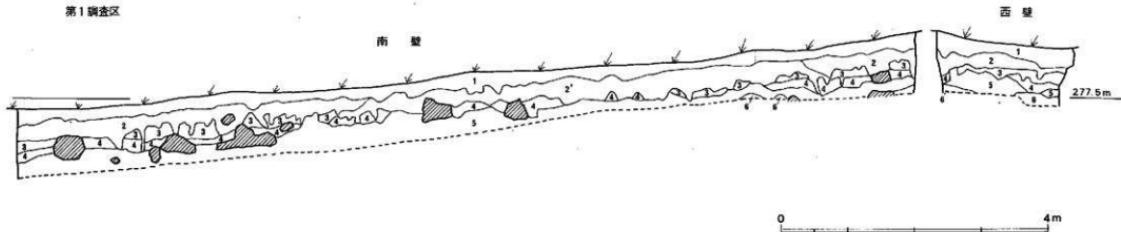
第2層 フカフカのしまりのない土層で、オリーブ褐色を呈する。微細な炭化物を含む。縄文晩期の上器・石器が多量に出土した。上器はほとんどローリングを受けておらず、磨滅していない。第1区では部分的に2層がごった2'層がある。層厚20～40cm。

第3層 わりに硬くしまった土層で、明黄褐色を呈する。白色の火山灰粒子や炭化物を含む。

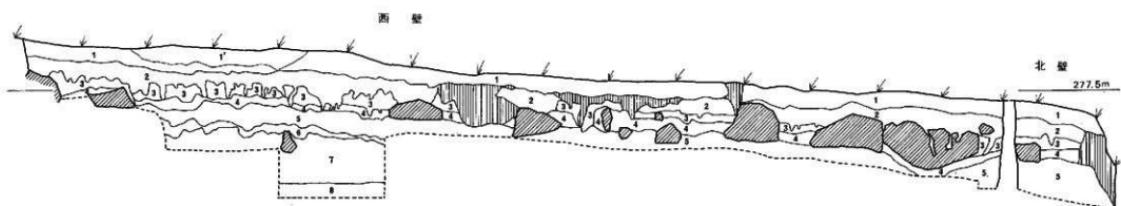


第3図 調査区配置図 (1/500)

第1調査区



第2調査区



混乱土層

岩

- | | |
|--------------------------------|--------------------------------------|
| 1 黒褐色土層 (表土層、サラサラとしまりがない) | 4 にぶい黄褐色土層 (硬くしまった土層で、白色火山灰粒子を含む) |
| 1' 神羅色土層 (表土層、部分的に存在する) | 5 黒色土層 (黒褐色を呈し、あまりじまりがない) |
| 2 オリーブ褐色土層 (しまりのない土層) | 6 斜褐色土層 (硬くしまった粘性の強い土層) |
| 2' . (2層がややにごった土層) | 7 灰青褐色土層 (非常に硬い土層、ピンクや青色の安山岩小礫を多く含む) |
| 3 明黄褐色土層 (わりと硬くしまり)、白色火山灰粒子を含む | 8 灰黃褐色安山岩基盤層 |

第4図 土層断面図 (1/60)

クラック状の亀裂が多くみられ、2層が落ち込んだ状況が捉えられる。縄文晩期の遺物が主体的に出土している。層厚10~30cm。

- 第4層 硬くしまった土層で、にぶい黄褐色を呈する。白色の火山灰粒子を含む。部分的に黒味を帯びるところもある。標高が下がるにつれて層がやや厚くなる。縄文晩期の遺物が出土するが、やや数は少ない。押型文土器も1点出土している。土師器の混入は認められない。層厚10~30cm。
- 第5層 真黒色の土層で、あまりしまりがなく、乾燥するとサラサラとなる。この層の上部から、縄文早期の塞ノ神式土器、山形押型文土器が出土した。
- 第6層 硬くしまった粘性の強い土層で、暗褐色を呈する。無遺物層である。層厚10~20cm。
- 第7層 非常に硬い土層で、灰黄褐色を呈する。ピンク色や黄色の安山岩の小礫を多量に含んでいる。無遺物層である。層厚約70cm。
- 第8層 安山岩の基盤層である。

以上が本遺跡の基本層序である。第1層は、いわゆるクロボクの火山灰土で島原半島や大村平野の地表をしばしば覆っている土層である。第2~4層は黄色系の土層で、百花台遺跡第Ⅱ層、疊石原遺跡3a・3b層に相当するが3層に区分され、また晩期を主体とするところに本遺跡の特色がある。

第5層は、百花台遺跡第Ⅲ層、疊石原遺跡4層に相当する。上部から塞ノ神式、押型文土器が出土し、百花台、疊石原両遺跡でも同じ状況がみられる。第7層は、百花台第Ⅳ層、疊石原4層下部に対比され、カシノミ層といわれている土層であろう。

両遺跡との関連でみれば、第6層が認められないことが指摘できる。

3. 遺構(第5~7回)

第1区では、4層間に3層覆土で幅2.4mほどの落ち込みが確認されたが、南側の上面から流れる自然流跡と思われる。

第2区では、3層間に落ち込みが2箇所確認された。土壙1は、平面が径1.7mほどの円形状をなす。土壙2は、長さ1mほどの楕円形の落ち込みで、深さ7cmほどの浅い皿状を呈する。土壙1は、4層面では径2mほどの円形をなしている。両者とともに、覆土は軟質な暗褐色土で、縄文晩期の遺物と土師器が混在した状況で出土した。おそらく、風倒木などによる自然的な攪乱の可能性が強く、時期的には、土師器の出土から古墳時代以降になることが考えられる。

したがって、今回の調査において明確に人為的と判断される遺構は検出できなかったことになる。

4. 出土状況 (第5～8図)

今回の調査では、3,700点ほどの遺物が出土したが、ドットマップによってとりあげを行った2層～5層について、各層での出土状況について概観したい。

(1) 第2層 (第5図)

第2層では、2,400点ほどの遺物が出土し、層位別にみてもっとも出土量が多い。地区別には、第1区では東半部に遺物の集中がみられ、第2区では南端部がやや希薄な他は全体的に多数の遺物が散布している。

土器は、縄文晩期の土器が1,400点余出土しており主体をなしていることは間違いないが、第2区を中心として土師器が69点出土しているので、少量であるが混在している状況がとらえられた。

石器は、860点余出土し、土器同様もっとも出土数量が多い。石鏃、スクレイバー、扁平打製石斧、磨石、砥石、小型円盤状石器、石核、剝片類が出土し、縄文晩期の基本的な石器組成をもっている。

その他の遺物として、第1区から硬玉製勾玉が出土している。

(2) 第3層 (第6図)

第3層では、660点ほどの遺物が出土している。2層に比べると全体に密度が薄いが、第1区西端部に自然流路状の落ち込みがあるためにその部分はやや濃くなっている。

土器は、2層同様に縄文晩期を主体とし326点出土している。そしてわずかに4点の土師器が混在している。第2区28の浅鉢は2層と接合した資料である。17は精製深鉢で、第1区2層の18と同一個体と考えられる資料である。

石器は、330点ほど出土している。器種別には、石鏃、スクレイバー、磨石、砥石、小型円盤状石器、石核、剝片類が出土し2層とさほど差異はないが、扁平打製石斧が欠落している。

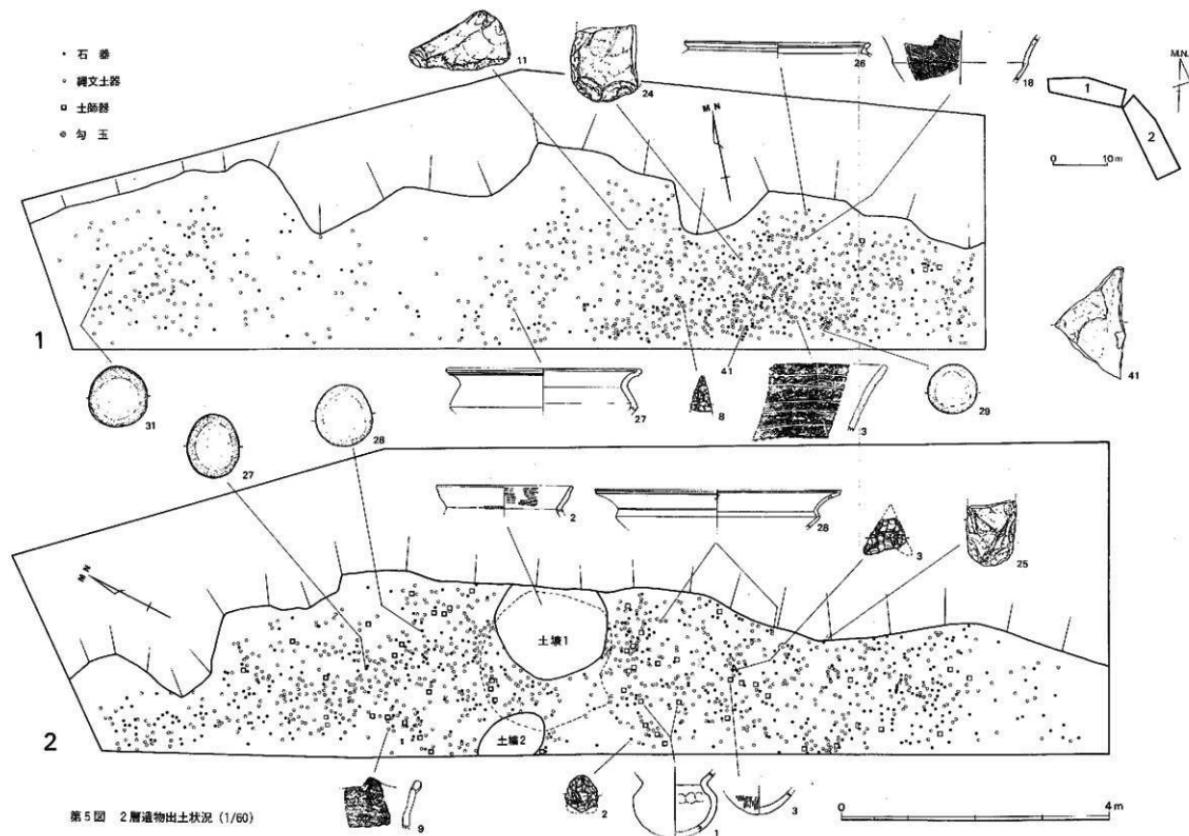
その他の遺物として、第1区の落ち込みから不明土製品が出土している。

(3) 第4層 (第7図)

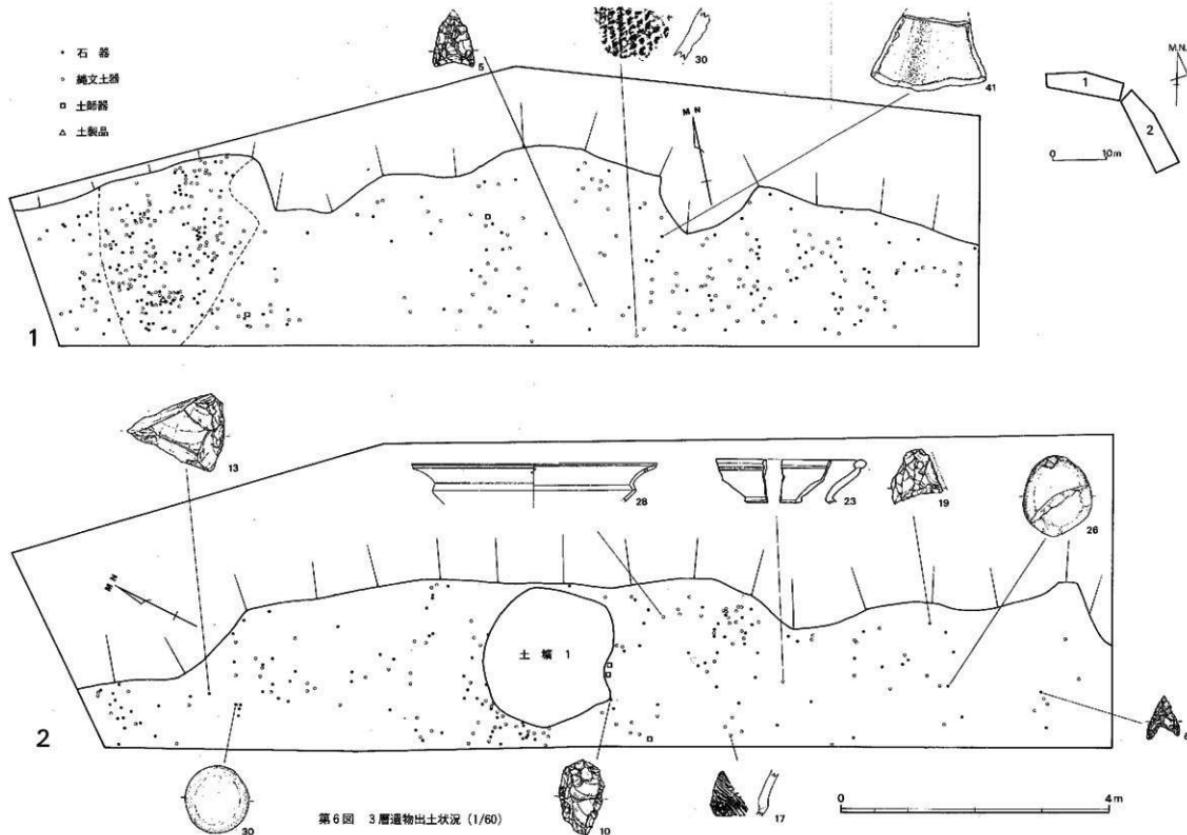
第4層では、70点余の遺物が出土したにすぎない。第1区に散漫な分布がみられるが、第2区では空白部分が多い。

土器は、33点出土している。第1区から押型文が1点出土しているが、その他は晩期土器片でありと小ぶりのものばかりである。土師器の混入は認められなかった。

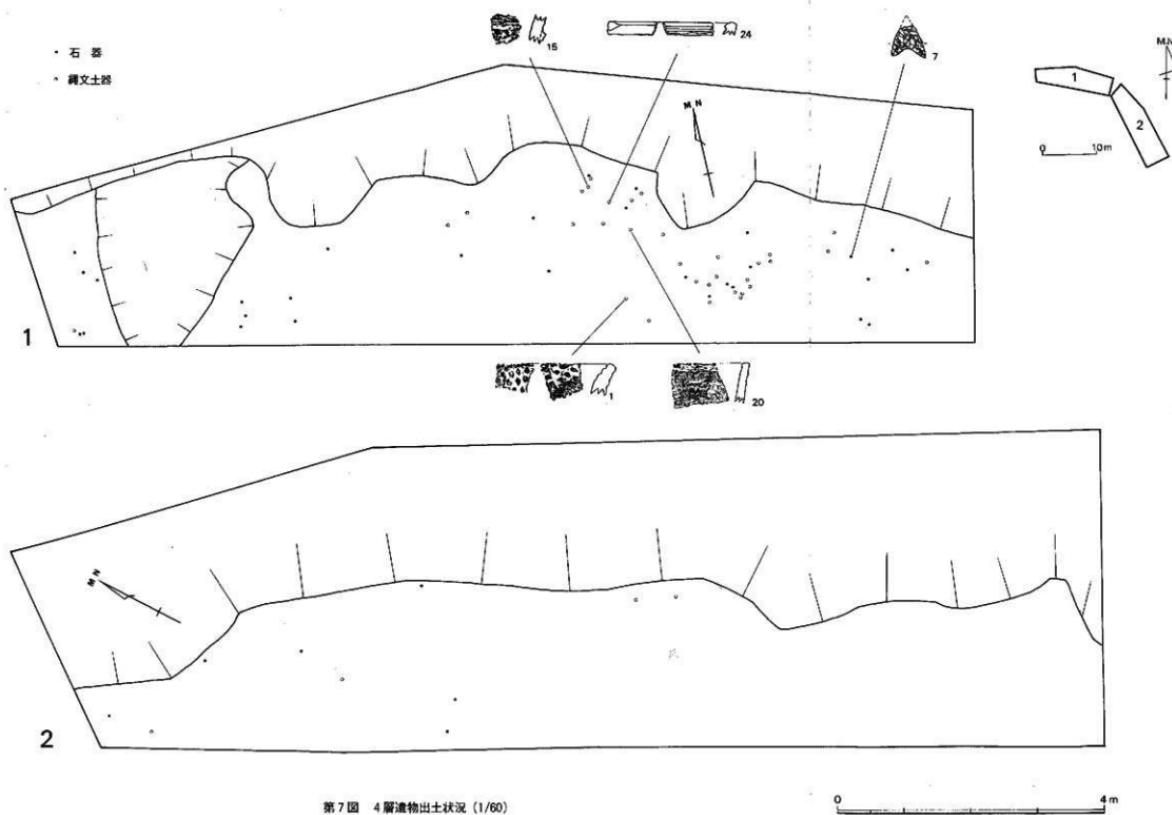
石器は、39点出土しているが、定形的なものは7の石鏃だけで、あとは黒曜石剝片である。

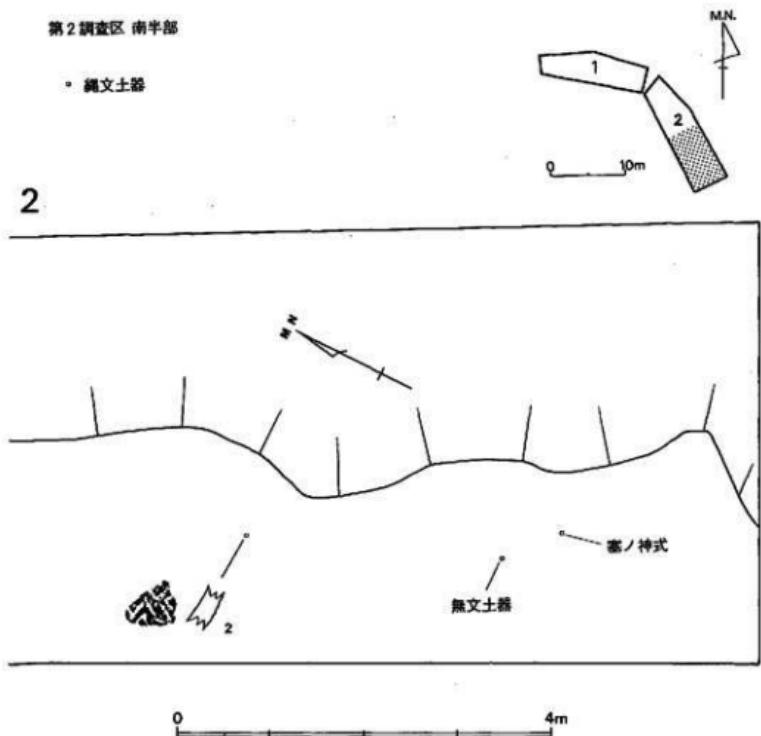


第5図 2層遺物出土状況 (1/60)



第6図 3層遺物出土状況 (1/60)





第8図 5層遺物出土状況 (1/60)

(4) 第5層 (第8図)

第5層では、第2区南半部で3点の土器が出土したにすぎない。いずれも同層上部に限られ、押型文、塞ノ神式、無文土器で、縄文早期に位置づけられるものである。

註1 萩島和明・伴耕一朗『百花台広域公園建設に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書』長崎県文化財調査報告書第92集 長崎県教育委員会 1988

註2 町田利幸・浦田和彦『礫石原遺跡』島原市文化財調査報告書第4集 島原市教育委員会 1988

III 遺 物

1. 繩文時代の土器 (第9~12図, 図版6~8, 表2・3)

今回の調査では、2,285点の縄文土器が出土した。そのほとんどを占めるのは、縄文晩期の土器で2,281点出土しており、これ以外の4点が縄文早期の土器である。40点を図化した。

(1) 縄文早期の土器 (第9図, 図版6・8)

塞ノ神式1点、押型文2点、無文土器1点が縄文早期の土器として抽出できた。5層上部を中心している。

塞ノ神式土器

第2区5層上部から出土し、とりわけの際には網目状の細かい燃糸文が観察され塞ノ神式と認定した。しかし、その後整理の途中で文様が無くなっていることに気づいた。風化を受けもろくなっていたが、洗浄において器表が剥落したものと考えられる。薄手のつくりで、器表は粗れている。外面はぶい赤褐色、内面は橙色を呈する。胎土に1mm大の石英砂、角閃石を含み、焼成はやや甘い。

押型文土器 (第9図1・2)

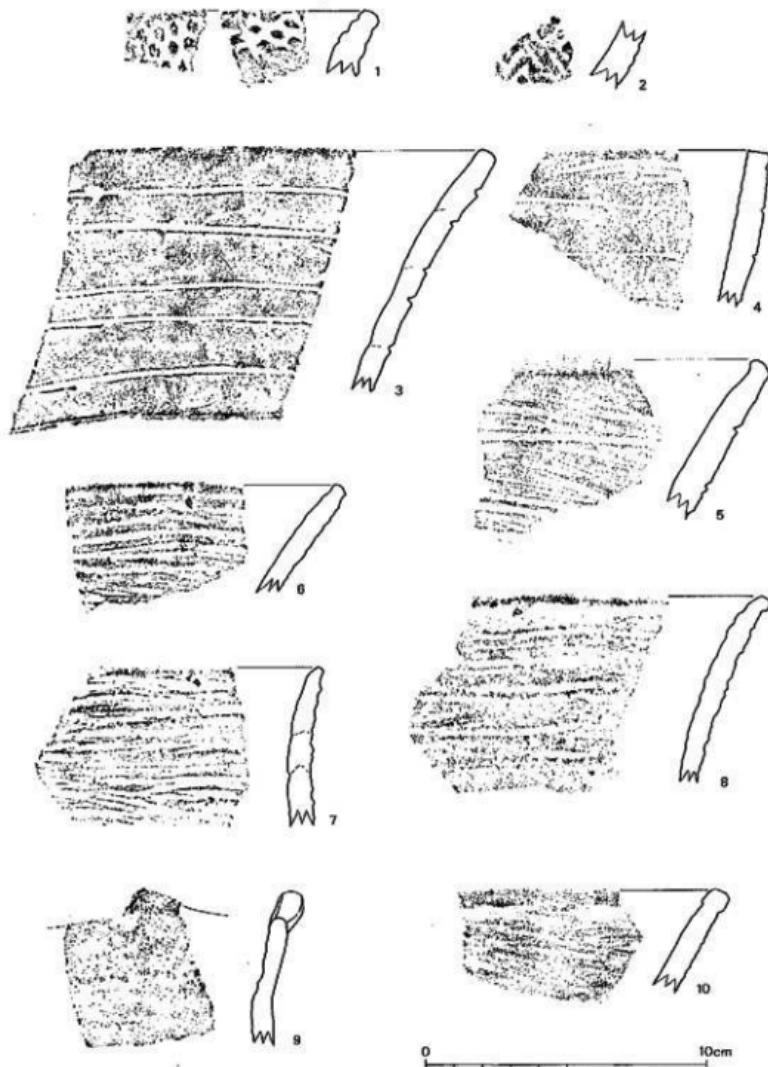
2点ある。1は、楕円押型文の資料で、第1区4層出土。短く外湾する口縁部片で、外面と内面上部に長さ6mmほどの楕円押型文を施している。楕円の長軸が表裏で逆になっており、内面を横位に施文したとすれば、外面は縦位に施したことが、文様のトレースを重ねてみて判った。小片ではあるが残りがよく、文様も鮮明である。2は、山形押型文の胴下半部資料で、第2区5層出土。山形文様は3mmほどの幅をもち、部分的につぶれ、やや明瞭さを欠いている。

(2) 縄文晩期の土器 (第9~12図, 図版6~8)

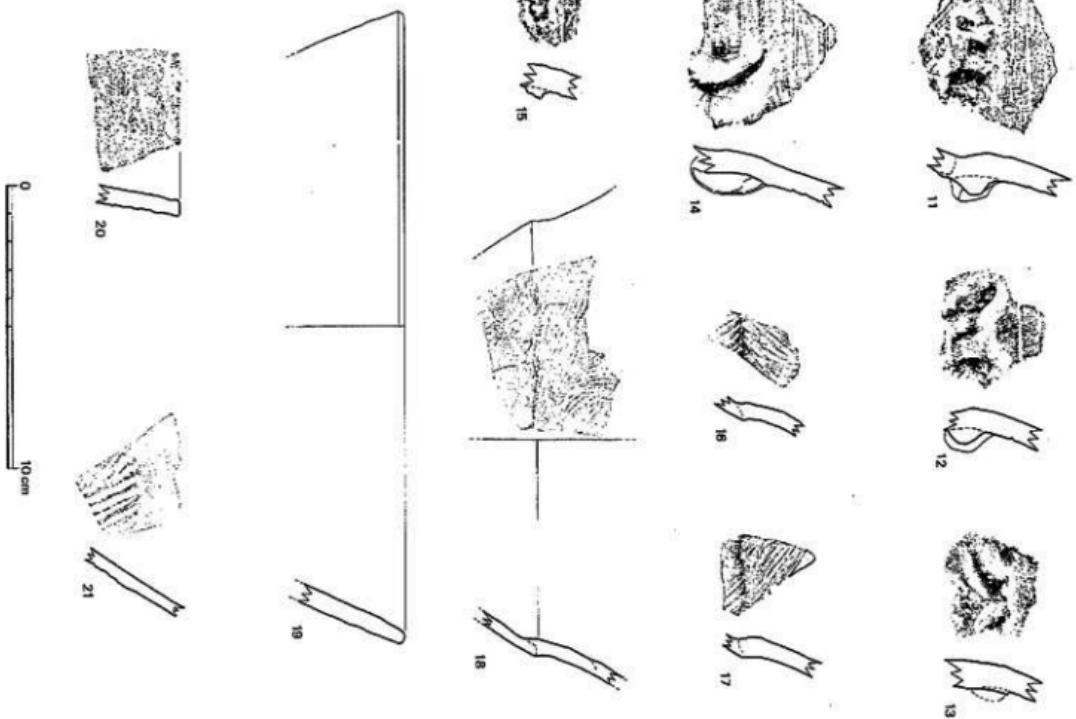
2,281点出土した内38点を図化した。粗製土器と精製土器に分けられるが、器種ごとに記述したい。

深鉢形土器 (3~20)

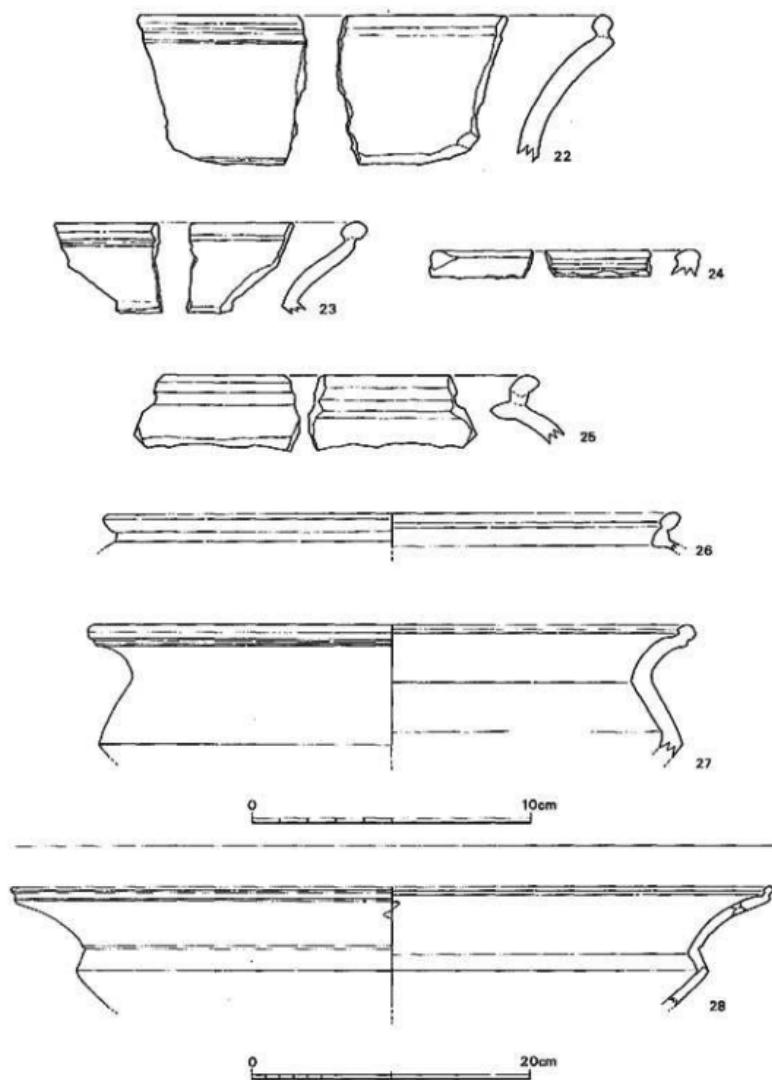
3~5は粗製深鉢で、横位に粗い条痕を施すものが多い。3~5は、外面に数条の沈線をもつもので、胴部の屈曲部には11~15のリボン状あるいは蝶ネクタイ状と呼ばれる突起が付くことが考えられる。このタイプは、条痕をナデ消して平滑に仕上げるものが多く、3のように半精製的なものもある。リボン状突起は、山形(11~15)、蝶ネクタイ形(12)、ヒゲ形(13)、耳形(14)などの形態がある。6~8は、屈曲部から口縁は前者に比べ短く外反し、リボン状突起を欠くものであろう。9は口縁端部にヒレ状の突起をもち、10も同様のヒレ状突起をもつ



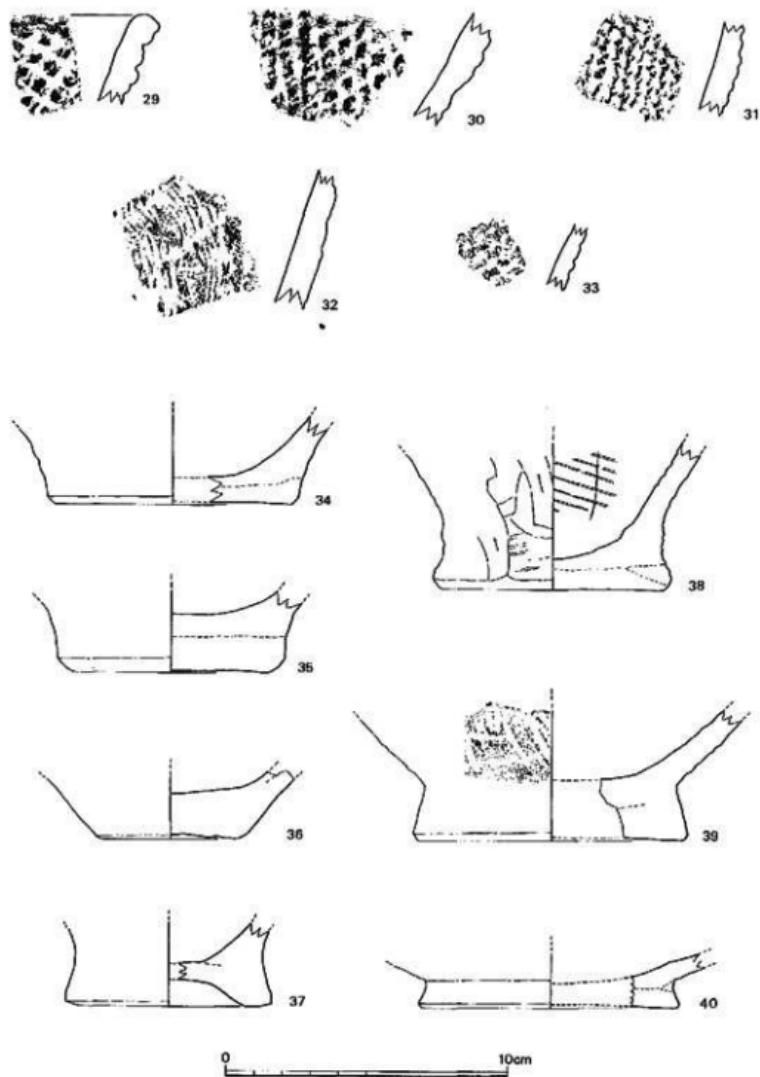
第9図 繩文土器① (1/2)



第10圖 條文土器② (1/2)



第11図 繩文土器 ③ (1/2・1/4)



第12図 縄文土器④ (1/2)

ものではないかと考える。

16~21は、精製深鉢である。16~18は形状・特徴から同一個体と考えられるものである。屈曲部径が15.5cmほどの小形で精巧なつくりの深鉢である。外面は曲線的に区画され、条痕で埋めている。区画内には丹の痕跡が認められ、特殊品であったことが考えられる。16・18は第1区2層から出土しているが、17は第2区3層から出土している。19・20は、直線的にのびる口縁で類似した形態をもつものと思われるが、20の外面にはススが付着していることが注目される。21は浅鉢の可能性ももっている。外面に粗い条痕を残している。

浅鉢形土器（22~28）

22~28は精製浅鉢である。22・23・27・28は、胴部が「く」字形に屈曲し、頸部は長くのび、口縁外方に沈線がめぐるものである。27は、口頸部が比較的短かく、口径21.9cmの小形品である。22・28は大形品で、28は口径の推定値は54.8cmである。23は、口縁端部を丸く肥厚しており、やや形態が相違する。

24~26は、扁球状の丸い胴部から口頸部が短く直立するもので、口縁にはしばしばヒレ状の突起を有するものである。26は推定口径28cmのわりと小形の品であるが、25はぶ厚く比較的大形になることが考えられる。

組織痕土器（29~33）

組織痕土器は20点出土しており、5点を図化した。29・30・33は格子目の網目、31は籠目、32は席目の組織圧痕を有している。内面は31以外はわりと丁寧に仕上げられ、32・33は研磨されている。20点のうち網目痕は15点、籠目痕は4点、席目痕は1点が出土している。

底部（34~40）

底部は26点出土し、その内7点を図化した。34~39は深鉢、40は浅鉢の底部である。34~36・38は平底、37はあげ底、39・40は円盤状の台付きの底部である。34・36・37は器表を平滑に仕上げられているが、35・39・40は条痕、38は板状器具によるナデつけの粗い調整のままである。

丹塗土器（図版8）

丹塗土器片は4点出土している。4点ともに外面に丹を塗装しているが、3点（A・B）は橙色を呈する器表に黄丹色の丹塗、1点（C）は黒褐色の器表に深紅色の丹塗を施している。

前者は壺、後者は壺あるいは浅鉢の可能性をもっているが、前者は土師器の疑いもぬぐいされない。前者は3点ともに第1区2層出土で、1mmほどの白色砂、石英砂、角閃石を含んでおり、焼成はやや甘い。同一個体の可能性をもつ。後者はいわゆる黒色研磨土器で、胎土は精良、焼成良好である。第2区2層出土。

表2 織文土器觀察表①

番号	形質・部位	位	文様・手法・特徴	色調	胎土	焼成
1 1 4 区 部	深口 鉢	外縁	やや外溝する口縁。外面と内面端部に横円押縞文を施す。	外、黒褐色(5YR3/6) 内、に古い赤褐色(5YR3/6) 器肉、褐灰色(5YR3/6)	0.5~2mm白色砂、0.5~1mm赤砂、石英、角閃石含む。	わりと 良 好
2 2 5 区 部	深口 鉢	外縁	外面は山形押型文を施す。内面はナメ仕上げ。	外、緑色(7.5YR3/6) 内、黄褐色(10YR3/6) 器肉、内と同じ	0.5~2mm白色砂、石英、角閃石含む。	や や 好
3 1 2 区 部	深口 鉢	外縁	外反する口縁で、外面には6条の沈縫を施す。 器表は滑らかなナメ仕上げ。	に古い緑色(7.5YR3/6)	1~2mm白色砂、石英、角閃石含む。	良 好
4 2 2 区 部	深口 鉢	直縁	直線的に立ち上がる口縁で、外面には6条の沈縫を施す。 外面は平滑ナメ、内面は撻付系。	外、明赤褐色(2.5YR4/6) 内、緑色(5YR3/6) 器肉、内と同じ	0.5~1mm石英、角閃石含む。	普 通
5 1 2 区 部	深口 鉢	直縁	直線的に開く口縁で、端部を上方にまみ気味に仕上げている。外面は横位矢張網織された3条の沈縫を施す。内面は平滑なナメ仕上げ。	外、明赤褐色(2.5YR4/6) 内、(5YR3/6)	0.5~1mm白色砂、石英、角閃石含む。	普 通
6 2 2 区 部	深口 鉢	直縁	狭く開く口縁で、外面は横位矢張網織され、内面には滑らかなナメ仕上げしている。	外、黒褐色(7.5YR3/6) 内、褐褐色(7.5YR3/6) 器肉、に古い褐色(7.5YR3/6)	0.5~1.5mm白色砂、石英含む。	わりと 良 好
7 2 2 区 部	深口 鉢	直縁	底立形状に立ち上り、先端は尖り気味におさめる。外縁は横位の粗い条模、内面に条模をナメ仕上げしている。	外、緑色(5YR3/6) 内、に古い緑色(7.5YR3/6) 器肉、褐灰色(7.5YR3/6)	0.5~2mm白色砂、石英含む。	わりと 良 好
8 1 2 区 部	深口 鉢	直縁	やや外溝気味にのびる口縁で、外面とともに横位の粗い条模が施されている。外面にはスグが付着している。	外、緑色(5YR3/6) 内、灰褐色(7.5YR3/6)	1~2mm白色砂、石英含む。	わりと 良 好
9 2 2 区 部	深口 鉢	直縁	ヒレ状突起を持つ複製深鉢。外面ともにナメ仕上げだが、内面は粗い。外縁にはかなりスグが付着している。	外、に古い赤褐色(5YR3/6) 内、外と同様 器肉、暗褐色(7.5YR3/6)	0.5~3mm白色砂多く含む。0.5~1mm石英、角閃石若干含む。	普 通
10 2 2 区 部	深口 鉢	直縁	直脚部に開く口縁。底部は肥厚されている。外面は横位の条模、内面は条模をナメ仕上げしている。	外、緑色(7.5YR3/6) 内、に古い緑色(7.5YR3/6) 器肉、褐灰色(7.5YR3/6)	0.5~1mm白色砂、石英含む。多少是手壓痕母含む。	普 通
11 1 2 区 部	深口 鉢	直縁	直曲部にリボン状突起をもつ深鉢形。外面は横位の条模で横斜状の筋縫が施される。内面には滑らかなナメ。下平は横斜カリ。	外、に古い赤褐色(5YR3/6) 内、黒褐色(5YR3/6) 器肉、に古い赤褐色(5YR3/6)	1mm白色砂、石英含む。角閃石若干含む。	普 通
12 2 1 区 部	深口 鉢	直縁	直曲部にリボン状突起をもつ深鉢形。外面は平滑なナメ仕上げで横斜が施された。内面はナメ仕上げ。	外、明赤褐色(2.5YR3/6) 内、緑色(5YR3/6) 器肉、内と同じ	1mm石英、角閃石含む。	普 通
13 1 2 区 部	深口 鉢	直縁	直曲部にV字状の突起をもつ。外面は平滑なナメ、内面はやや粗いナメ仕上げ。	外、に古い赤褐色(5YR3/6) 内、緑色(5YR3/6) 器肉、内と同じ	1mm白色砂、石英、角閃石含む。	普 通
14 1 2 区 部	深口 鉢	直縁	直曲部にX字状の突起が付くもの。外面は平滑なナメ仕上げで横斜が施されている。内面はナメ仕上げ。	外、暗赤褐色(2.5YR3/6) 内、に古い赤褐色(10YR3/6) 器肉、褐灰色(7.5YR3/6)	0.5~1mm白色砂、石英、角閃石含む。	普 通
15 1 4 区 部	深口 鉢	直縁	直曲部に小さなリボン状の突起が付くもの。外縁は平滑なナメ仕上げで横斜が施されている。内面は滑らかなナメ仕上げ。	外、暗赤褐色(2.5YR3/6) 内、明赤褐色(2.5YR3/6) 器肉、に古い赤褐色(2.5YR3/6)	0.5~2mm白色砂、石英含む。	普 通
16 1 2 区 部	浅口 鉢	直縁	直曲部付近の横片。外縁はケンマのあと凹面内に全体で施す。内面は横位のケンマ。17~18と同一個体と思われる。	外、灰褐色(7.5YR3/6) 内、外と同様 器肉、橙色(7.5YR3/6)	0.5~1mm白色砂含む。若干赤色砂含む。	良 好
17 2 3 区 部	浅口 鉢	直縁	横斜深鉢形底盤。外縁はケンマのあと試驗内に条模文を施す。内面は横位のケンマ。区文条縫は片が残っている。	外、黒褐色(7.5YR3/6) 内、外と同様 器肉、褐色(7.5YR3/6)	0.5mm以下白色砂含む。若干赤色砂含む。	良 好
18 1 2 区 部	浅口 鉢	直縁	脚手つくりの横斜深鉢形。外縁は丁度でケンマしたあとと断続的に区別し粗かい条模を施し、丹が残っている。内面は横位のケンマ。	外、黒褐色(7.5YR3/6) 内、褐色(7.5YR3/6)	0.5mm以下白色砂含む。若干赤色砂含む。	良 好
19 1 1 区 部	深口 鉢	直縁	不定口縁が22.4cmの小形横斜深鉢。直線的に開く口縁で、外面とともにケンマされている。	外、に古い赤褐色(5YR3/6) 内、褐褐色(5YR3/6)	1mm以下石英含む。若干角閃石含む。	良 好
20 1 4 区 部	深口 鉢	直縁	直線的にのび、上方が平坦な横斜深鉢口縁。外縁は全面にスグが付着し、内面はケンマ。	外、黒褐色(5YR3/6) 内、に古い緑色(7.5YR3/6) 器肉、内と同じ	1mm以下白色砂含む。若干赤色砂、石英を含む。	良 好

表3 梶文土器観察表②

番号	調査区段	器部	種類	文様・手法・特徴	色 調	地 土	状 成
21	1 区 2 層	浅鉢 口・側	精製浅底の体部部である。外底下には解皮の条痕を残す。その後ケンマしている。	外、灰褐色(7.5YR3/6) 内、に赤い褐色(7.5YR3/6) 器内、外と同じ	0.5mm以下白色砂、石英、角閃石含む。	良 好	
22	2 区 土壤1	浅 鉢 口・側	わりと大型の精製浅底口邊部。強く外溝し。端部は上方へ立ち上がり多くおさめら。内外面ともケンマされ、端部外方に凹痕が1本ある。	外、に赤い褐色(10YR3/6) 内、黒褐色(10YR3/6) 器内、外と同じ	0.5mm以下石英、角閃石含む。	良 好	
23	2 区 3 層	浅 鉢 口・側	強く圓曲する精製浅底口邊部。端部は丸く肥厚されている。内外面はケンマされ、口辺部分に凹痕が1本ある。	外、黒褐色(10YR3/6) 内、黒褐色(10YR3/6) 器内、褐色(10YR3/6)	0.5mm以下白色砂、角閃石含む。	良 好	
24	1 区 4 層	浅 鉢 口	精製浅底の口辺小片。内外面ともケンマされ、内外面に凹痕が1本はいる。	黒褐色(7.5YR3/6)	0.5mm以下白色砂、石英含む。	良 好	
25	1 区 2 層	浅 鉢 口・側	やや器手の精製浅底片。丸い体部から細く腹部は立ち上がり、口辺は肥厚され丸くおさめる。体手内面に粗面が残る金網面で覆われる。	褐色(7.5YR3/6)	1mm以下石英、角閃石含む。	良 好	
26	1 区 2 層	浅 鉢 口・側	丸い体部から、強制的に立ち上がり、口辺は肥厚され丸くおさめる。金網面で覆われる。推定口径28cmの小形で、構造はつくりである。	外、褐色(5 YR3/6) 内、外と同じ 器内、に赤い褐色(7.5YR3/6)	0.5mm以下白色砂、石英、角閃石含む。	良 好	
27	1 区 2 層	浅 鉢 口・側	ソロボントの脚部から端部は強く外溝し、口辺は丸くおさめる。全表面ケンマされ、口辺外方に凹痕が1本ある。推定口径21.9cmの精製浅底。	外、に赤い褐色(7.5YR3/6) 内、外と同じ 器内、淡青褐色(7.5YR3/6)	0.5mm以下石英、角閃石含む。少少、赤色含む。	良 好	
28	2 区 2 - 3層	浅 鉢 口・側	推定口径54.8cmの大腹浅底。全面を丁寧にケンマし、美しいづくりである。端部外方に凹痕が1本ある。焼成後守刀がみられる。部分的にスグリがある。	外、黒褐色(5 YR3/6) 内、外と同じ 器内、褐色(7.5YR3/6)	0.5mm以下白色砂、石英、角閃石含む。	良 堅 樹	
29	1 区 2 層	粗織柄 口 横	8mmほどの格子目状の網目底。丸い口と脚部から内面は平滑なナゲ仕上げ。	暗赤褐色(5 YR3/6)	0.5 - 3mm白色砂、1mm以下石英、角閃石含む。	わりと 良 好	
30	1 区 3 層	粗織柄 口 横	7mmほどの斜格子網目底。内面はわりと平滑なナゲ仕上げ。	外、灰褐色(5 YR5/6) 内、黒褐色(5 YR5/6) 器内、に赤い褐色(5 YR5/6)	1mm以下石英、角閃石含む。	善 滑	
31	2 区 2 層	粗織柄 口 横	窓が外側に付く。内面はやや粗いナゲ仕上げ。	外、褐色(2.5YR3/6) 内、褐色(7.5YR3/6) 器内、暗赤色(5 YR3/6)	0.5 - 2mm白色砂、石英、角閃石含む。	や や 甘 い	
32	不明 不明	粗織柄 口 横	2cmほどの間隔をもつ窓目底。内面は丁寧にケンマされている。	外、褐色(7.5YR3/6) 内、に赤い褐色(7.5YR3/6) 器内、褐色(5 YR3/6)	1mm(色砂、石英、角閃石含む。	善 滑	
33	1 区 2 層	粗織柄 口 横	深い網目底が付く。内面はケンマされる。わりと薄手である。	外、褐色(7.5YR3/6) 内、に赤い褐色(7.5YR3/6) 器内、内と同じ	1mm以下白色砂、石英、角閃石含む。	わりと 良 好	
34	2 区 2 層	深 鉢	半底でやや薄手となり。外面は条痕をナゲ仕上げ。内面もナゲ。	外、褐色(7.5YR3/6) 内、褐色(5 YR3/6) 器内、内と同じ	0.5 - 1mm白色砂、石英、0.5 - 2mm石英含む。	わりと 良 好	
35	1 区 2 層	深 鉢	下端が丸味をもち、ぶ厚い底部。外側と外底に素痕がはり、内面はナゲ仕上げ。内面にはススが付着し黒ずんでいる。	外、灰褐色(5 YR5/6) 内、淡青褐色(5 YR5/6) 器内、に赤い褐色(5 YR5/6)	0.5 - 2mm白色砂、0.5 - 1mm石英、角閃石含む。	良 好	
36	2 区 3 層	深 鉢	下端はやや丸味をもち、体部は50°ほどの角度で広がる。外側は平滑ナゲ。内面はナゲ仕上げでやや黒ずむ。外底はそのままの低い面。	外、褐色(7.5YR3/6) 内、に赤い褐色(7.5YR3/6) 器内、内と同じ	1mm以下白色砂、石英、角閃石含む。	善 滑	
37	1 区 2 層	深 鉢	あげ窓の底部。全面ナゲ仕上げされる。	外、褐色(7.5YR3/6) 内、褐色(7.5YR3/6) 器内、外と同じ	0.5 - 2mm白色砂、0.5 - 1mm石英、角閃石含む。	善 滑	
38	2 区 2 層	深 鉢	しっかりした焼きの底部。外側は板状器具でナゲつけている。内面はハク状の条痕をナゲ消している。内面は黒ずんでいる。	外、内上、褐色(7.5YR3/6) 内底、板状褐色(5 YR3/6) 器内、外と同じ	1mm以下白色砂、石英含む。	良 堅 樹	
39	2 区 2 層	深 鉢	安定した台状の底部。台部は平滑ナゲ。体部から内面下部は粗面。内底はナゲ仕上げ。内底は土全体で黒ずんでいる。	外、褐色(7.5YR3/6) 内、褐褐色(10YR3/6) 器内、に赤い褐色(7.5YR3/6)	1mm白色砂、石英、角閃石含む。	わりと 良 好	
40	2 区 2 層	浅 鉢	小さく平べったい台状の底部。体部は全底。内面と台部は平滑な仕上げ。	外、褐色(5 YR3/6) 内、灰褐色(5 YR3/6) 器内、褐色(5 YR3/6)	0.5 - 2mm白色砂、石英、1mm角閃石含む。	善 滑	

2. 縄文時代の石器（第13～19図、図版9～12、表4・5）

1,300点ほどの縄文時代の石器は、石鎚をはじめスクレイパー・使用痕ある剥片・打製石斧・小型円盤状石器・蔽石・磨石・砥石・剥片・碎片・石核が出土している。しかし、大半は碎片であり、その中から60点を選んで記載し、後に計測表をついた。また、石材は黒曜石が圧倒的に多く、ほかには石器の器種によって安山岩や砂岩も見られる。

石鎚（第13図、1～9）

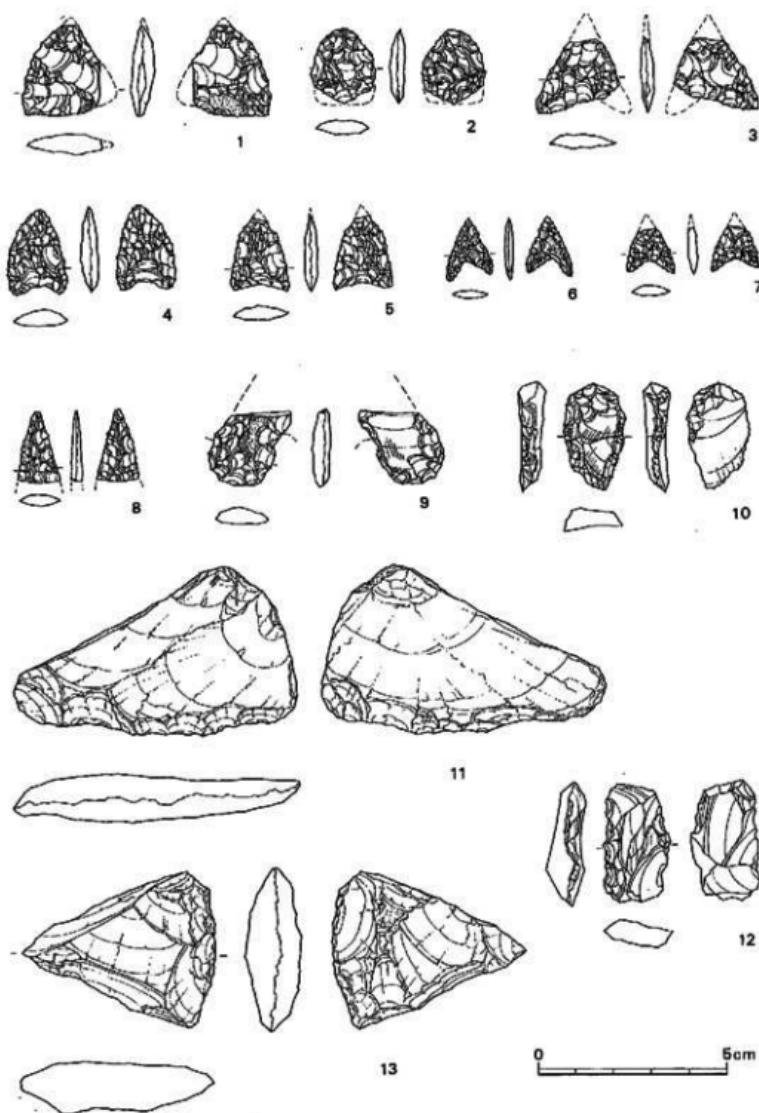
9点出土しており全て記載した。1～4・9は漆黒色の黒曜石製、5・8は灰青色の黒曜石製、6・7は灰白色の黒曜石製である。1は片方の脚部を欠損する。全体に二次加工が大まかで、表面下端には自然面が残る。1層（表土）出土。2はやや粗雑な感じの二次加工を施し、両脚部を欠損する。2層出土。3は先端部と片脚部を欠損する。1と同じく二次加工が大まかで比較的薄い。長さ2.8cm前後のものであろう。2層出土。4は完形品で、図でもわかるように全体的な左右の均整がとれておらず、いびつな感じを与える。2層出土。5は先端部を欠損。両側縁の上方に若干突出し、平面形が五角形状を呈する。基部の抉りは浅く内湾する。3層出土。6は完形品の局部磨製石鎚で、表裏とも中ほどに磨製面を残す。研磨によって薄く仕上げ、脚部は左右不均等である。3層出土。7は先端部を欠損、規模・形態は5に酷似するが、磨製面は認められない。石鎚としては唯一4層からの出土である。8は先端部のみが残ったもので、もとの形態は判然としない。かなり鋭角な先端部でしかも二次加工は丁寧である。全体にバティナが認められる。2層出土。9は大形の石鎚の片脚部のみが残ったものと考えられる。裏面には大きく主要剥離面が認められ、表面には自然面が若干残る。3層出土。

スクレイパー（第13図、10～13）

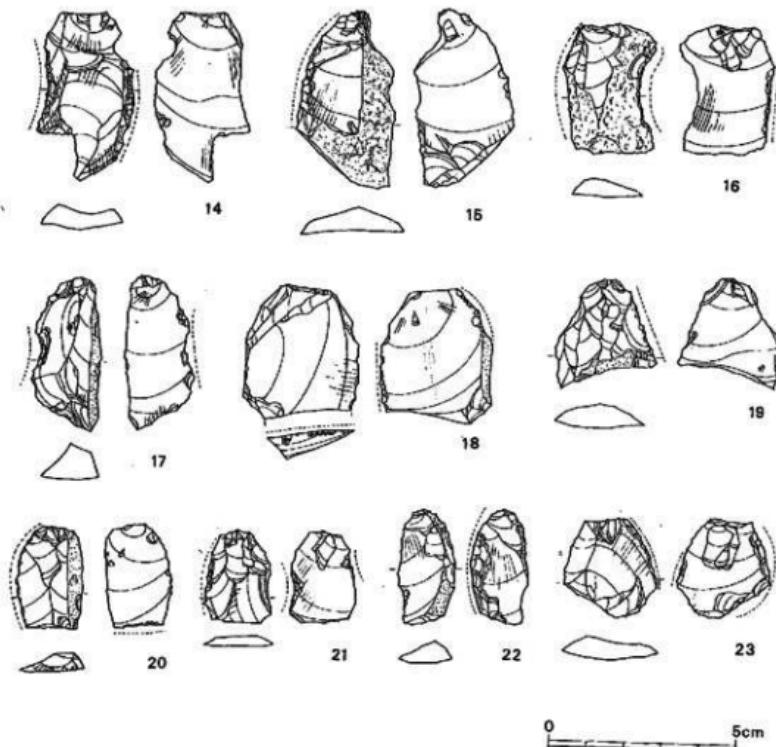
4点出土。10は漆黒色の黒曜石製で、平坦な打面より剥離された小形の縦長剥片を使用している。両側縁の表面に鋭く丁寧な刃部加工を施す。3層出土。11は安山岩製で、一側縁に刃部加工を表裏より施す。背面は自然面が残り、若干ではあるが全体にバティナが認められる。2層出土。12は漆黒色の黒曜石製で、表面に刃部加工がやや粗雑に施されている。2層出土。13は安山岩製、平面形が三角形を呈する。ゆるく外湾した一側縁に表裏から刃部加工が多少認められ部分的にバティナが認められる。3層出土。

使用痕ある剥片（第14図、14～23）

10点出土。すべて漆黒色の黒曜石製である。14は打面部のみに自然面が残る縦長剥片で、両側縁に明確な使用痕が表面のみに認められる。1層出土。15は自然面の打面から剥離された縦長剥片で一側縁表面のみに使用痕が認められる。また、表面には下半にかけて大きく自然面が残る。2層出土。16は平坦な打面部より剥離された縦長剥片で、両側縁に使用痕が多少認められる。表面には大きく自然面が残る。2層出土。17は平坦な打面部より剥離されたやや厚身の縦長剥片である。鋭角な一側縁に使用痕が内湾するように表裏から認められる。表面一部に自

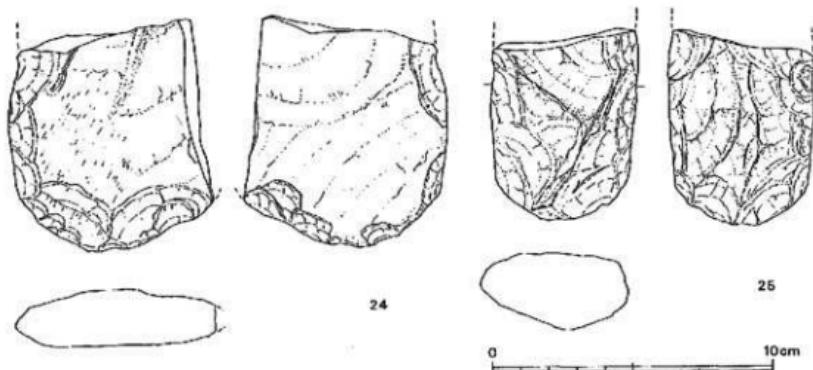


第13図 繩文時代の石器① (2/3)



第14図 繩文時代の石器②(2/3)

然面が残る。1層出土。18は自然面打面から剥離されたかなり大形の縦長剝片であったと考えられる。下半は折れもしくは折られたものであろうが、その部分も含めて全体に使用痕が認められ、部分的にパティナがある。2層出土。19は打面部と表面の一部に自然面が残る。下半は折れたものと考えられる。3層出土。20は小形の縦長剝片で打面部から一侧縁にかけて自然面が残る。18と同様に下半の折りもしくは折れた面にも使用痕が認められる。2層出土。21は非常に薄い剝片で打面部は若干の調整された痕があり、表裏に使用痕が認められる。2層出土。22は自然面から剥離された小形の縦長剝片である。断面形が三角状をなし、厚い方の側縁裏面に明確な使用痕が認められる。2層出土。23は自然面から剥離されたやや幅広の剝片で表裏のそれぞれ部分的に使用痕が認められる。2層出土。



第15図 縄文時代の石器③(1/2)

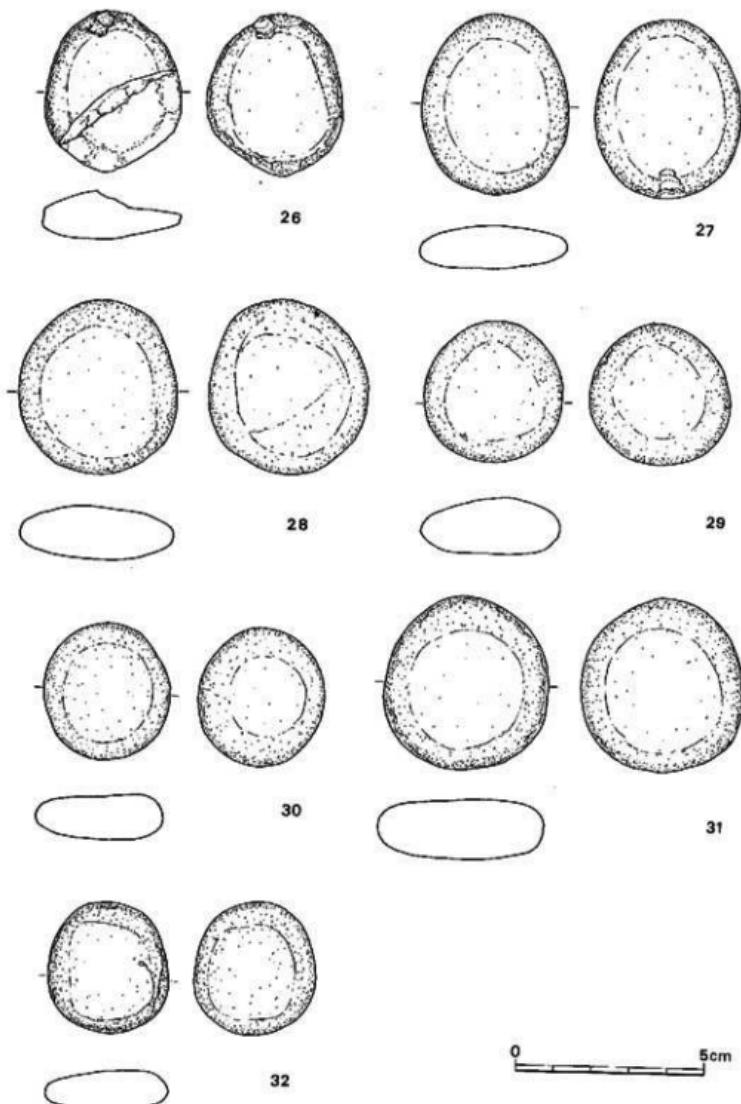
石斧（第15図、24・25）

打製石斧が、1区の2層と2区の2層からそれぞれ1点ずつ出土した。2点とも安山岩製である。24は上半と側面を大きく破損し刀部の一部が残存したものと考えられる。二次加工はかなり簡素で周縁部に多少施している程度である。表面の一部には使用時における磨滅した痕が認められる。縄文時代晩期に多く出土する扁平打製石斧であろう。25は上半を欠損する。粗雑な二次加工のうえ、著しく風化作用を受けている。

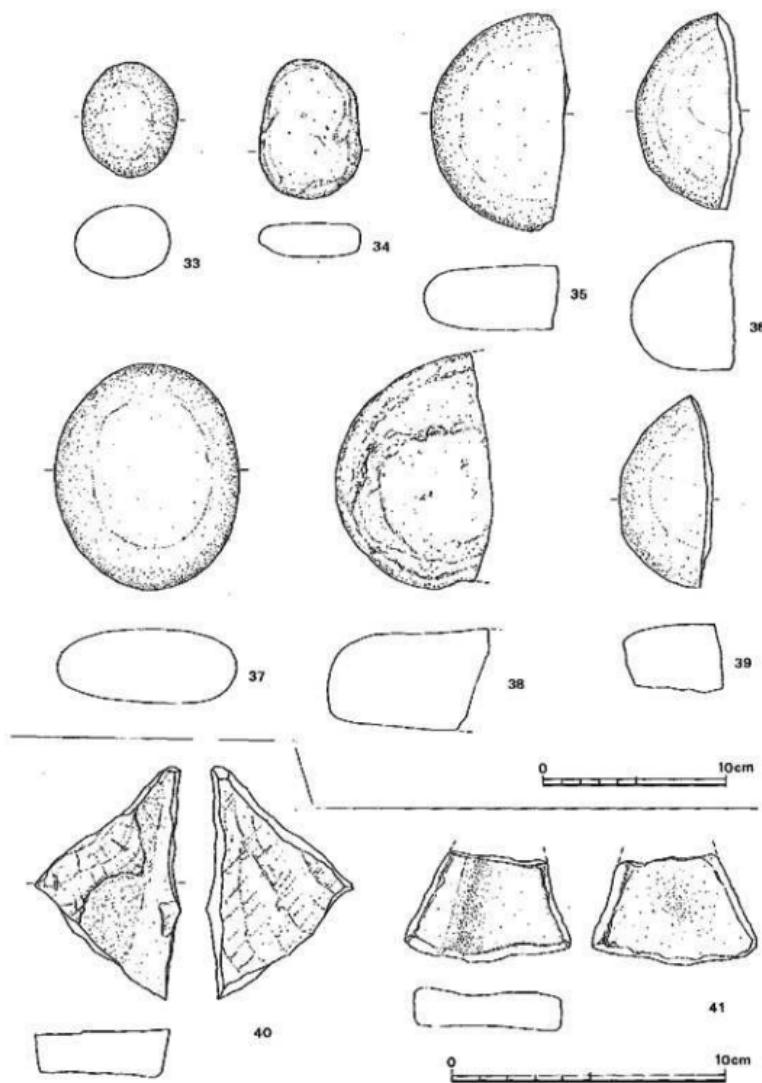
小型円盤状石器（第16図、26～32）

砂岩製円碟で、直径が5cm弱ほどの扁平な石器が7点出土している。26はやや軟質な感じの砂岩製で表面の半分ほどは大きく剥落している。周縁の全体には敲打痕が明確に認められる。特に剥落した方はかなりの敲打があったものと考えられ、周縁の一部が直線状となっている。おそらく表面の剥落も敲打時のものと考えられる。3層出土。27は卵形に近く、非常に粒子の細かい硬質の砂岩製である。上下、特に下端に明確な敲打痕が認められる。2層出土。28は硬質な感じの砂岩製で部分的にかすかな敲打痕が認められる。2層出土。29はほぼ円形に近い平面形を呈する。一部分に明確な敲打痕が認められる。2層出土。30はやや硬質な感じの砂岩で一部に多少敲打痕が認められる。断面形をみると若干、凹状になっている。3層出土。31は粒子がやや粗い硬質の砂岩製で、平面形はほぼ円形に近い。周縁全体に敲打痕が認められ部分によっては顕著である。7点のなかでは最も重い。32は規模・重量ともに7点中最も小形のものである。硬質の砂岩製で、周縁の一部にかすかな敲打痕が認められる。

なお、本石器については後で若干触れてみたい。



第16図 縄文時代の石器④ (2/3)



第17図 桐文時代の石器⑤ (1/3・1/2)

敲 石（第5図、33・34）

2点出土。33は安山岩製で比較的小形の礫を使用している。下端の一部に明確な敲打痕が認められる。重さ162g、2層出土。34は同じく安山岩製で扁平な礫を使用している。全体に多少風化を受けているが、上下端には明確な敲打痕、一部には剥落痕も認められる。重さ114g、2層出土。

磨 石（第5図、35～39）

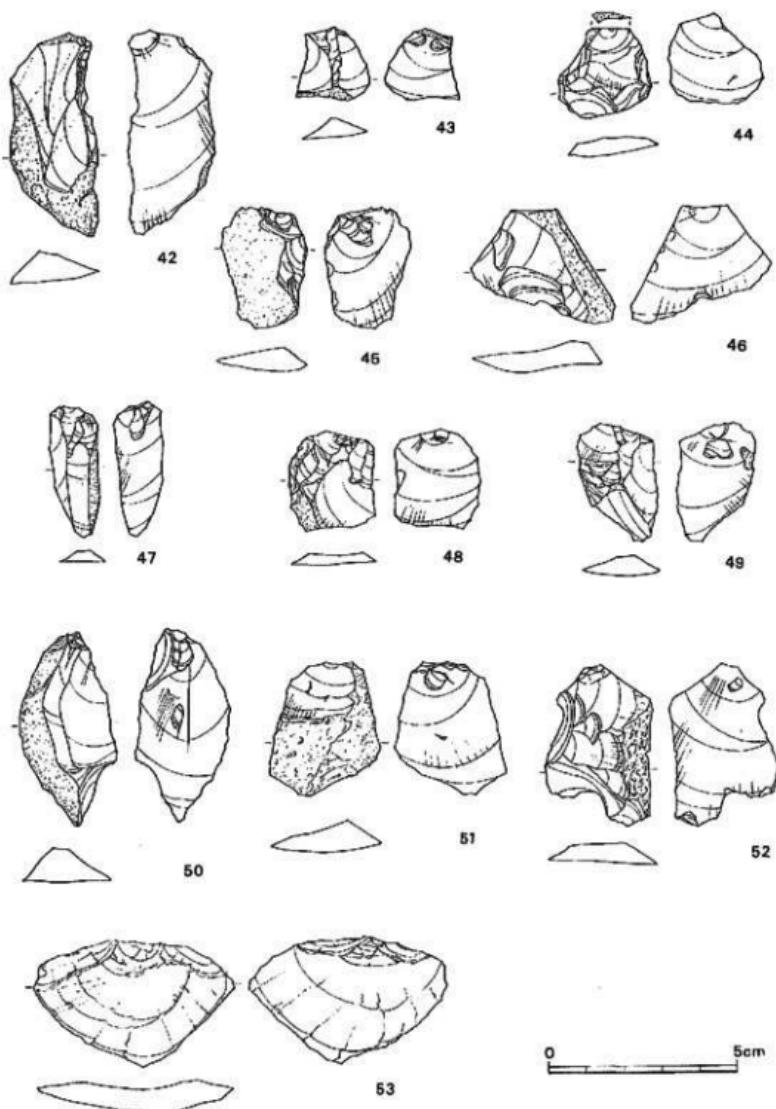
5点出土。35はやや軟質な感じの砂岩製で、半分ほどを欠損する。表裏に研磨面が認められる。また、残存する周縁部において若干、敲打痕も認められる。2層出土。36は硬質な砂岩で礫中の砂粒子が粗く小石もみられる。半分強を欠損、表裏に研磨面が、周縁には敲打痕も認められる。1層出土。37は硬質の砂岩製でやや粒子が粗い完形品である。表裏に研磨面が認められるが、片方の面はややザラついた感じである。1層出土。38は半分ほどを欠損する。粒子の粗い砂岩製であるが、全面に風化を受けており研磨面は不明である。一応、磨石としてあつかった。2層出土。39は表面の一部に研磨面が認められるもので、大半を欠損する。砂岩製で、2層出土。なお、38・39は礫の色調もまだらの部分があつたり、剥落や風化も著しいことなどより、加熱を受けた可能性も十分に考えられる。

砥 石（第5図、40・41）

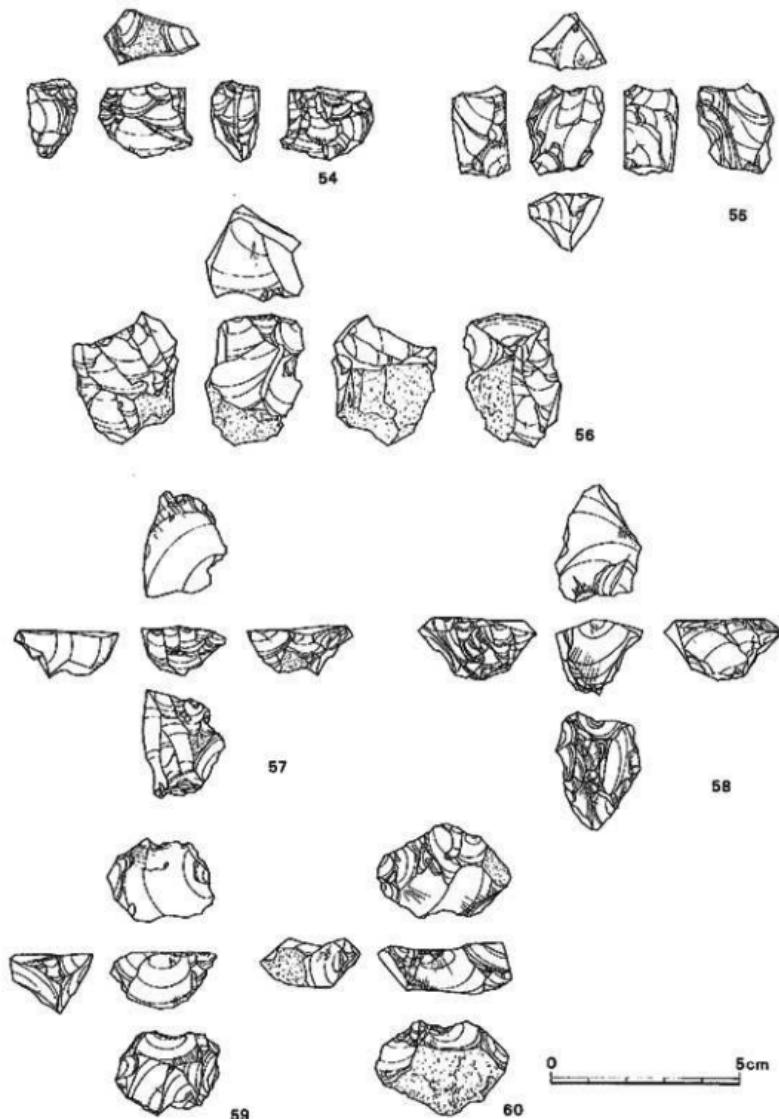
2点出土する。40は全体を大きく剥落、欠損し表面の一部に研磨された面が残る。若干、軟質な感じで粒子の細かい砂岩製。研磨された面は、わりと滑らかで極わずかではあるが凹状になっている。2層出土。41は小形のもので、上半を欠損する。軟質な砂岩で粒子は先の40よりも粗い。表裏両面に研磨された面があり、片方の面は溝状に凹む。多少、風化を受けているとされる。3層出土。

剥 片（第18図、42～53）

本遺跡出土の石器の中でも、剥片と碎片がほとんどを占める。内、剥片を12点抜き出して記載した。42は自然面を打面に剥離された縦長剥片で、表面に自然面を大きく残す。細かな不純物が混入し筋状に認められる。2層出土。43は小形のやや幅広の剥片で打面部と下端は自然面が残る。2層出土。44は打面部のみに自然面を残す、小形の幅広の剥片である。不純物の混入が若干認められる。2層出土。45は平坦な打面部から剥離された剥片で、表面に大きく自然面を残す。42と同じく不純物が筋状に認められる。2層出土。46は自然面を打面に剥離された幅広の剥片で側面にかけて自然面が残る。部分的に若干のバティナが認められる。1層出土。47は小形の縦長剥片で、平坦な打面より剥離されている。片方の側面に自然面が多少残る。2層出土。48は縦長剥片の下半が折れ欠損しているもので、打面部にはわずかに調整された痕が認められる。2層出土。49は打面部のみに自然面が残り、不純物の混入が認められる。2層出土。50は調整された打面部から剥離された縦長剥片で、表面片方の側縁に自然面が残る。全体に著しくバティナが認められる。2層出土。51は平坦打面からのもので表面に大きく自然面を



第18図 繩文時代の石器(⑤)(2/3)



第19図 繩文時代の石器 ⑦ (2/3)

表4 紹文時代の石器観察表①

石器計測表

()は原寸値、[]は推定値

番号	出土区	層位	石材	破損部	重さ(g)	大きさ(cm)			挟り(cm)	先端角度	備考
						長	幅	厚			
1	1区	1 層	黒曜石A	片側欠	2.6	(2.4)	(2.1)	0.5	—	—	80° 全体に、大まかな二次加工を施す。
2	2区	2 層	黒曜石A	脚部欠	1.2	2.0	1.7	0.4	—	—	85° 比較的に粗雑な二次加工を施す。
3	2区	2 層	黒曜石A	先端欠	1.2	(2.0)	(2.3)	0.4	[0.3]	[2.2]	[60°] 全体に、大まかな二次加工を施す。
4	1区	2 層	黒曜石A	完形品	1.3	2.2	1.1	0.5	1.2	0.2	80° 左の地盤がとれていよい。
5	1区	3 層	黒曜石B	先端欠	1.0	(2.0)	1.5	0.4	1.4	0.2	[70°] 若干、五角形状を呈している。
6	2区	3 層	黒曜石C	変形品	0.3	1.6	1.2	0.2	1.1	0.4	60° 脚部磨製石頭、脚部が左右不均等。
7	1区	4 层	黒曜石C	先端欠	0.4	(1.2)	1.3	0.3	1.2	0.3	[50°] 脚部が不均等。
8	1区	2 層	黒曜石B	下半欠	0.4	(1.9)	(1.2)	0.3	—	—	40° 鋭い先端部。全体にバティナあり。
9	2区	3 層	黒曜石A	大半欠	1.8	—	—	—	—	—	大型の石頭の脚部のみが残ったもの

スクレイパー計測表

番号	出土区	層位	石材	重さ(g)	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	備考		
								幅	厚	備
10	2区	3 層	黒曜石A	2.0	2.8	1.6	0.7	小形の短長削片の両側縁に細密な刃部加工を施している。		
11	1区	2 層	安山岩	36.8	4.5	7.6	1.3	背面は自然面が残る。全体に若干バティナが認められる。		
12	1区	2 層	黒曜石A	3.9	3.2	1.8	0.7	全体に粗雑で、片面からみ刃部加工を施す。		
13	2区	3 層	安山岩	22.0	4.2	5.2	1.4	ゆるく外溝した刃部。部分的にバティナが認められる。		

使用痕のある剝片計測表

番号	出土区	層位	石材	重さ(g)	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	備考		
								幅	厚	備
14	1区	1 層	黒曜石A	5.1	4.3	2.2	0.7	自然打面からの短長削片で両側縁に明瞭な使用痕がある。		
15	2区	2 層	黒曜石A	9.2	4.7	2.5	0.6	自然打面からの短長削片で表面には大きく自然面が残る。		
16	2区	2 層	黒曜石A	4.7	3.5	2.2	0.5	打面は平削で両側縁に使用痕があり表面に自然面が残る。		
17	1区	1 层	黒曜石A	6.3	4.1	1.8	1.0	打面は平削で内溝した側縁に細かな使用痕がある。		
18	1区	2 層	黒曜石A	11.0	3.5	3.0	0.6	自然打面からの大形の短長削片で全削面に使用痕がある。		
19	2区	3 層	黒曜石A	5.0	2.7	2.6	0.6	打面と裏面の一部に自然面が残る、多少使用痕あり。		
20	2区	2 层	黒曜石A	3.5	2.7	1.7	0.5	打面から裏面の側縁にかけて自然面が残る。		
21	2区	2 層	黒曜石A	1.6	2.5	1.7	0.3	かなり薄い剝片で、両側縁に明確な使用痕がある。		
22	1区	2 層	黒曜石A	1.8	3.1	1.5	0.6	三角形を呈した断面の早い側の側縁に使用痕がある。		
23	2区	2 層	黒曜石A	3.2	2.7	2.6	0.6	やや幅広の剝片で、部分的に使用痕がある。		

石斧計測表

番号	出土区	層位	石材	重さ(g)	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	備考		
								幅	厚	備
24	1区	2 層	安山岩	180	(7.7)	(6.7)	1.5	扁平で大形のものが想定される、裏面の一部に摩滅あり。		
25	2区	2 層	安山岩	105	(6.7)	5.1	2.7	かなり粗雑な二次加工で全削面に大きく風化を受けている。		

小型円盤状石器

番号	出土区	層位	石材	重さ(g)	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	備考		
								幅	厚	備
26	2区	3 層	砂岩	22.9	4.2	3.6	1.3	表面に大きく刻溝した部分あり、全削面に鉛打痕がある。		
27	2区	2 層	砂岩	34.5	4.8	3.9	1.2	粒子の細かい砂岩で、部分的に若干の鉛打痕がある。		
28	2区	2 層	砂岩	46.7	4.6	4.2	1.8	部分的に若干の鉛打痕がある。		

表5 織文時代の石器観察表②

番号	出土区	層位	石 材	重さ(g)	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	備 考
29	1区	2層	砂 岩	29.1	3.8	3.8	1.7	部分的に明瞭な敲打痕がある。
30	2区	3層	砂 岩	25.9	3.6	3.4	1.4	断面が若干四角な感じがある。
31	1区	2層	砂 岩	55.5	4.5	4.4	1.7	ほぼ円形に近い。全体に敲打痕があり一部は頗著。
32	1区	1層	砂 岩	17.6	3.4	3.2	1.0	最も小形のもので一部に若干の敲打痕がある。

敲石・磨石・砥石計測表

番号	出土区	層位	器種	石 材	重さ(g)	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	備 考
33	2区	2層	敲石	安山岩	162	6.1	5.0	3.5	小形で一部分にかなり明確な敲打痕がある。
34	1区	2層	敲石	安山岩	114	7.3	5.2	1.8	扁平で上下に明確な敲打痕がある。
35	2区	2層	磨石	砂 岩	540	11.6	(7.2)	4.0	軟質な感じの砂岩で部分的に研磨痕が顕著。
36	2区	2層	磨石	砂 岩	560	11.0	(5.6)	6.6	粒子の粗い硬質な感じの砂岩でやや厚い。
37	2区	2層	磨石	砂 岩	740	12.2	10.0	3.3	唯一完形のもので、粒子が比較的に粗い。
38	2区	2層	磨石	砂 岩	740	13.2	(8.1)	4.8	全体の風化が著しい。加熱を受けたものか?
39	2区	2層	磨石	砂 岩	340	(10.4)	(5.1)	4.5	研磨面が一部残るのみ。加熱を受けたものか?
40	1'区	2層	砥石	砂 岩	88	(8.6)	(5.0)	(1.6)	全体に大きく剥落や欠損が見られる。
41	1区	3層	砥石	砂 岩	49	(4.0)	6.1	1.4	表面に研磨された面がある。やや粒子が粗い。

刮片・石核計測表

番号	出土区	層位	器種	石 材	重さ(g)	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	備 考
42	1区	2層	剥片	黒曜石A	10.0	5.5	2.3	0.8	自然打面からの比較的大きい平板剝片。
43	1区	2層	剥片	黒曜石A	1.7	2.0	2.0	0.5	自然打面からの小形のやや細長い剝片。
44	2区	2層	剥片	黒曜石A	3.1	2.4	2.4	0.5	打削面のみに自然面を残す傾向の剝片。
45	2区	2層	剥片	黒曜石A	3.4	3.2	2.3	0.6	平板な打面からのもので表面に大きく自然面残す。
46	1区	1層	剥片	黒曜石A	6.9	3.2	3.8	0.7	自然打面からの細長い剝片。
47	1区	2層	剥片	黒曜石A	1.4	3.6	1.3	0.3	小形の短長剝片で、平坦な面より打削されている。
48	1区	2層	剥片	黒曜石A	2.5	2.6	2.3	0.3	多少打面調整の痕がある。下半は折れている。
49	1区	2層	剥片	黒曜石A	3.1	3.3	2.0	0.6	自然打面からのもので、中に不純物が認められる。
50	2区	2層	剥片	黒曜石A	10.9	5.2	2.4	1.0	研磨された打面をもつ。全体にバティナが顕著。
51	1区	2層	剥片	黒曜石A	5.6	3.6	2.8	0.8	平板面からのもので、表面に大きく自然面を残す。
52	1区	2層	剥片	黒曜石A	6.7	4.3	2.7	0.6	自然面打面のもので、一部に若干バティナがある。
53	2区	2層	剥片	安山岩	12.1	3.5	5.4	0.7	調整された打面からの横長の剝片。
54	1区	1層	石核	黒曜石A	5.5	1.9	2.3	1.3	一部に自然面もあり小形の原石が想定される。
55	2区	2層	石核	黒曜石A	6.0	2.4	2.0	1.4	多方向より打面を転写して側面剝離をしている。
56	1区	2層	石核	黒曜石A	18.6	3.4	2.3	2.7	出土した石核中最大のもの。部分的に自然面残す。
57	2区	2層	石核	黒曜石A	5.9	1.3	2.2	2.9	半剝離された一平面から別の剝離面が認められる。
58	1区	2層	石核	黒曜石A	8.5	2.0	2.3	3.2	半剝離された一平面から別の剝離面が認められる。
59	2区	2層	石核	黒曜石A	5.8	1.6	2.7	2.2	半剝離された一平面から別の剝離面が認められる。
60	1区	1層	石核	黒曜石A	9.2	1.3	3.4	2.7	半剝離からの剝離面が認められ一部自然面残る。

黒曜石A = 深褐色の黒曜石、黒曜石B = 淡青色の黒曜石、黒曜石C = 淡白色の黒曜石

残す。2層出土。52は打面部と表面片側縁に自然面が残る。2層出土。なお、42~52は漆黒色の黒曜石である。53は記載したなかで唯一、安山岩の横長の剥片である。調整された打面部から剝離されている。全体にバティナが認められる。2層出土。

石核（第19図、54~60）

21点の石核の出土があったが、そのほとんどが縄文時代晚期特有の残核であったため7点を選び記載した。54は上面に自然面が残り原石自体も小さかったものと考えられる。剥片剝離はかなり細かく、基本的には上からの剝離痕が多い。1層出土。55は打面を転移させ、多方向から剝片剝離を行っている。打面調整はない。2層出土。56は出土した石核中最も大きかったもので、打面を転移させ多方向から剝片剝離を行っている。一部に自然面が残る。57・58・59は半割されたような上部の平坦面からの剥片剝離を基本としている。3点とも自然面は残らない。打面調整は58に若干認められるがあとの57・59には認められない。一応、石核として分類したが、59には使用痕的な刃こぼれが認められることから、スクレイパー・エッジとして使用されたものと考えられる。60は一部に自然面を残すが、先の3点と同様のものであろうと考えられる。

3. 古墳時代の土器（第20図、図版13）

（1）土師器（第20図）

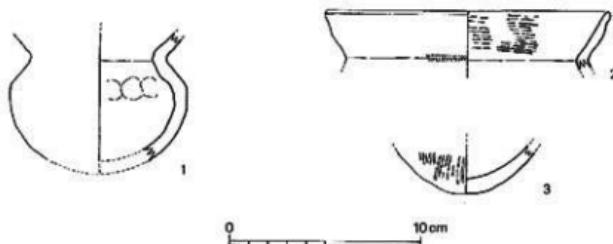
古墳時代の土器は土師器が91点出土しており、その内3点を図化した。

小形壺（1）

口縁と底部を欠失する小形壺である。全面に風化を受けているが、平滑なナデ仕上げであったと思われる。内面に指オサエによる成形がなされている。橙色を呈し、2mm以下の石英砂と1mm大の白色砂、角閃石を含む。焼成はやや甘い。第2区2層出土。

壺（2・3）

2は、「く」字形に外反する口縁の小形壺で、推定口径は15.2cmである。口縁は中程がややふくらみをもち、端部は尖り気味におさめている。内外面ともハケをナデ消しており、外面にはススがべったりと付着している。にぶい赤褐色を呈し、1mm以下の石英砂を含み、焼成は普通である。第2区土壙1出土。3は、丸底の底部片である。外面は中心に向ってハケが施され、内面はケズリのあと丁寧なナデ仕上げがなされている。にぶい褐色を呈し、2mm以下の石英砂、角閃石を含んでいる。焼成はわりと良好である。第2区2層出土。



第20図 土師器 (1/3)

4. その他の遺物

縄文晩期に所属するもので、土製品と勾玉が出土している。

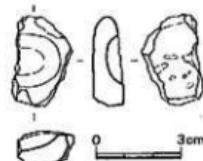
不明土製品（第21図、図版13）

第1区3層から出土した土製品である。盤状で、片方の面に親指頭を押し付けた様な凹みをもっている。周縁は、上端が部分的に生きている他は破損しており、全形が判断できぬで不明土製品とした。にぶい褐色を呈し、1mm大の白色砂、石英砂を含み、焼成はやや甘い。

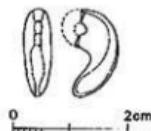
勾玉（第22図、図版13）

第1区2層から出土した勾玉である。翠色を呈し、硬玉製と考えられる。孔部を部分的に欠失し、全長1.5cm、厚さ5mm、孔径2mm、重さ700mgを測る。

なお、他に縄文晩期は玉類は、島原市疊石原遺跡^{註1}で勾玉、管玉、丸玉が、深江町山の寺遺跡^{註2}で勾玉が出土している。



第21図 不明土製品 (1/2)



第22図 勾玉 (1/1)

註1 古田正隆『山の寺掘木遺跡』百人委員会埋蔵文化財報告第1集 百人委員会 1973

註2 古田正隆『疊石原遺跡』百人委員会埋蔵文化財報告第7集 百人委員会 1977

IV 小 結

1. 土器について

(1) 出土土器の構成 (第23~25図、表6)

今回の調査において2,376点の土器が出土した。時期的な構成をみると、縄文早期4点、縄文晩期2,281点、古墳時代の土師器91点となり、縄文晩期が全体の96%を占め圧倒的に多い。

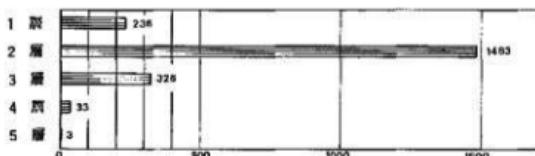
縄文土器は2,285点出土しているが、出土層位が明確な2,081点について検討を加えると、第2層(71.3%)、第3層(15.7%)、第1層(11.3%)、第4層(1.6%)、第5層(0.1%)の順になり、第2層に集中しており、第5層は縄文早期であるので、このデータはそのまま縄文晩期の出土傾向といいかえることができる。

層位別のグラフをみると、第1層~第3層に少量ながら土師器が存在すること、第4層に押型文土器が1点出ていることが判る。土師器については、第2層下部と第3層下部にクラック状の亀裂が多くみられるので、その裂け目に落ち込んだものと解釈するのが妥当であろう。百花台遺跡では第Ⅱ層上部に弥生土器、土師器が含まれているということなので、おそらく本

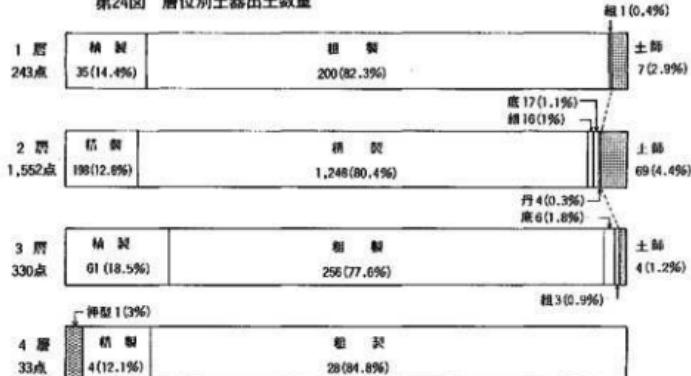
表6 出土土器数量表

地区	層位	縄文早期			縄文晩期				古墳時代		
		押型文	寨ノ神式	無文土器	粗製土器	粗製土器	底部	組織痕	丹	鐵	土師器
1	1層				38	162					2
	2層				113	544	11	9	3	4	684
	3層				23	149	4	1			2
	4層	1			3	24					28
	不明				3	15					18
	計	1			175	894	15	10	3	8	1106
2	1層				2	38		1			5
	2層				85	704	6	7	1	65	868
	3層				38	107	2	2			2
	4層				1	4					5
	5層	1	1	1							3
	計	1	1	1	126	853	8	10	1	72	1073
土壤1					19	124					9
土壤2					3	25	1				2
地区不明					3	9	2				14
総計			2	1	1	326	1905	26	20	4	91
					4				2281		2376

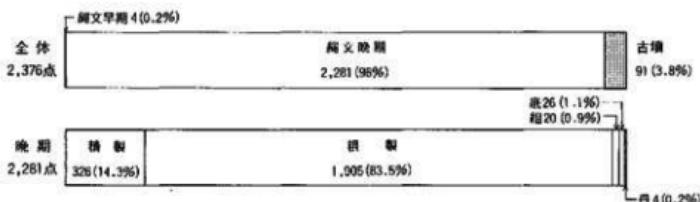
第23図 繩文土器の層位別出土数量



第24図 層位別土器出土数量



第25図 時期別・種類別土器出土数量



凡例：組は組織底、底は底部、丹は丹塗、押型は押型文、土師は土師器

遺跡でも第1層から第2層上部が古墳時代の地表面で、風倒木などの自然攪乱も影響を与えたことが考えられよう。

晩期土器の構成をみると、精製土器が14.3%、粗製土器が83.5%、その他に少量の丹塗土器組織痕土器、底部がある。精製土器には、浅鉢と深鉢があるが、深鉢は数少なくほとんどが浅鉢である。粗製土器は深鉢が大半を占め、組織痕が体下間に残る浅鉢はそれほど多くないようだ。層位別データでも、粗製と精製の比率はそれほど大きく変わることはなく、基本的な構成を示していると思われる。

(2) 繩文晩期の土器について

主体を占めるのは縄文晩期土器である。深鉢は、粗製と精製があるが、精製は少ない。大半の粗製深鉢は口縁が外反あるいは直立し、内外面を条痕のままのものと外面に数条の沈線を施すものがある。沈線を施すものは、胴部にリボン状の突起をもっている。浅鉢は、組織痕を体下間に施す粗製品も少々あるが、ほとんどは黒色研磨の精製品である。「く」字形に胴部が屈曲し、頸部がわりと長く外反し、口縁が直立し、内外面に沈線を有するものと、扁球状の胴部から短い口縁部が立ち上がるものの2種がある。これらの土器は、その型式的特徴から礫石原式と呼ばれる土器群に相当し、従来の「黒川式」に包括されるものである。

この黒川式を、橋口達也氏は「古」「新」の二つの型式に区分され、それぞれ晩期V式、晩期V式³²とされた。精製浅鉢では、V式では口縁内外に沈線を有し口縁端を丸く仕上げるが、VI式になると口縁外面に沈線を施さないとされている。この特徴からみると、本遺跡の土器は晩期V式（黒川式古段階）に相当するものとなろう。

また、本遺跡では第1層から第4層にかけて晩期土器が出土しているが、浅鉢、深鉢とともにほとんど変化が認められないことが指摘できる。しかし、浅鉢で2層と3層出土品が接合するもの（28）と同一個体と識別できるもの（16～18）があり、遺物自体が上下に動いたこと、グラック状の亀裂に落ち込んだことは充分に考えられる。しかし、第2～4層は基本的に整合状態にあると考えられるので、I型式にかかわらず包含層だけが細分されるという結果になってしまった。したがって、その解釈としては、①本来は晩期の文化層は一つしかなく、他の層の遺物は移動したと考えること、②遺物の一部分は動いているが、I型式内に各層の堆積がなされたという土層の整合性を重要視する見方などがあげられるが、いずれにしても、黒川式古段階の単純遺跡という評価は変わらないだろう。

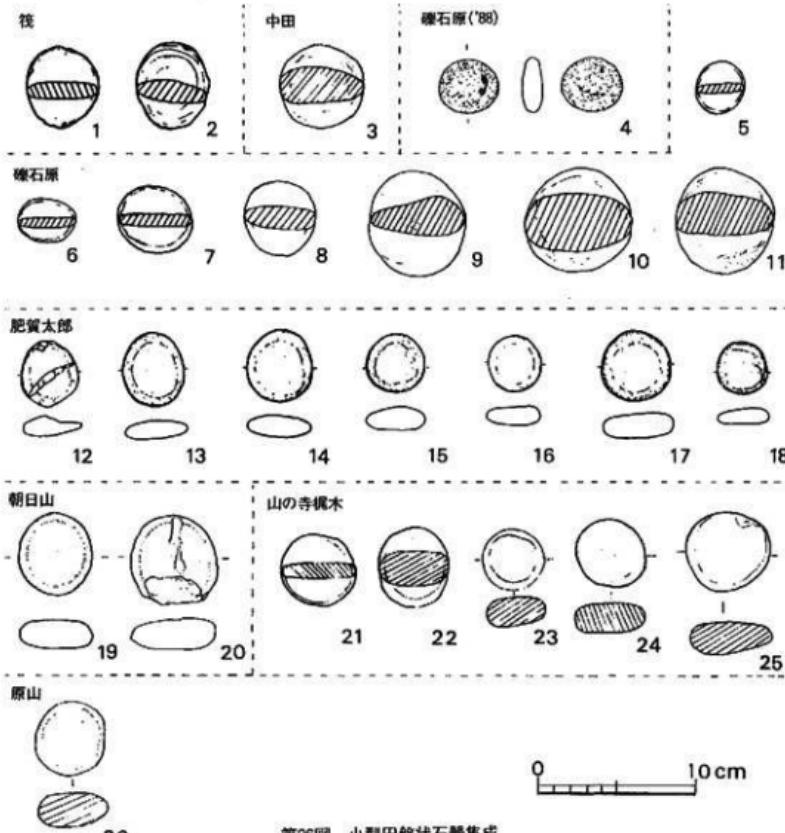
(3) 土師器について

本遺跡から91点の土師器が出土している。少量で、細かく割れており、立地的に不思議な出土状況である。固化できたのは3点しかなかったが、時期的に限定される資料であろう。

いわゆる古式土師器であり、器種的に小形壺と甕がみられるが、高杯は出土していない。

甕は、口縁が「く」字形に外反し、中程が肥厚されているのでアウトラインは内湾しているよう見える。底部は尖り気味でない丸底である。小形甕は、口縁を欠失しているが、おそらく胴最大径よりも口縁径が大きいことが推測される。

高杯を欠落しているので編年的な位置づけを行うのは難しいが、甕、小形甕の特徴から布留式の新しい段階に相当する資料ではないかと推定される。本県の資料でいえば、諫早市平川山B遺跡、国見町百花台遺跡の古式土師器資料より新しく、国見町上篠原遺跡住居跡資料よりも古く位置づけられるのではなかろうか。



第26図 小型円盤状石器集成

2. 小型円盤状石器について

石器のところでも述べたように、本遺跡から、円形もしくは卵形に近い平面形を呈した扁平な石が7点出土している。1層（表土）から1点、2層から4点と3層から2点で、出土層位や伴出土器などから、縄文時代晚期に伴うものと考えられる。隣接する礫石原遺跡を中心とした周辺の縄文時代晚期の遺跡のなかにも何点か同様のものがみられ、これまで大方の場合は磨石または敲石として処理されていた。従って、ここでは磨石・敲石と区別するために一応、仮称を与え「小型円盤状石器」としてあつかい、他の遺跡などの資料も参考しながら、幾つかの機能および用途等を考えたい。

先ず出土報告のある遺跡の伴出土器・石器についてみてみたい。第26図に類似・近似する資料として、刊行された報告書から抜粋し記載した（各報告書からの縮尺はほぼ同一に揃えた）。

1・2は後遺跡¹¹（国見町神代東里後、所在）。西半式・三万田式・御領式土器および石鎚・スクレイパー・扁平打製石斧・磨製石斧・磨石・敲石と伴出。

3は中田遺跡¹²（有明町池田名中田・下土・桑先、所在）。御領式土器を主体に、石鎚・扁平打製石斧と伴出。

4・5～11は礫石原遺跡¹³（島原市礫石原町から有明町大野名字一本松、所在）。黒川式土器が主体をなし、石鎚・石匙・スクレイパー・（扁平）打製石斧・石皿・砾石・凹石等と伴出。



第27図 小型円盤状石器出土遺跡

12~18は肥賀太郎遺跡（島原市北千本木町字肥賀太郎、所在）。黒川式土器を主体に石鐵・スクレイバー・使用痕ある剝片・打製石斧・磨石・敲石・砥石と伴出。

19・20は朝日山遺跡（小浜町北本町、所在）。山の寺式土器を主体に石鐵・スクレイバー・使用痕ある剝片・扁平打製石斧・磨製石斧・砥石・磨石・敲石と伴出。

21~25は山の寺梶木遺跡（深江町山の寺、所在）。山の寺式土器を主体に石鐵・スクレイバー・（扁平）打製石斧・敲石・凹石等と伴出。

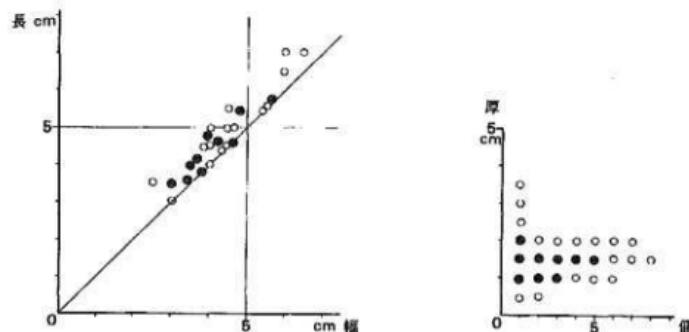
26は原山遺跡（小浜町坂上下名字新田・字原・尻川、所在）。支石墓が群集する。原山式土器を主体に石鐵・石匙・扁平打製石斧・磨製石斧等が伴出。

(1) 平面形・規模について

第27図に記載した26点の長さと幅を計測しその長幅比をグラフ化してみた。本遺跡分も含め遺物の計測が直接できたものは4と12~18の8点、報告書に数値記載のあったもの42・43の2点で計10点は正確な数値である(●)。そのほかは報告書の図面から計測した数値である(○)。

グラフからみると、およそ1:1に近く、5cm前後の直徑を持つ。換言すれば、直徑5cmの円形に近い平面形を呈しているといえる。このことは石器の上下の意識は薄く円形を基にしたラウンド的な石器が考えられる。また、厚さについてもグラフ化したところ1~2cmにかけて多いことがわかる。

なお、時代や材質は異なるが、円盤状として報告された遺物は他にも、風呂川遺跡（西有家町風呂川、所在）では「円盤状陶磁製品」として須恵器片や陶磁器片を利用して円盤状に加工した遺物の出土報告が、今福遺跡（北有馬町今福名、所在）では「円盤状土・陶磁製品」として弥生土器片や近世陶磁器片・瓦片を利用した遺物の出土がある。これら報告書において「縄文時代から連綿と続く『遊戯具』としての用途想定」もなされているようである。



第28図 小型円盤状石器長幅比・厚さグラフ

(2) 石材について

第26図からの判断にまかされる部分も多いが、砂岩と安山岩が使用されている例が多い。

本遺跡分は全て砂岩製であるが、その原産地を確定するには至っていない。

(3) 使用痕と破損状況

報告書中に石器の観察記載があったものは少ない。従って、多くは図面記載しかなく、不明な点が多い。本遺跡のものを主体に考えるならば、表裏とも滑らかな感じで周縁に敲打痕を残すものがほとんどである。報告書記載があったものは4「表裏ともに中央部周辺に摩耗した状態を残す…」、19「全体に丸味を持つ。側面部に敲打痕」、20「一端に敲打による割れ」の3個であった。全体的に摩耗もしくは自然面によるものかである。つまり、滑らかな表裏であることと、周縁部は敲打痕が認められることはいくつかに共通する要素のようである。しかも、12と20の2点は敲打によると考えられる剥落面が認められることから、敲打器としての機能をより強く持つものか。もし、敲石としての機能を考えた場合、この石器より得られる打撃は推測されるところで、コツコツといった手先的な動作であろう。また、タイ北部の山村では黒色の磨製土器製作にあたり土器の表面の光沢を得るために丸く滑っこい石で土器の表面を丹念にみがく¹⁴、との民族例報告もある。

以上のように、現在までに報告されている資料としては本遺跡分も含めて20数点である。共に出する土器から判断されることは、おおよそ縄文時代後期後半から晩期にかけてのものであることがわかる。この時期は縄文式土器のなかでも黒色研磨土器の存在と一致し、特にその出現が磨清縄文系上器群から黒色研磨系上器群への移行期にあたる西平式土器・三万田式土器に認められることは注目される。しかも、この時期の特徴的な石器に扁平打製石斧のあることも見逃せない。また、これらの遺跡の立地が県内でも、島原半島に限られた結果を今日まで提示しており地域的な要素もうかがえる。繰り返しになるが、島原半島北東部には縄文時代晩期の遺跡が多く、大遺跡である疊石原遺跡を抱える。飛躍して考えるならば、ここで「小型円盤状石器」として仮称した石器は縄文時代後・晩期を中心とし、この時代に種々に認められる遺跡の農耕的性格の一端を担う石器である可能性も考えられる。

今回、小型の敲石・遊戲具・土器の研磨具などの使用・用途を想定したが、どれも積極的根拠に薄く、終始問題提起に終ってしまった。今後資料の蓄積が待たれると同時に遺跡における遺物全体としての組成の問題や、より詳細な観察・分析が求められよう。

3. まとめにかえて —— 繩文後期から弥生前期における遺跡の動向 ——

本遺跡では、今回調査において、縄文時代早期、晚期と古墳時代前期の遺物が出土し、時間的な間隔をおいて人々の生活の痕跡があったことが判明した。遺物が少量な古墳期の性格については、立地的にもいまのところ結論をだすことができない。縄文早期と晚期については、山地と山麓地の境界点に位置し、直下に現在も豊富な湧水がみられるところから、居住地として適した場所であったことが推測できる。遺跡の範囲については、調査の状況から判断すると、当初予測していたより狭い80m四方ほどの広がりをもつことが推定できよう。

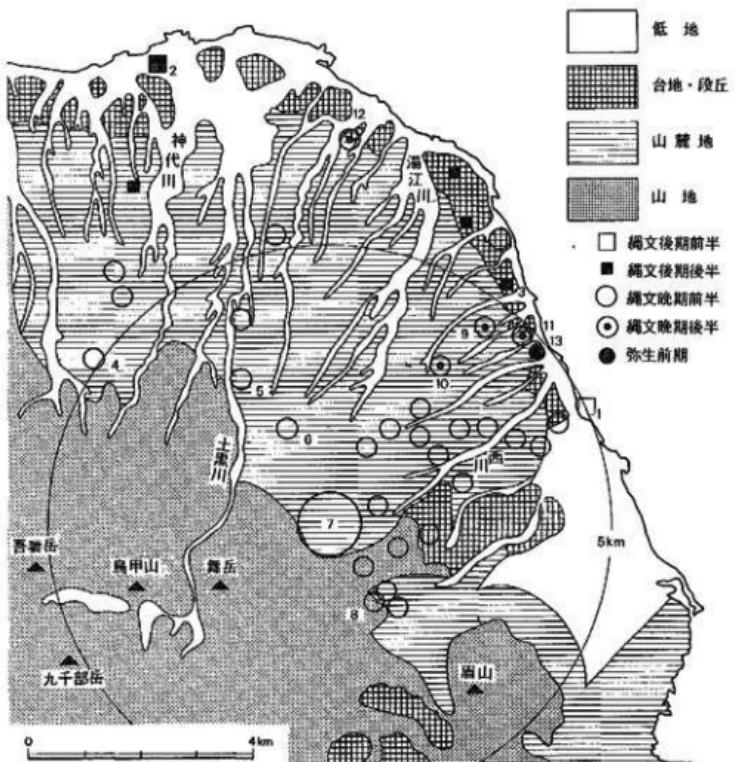
本遺跡の主体をなすのは縄文晚期であるが、土器は黒川式古相の单一時期に限定されており、その組成は極めて一括性の強い資料といえる。したがって、本遺跡は比較的短期間に営まれた小規模な遺跡であったことが考えられるが、本遺跡の性格を検討するために、島原半島北東部の縄文時代後期から弥生時代前期にかけての遺跡群の状況と動向についてみてみたい。

縄文後期前半期の遺跡は、現時点で把握できるのは島原市三会下町海中遺跡(1)だけである。干潮時の干涸から、縄文前期～後期を主体とする遺物が採集されている。九州地方の縄文中期から後期前半にかけては、貝塚を形成し漁撈活動が盛んになった時期であり、この遺跡においても遺物組成・立地の上からも同様に「環海的性格」がうかがえる。また、長期間継続した遺跡であり、この地域の中心的な集落であったことが考えられよう。

縄文後期後半期になると、海岸に隣接した段丘や低地の微高地を中心に5箇所の遺跡がみられる。このなかで、国見町の後遺跡(2)は西平式から御領式期に営まれた遺跡で、東西200m、南北500mほどの規模をもち、カメ棺や土壙墓が數十基発見されている。立地の移動とともに遺物組成に変化がみられ、扁平打製石斧、庖丁形石器、十字形石器や土偶が出現している。遺跡の規模・内容からみても筏遺跡がこの地域の中核を占める集落であったことは推測できるが、有明町小原下遺跡(3)からも土偶が出土しており、別群の核集落の可能性をもっている。また、国見町百花台遺跡(5)や島原市疎石原遺跡(7)では少量の西平式が採集されているので、低位にある集落の野営地（キャンプサイト・ワークサイト）であったのであろう。

縄文晚期前半期の遺跡は、火山性の山麓扇状地を中心に27箇所が分布し、前段階に比べ数倍の増加が認められる。このなかで疎石原遺跡は、標高250～300mの山麓扇状地の頂部に立地し、1km四方の範囲に広がりが推定される巨大な遺跡である。カメ棺や方形石組遺構が発見され、晚期遺物の基本的組成の他に勾玉、管玉、石刀、岩版などの特殊遺物も出土している。本題の肥賀太郎遺跡(8)も当段階に包括されるのであるが、この他に内容が判明している遺跡をあげると、有明町二ツ石遺跡(6)ではカメ棺が発見され、百花台遺跡では昭和62年度の道路部分の調査において埋ガメと土壙が検出されている。前段階の遺物組成に比較すると、十字形石器、石刀状の剣片、剣片鐵が減少あるいは消滅し、扁平打製石斧が盛行する様相をもつてゐる。立地が段丘から山麓地へ高位化し、疎石原遺跡など大規模遺跡が出現する。

晩期後半期の遺跡は、現時点で突帯文土器が出土したことが判明している遺跡をあげた。晩期前半期に比べると4箇所減少し、立地も山麓扇状地の端辺部や段丘への低位化が認められる。いずれも有明町内の遺跡で、灰ノ久保遺跡(10)、一野遺跡(11)、戸田向原遺跡(12)は出土遺物がやや古い様相をもち、山ノ内遺跡(9)は突帯文系の弥生土器も出土し新しい様相をもつようである。山ノ内遺跡では、粗雑な石鎌・スクレイパー・石核・扁平打製石斧が採集されており、前段階の石器組成を引き継いでいることが判る。島原市景華園遺跡(13)は、弥生時代の代表的な墳墓遺跡であるが、弥生前期の土器も出土している。



- 1 三金下町海中遺跡 2 桂遺跡 3 小原下遺跡 4 東原遺跡 5 百花台遺跡 6 ニッ石遺跡 7 嶺石原遺跡
8 肥賀太郎遺跡 9 山ノ内遺跡 10 灰ノ久保遺跡 11 一野遺跡 12 戸田向原遺跡 13 景華園遺跡

第29図 島原半島北東部の縄文後期～弥生前期の遺跡

以上、概略的ではあるが、当地域における縄文後期から弥生前期の遺跡群の変動を追ってきた。後期後半—晩期前半期にみられる海岸部から内陸部への急激な適応化については、熊本県の阿蘇山西側山麓、大分県の阿蘇東側山麓、長崎県島原半島の雲仙山麓などの広大な火山灰台地をひかえた地域で顕著に認められる現象であることを木村幾多郎・島津義昭氏らが指摘している。内陸部への適応の外的要因としては、後・晩期に進行した沖積化に伴う自然条件の変貌により海浜部集落の存立基盤が打撃を受けた点に求めることができようが、単なる立地移動にとどまらず石器組成の変化、土偶・石棒・十字形石器・勾玉など特殊な遺物の出現にみられるように構造的な変動と捉えることができよう。

晩期前半期には、後期後半期まで狩猟・採集の基地として利用されていた山麓地に多くの遺跡が展開し特に200m附近の標高域に大遺跡が形成される基本的原因として、久原巻二氏は地形上の大きな変換点が300m近くにあり、その地質境界からの湧水がみられること、広い緩斜面が生活面として利用できるなどの地形的条件をあげている。

地形的な区分によると山麓地は、上黒川を界として西側が島原山山麓地と東側が昔賀岳山麓地に大別され、さらに昔賀岳山麓地は湯江川を境界として東側が百花台山麓地、西側が疊石原山麓地と千本木山麓地に細分される。これらの山麓地は緩やかな傾斜の平田面が扇状に展開するが、河川の侵蝕谷によって寸断され、独立性をもつことになる。この自然境界は、現代においても各山麓地を結ぶ横道より山麓を縦に走る道路が発達している姿にみることができる。

この地文的単位と遺跡の分布状況を対応させると、島原山山麓地では遺跡内容が明瞭でないが瑞穂町東原遺跡(4)、百花台山麓地では遺構の確認されている百花台遺跡(ニツ石遺跡)、疊石原山麓地および千本木山麓地では疊石原遺跡が、それぞれの中核となる集落と考えられる。これらの集落の周縁に、肥賀太郎遺跡のように継続性をもたず、明確な遺構も検出されない小規模な遺跡が散在していたのではないかと推察できる。各集落は2.5km~3kmの距離に存在し、河川によって区切られた山麓地を生産活動の領域(テリトリー)として成立していたことが考えられる。したがって、ホームベースとなる集落の周縁に点在する小規模遺跡は、人口増加に伴って分岐した「分村」ではなく、生産・作業の単位としての「出村」的な性格をもち、「本村」の集落(本拠地)と密接な関係をもっていたことが想定されよう。また「出村」的遺跡は継続性をもたず消長が短期間に行われ、基本単位内の移動を繰り返した結果、遺跡数が増えたことが考えられる。しかし中核となる集落だけをみると数は増加していないようだ。

晩期後半期になると遺跡が低位化し、減少と縮少の傾向をもっている。この状況は、熊本県菊池台地でも同様にみられ、逆に熊本平野では弥生前期に継続していく遺跡が点在しており、木村・島津氏は沖積地への積極的な進出と定着を想定しておられるようにも思える。

当地域の遺跡群も、谷底平野や海岸平野などの沖積地を意識した立地にあり、現時点で突帯文土器が確認されないために晩期前半期の遺跡に包含したもののがなかで、低地面に面した立地をもつ遺跡は突帯文期に編入される可能性をもっており、沖積地に存在する遺跡とともに今後

検討を要すると思われる。

また、高位域における占地の放棄と大遺跡の解体が、水稻耕作を基盤とする新しい文化の流入によって生起されたとするならば、後期後半から晩期前半期に認められる農耕的性格は、縄文社会を「農耕社会」へ変革するものではなく、あくまでも縄文文化の系譜上にあり、従来の労働部門への添加、補助的な役割などの限定的な意味での評価ができる、晩期後半から弥生前期に減少・縮小化する姿に「縄文農耕」の限界性を看取できるのではなかろうか。

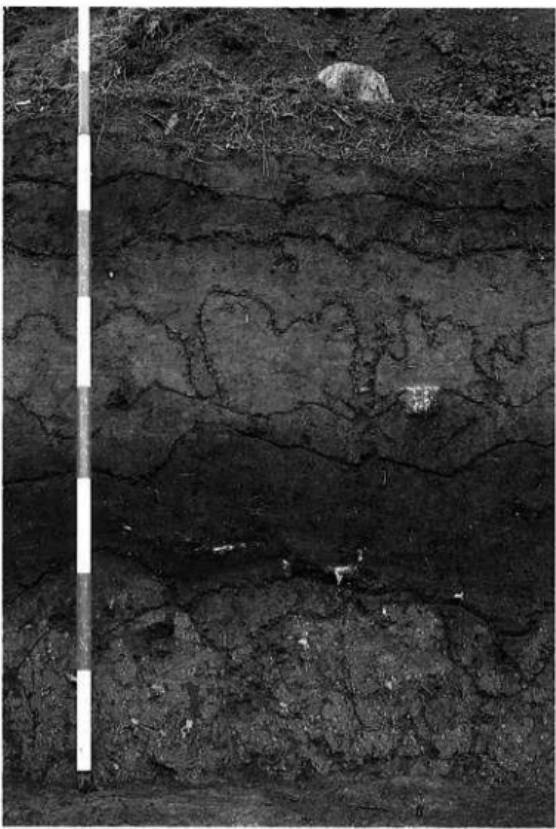
島原半島北東部の縄文後期から弥生前期の遺跡の動向をみてきた。このなかで、本遺跡は疊石原遺跡群の「出村」的な遺跡としての位置づけを行った。しかし、全体的に舌足らずで説明不足に終った点が多いと思われる。機会があれば、個々の具体的な資料をあげながら、もう一度検討してみたいと思っている。

註1 伴 謙一朗氏教示

- 2 橋口達也他『石崎山遺跡』今宿バイパス関係埋文化財調査報告書第11集 福岡県教育委員会 1985
 - 3 秀島貞康他『平山遺跡B地点』諫早市文化財調査報告書第3集 諫早市教育委員会 1981
 - 4 刈島和明他『百花台広域公園建設に伴う埋文化財緊急発掘調査報告書』長崎県文化財調査報告書第92集 長崎県教育委員会 1988 「弥生—歴史時代の遺物」の項 宮崎貴大
 - 5 謎見富士郎・内山泰紀『上篠原遺跡』長崎県立島原高等学校考古学研究部 1988
 - 6 古田正隆『筏遺跡』縄文後・晩期の埋葬遺跡 百人委員会文化財報告第4集 百人委員会 1974
 - 7 古田正隆『中田遺跡図録』御領式(筏5・6類)の単純遺跡 百人委員会文化財報告第8集 百人委員会 1977
 - 8 町田利幸・浦田和彦『疊石原遺跡』島原市文化財調査報告書第4集 島原市教育委員会 1988 (第26図4)
 - 古田正隆『疊石原遺跡』縄文晩期農耕生産文化の姿相 百人委員会文化財報告第7集 百人委員会 1977 (第26図5~11)
 - 9 安楽 勉・藤田和裕『朝日山遺跡』小浜町文化財調査報告書第1集 長崎県小浜町教育委員会 1981
 - 10 古田正隆『山の寺櫛木遺跡』長崎県南高来郡深江町山の寺櫛木遺跡の報告 百人委員会文化財報告第1集 1973
 - 11 古田正隆『重要遺跡の発見から崩壊までの記録』縄文晩期原山埋葬遺跡 百人委員会文化財報告第3集 百人委員会 1974
 - 12 藤田和裕・宮崎貴夫『黒呂川遺跡』西有家町文化財調査報告書第1集 長崎県西有家町教育委員会 1982
- *報告書中に宮崎貴夫氏は「円板状陶磁製品は近世陶磁器利用のものに限らず、縄文土器、弥生土器、土師・須恵器、中世陶磁器のものがあり、円板状土器品類としてとらえることができ

- る。さらに瓦製・石製のものもあり、一括して円板状製品として把握が可能である。…法量的に連続性をとらえ、そこに縄文時代から近世まで脈々と続く、遊戯具としての性格を想定した。』とされ、おはじきから石ケリに至るまで種々の古来伝承の遊戯具を考えておられ注目される。
- 13 宮崎貴夫・町山利幸「今福遺跡Ⅲ」県道矢次・南有馬線改良工事に伴う埋蔵文化財調査報告書 第三回 長崎県教育委員会 1986
 - 14 高田一夫「土器を焼く村〈その2〉タイ北部パン・ムルンクオン所見」「えとのす、第7号」新日本教育図書株式会社 1976 ※高田氏は磨製黒色土器の製作行程の研磨作業のなかで「土器が完全に乾かないうちに、まるく滑っこい挙大の石でもって土器の表面をたんねんに磨く。みるみるうちに表面が光ってくる。」と紹介されている。また、佐原 真氏は「土器の話(13)」「考古学研究 第21巻 第2号」考古学研究会 1974の中において磨石などを使用して土器表面の研磨を用いたことを指摘されている。
 - 15 古田正隆「島原市の海中干潟遺跡」百人委員会埋蔵文化財報告第2集 百人委員会 1974
 - 16 古田正隆「後遺跡」百人委員会埋蔵文化財報告第4集 百人委員会 1974
 - 17 古田正隆「小原下遺跡報告」長崎県立国見高等学校 1967
 - 18 古田正隆「島原半島に於ける縄文晚期壺棺葬の姿」長崎県立島原高等学校 1957
 - 19 調査者副島和明・伴 桂一朗同氏教示
 - 20 古田正隆「稚石原遺跡」百人委員会埋蔵文化財報告第7集 1977
 - 21 古田正隆「広域北部地区埋蔵文化財発掘調査概報」有明町教育委員会文化財調査報告書第9号 有明町教育委員会
 - 22 古田正隆「長崎県の縄文時代のカメ棺」「考古学論叢2」別府大学考古学研究会 1974
 - 23 古田正隆「三会中野景翠岡遺跡」島原市教育委員会 1963
 - 24 木村幾太郎・島津義昭他「九州考古学の諸問題」「考古学研究第19巻第1号」考古学研究会 1972
 - 25 春成秀爾「中・四国地方縄文時代晩期の歴史的位置」「考古学研究第15巻第3号」考古学研究会 1969
 - 26 久原巻二「遺跡の地理的歴史的環境」「百花台広域公園建設に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書」長崎県文化財調査報告書第92集 長崎県教育委員会 1988
 - 27 「土地分類基本調査島原・荒尾」長崎県 1976
 - 28 水野正好氏は3~4kmの領域をテリトリーとしている。赤澤成氏は採集狩猟民は半径10km、農耕民あるいはそれと同様に定住生活を送っていたと考えられる遺跡では半径5kmでカバーされる範囲をテリトリーと仮定される例を紹介している。
 - 水野正好「縄文時代集落研究への基礎的操作」「古代文化第21巻第3・4号」古代学協会 1969
赤澤成『採集狩猟民の考古学』海鳴社 1983

図 版



図版 1



道路近景(南東から)



調査風景(北西から)

図版 2



調査風景

図版 3



第1調査区第2層



第2調査区第2層



第2調査区第2層



第1調査区第2層



第1調査区第2層

遺物出土状況



第2調査区

図版 4



全 景



第 1 調査区



第 2 調査区

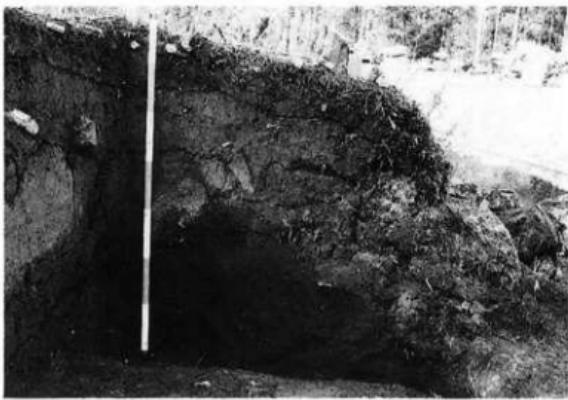
調査完了状況



第1調査区西壁



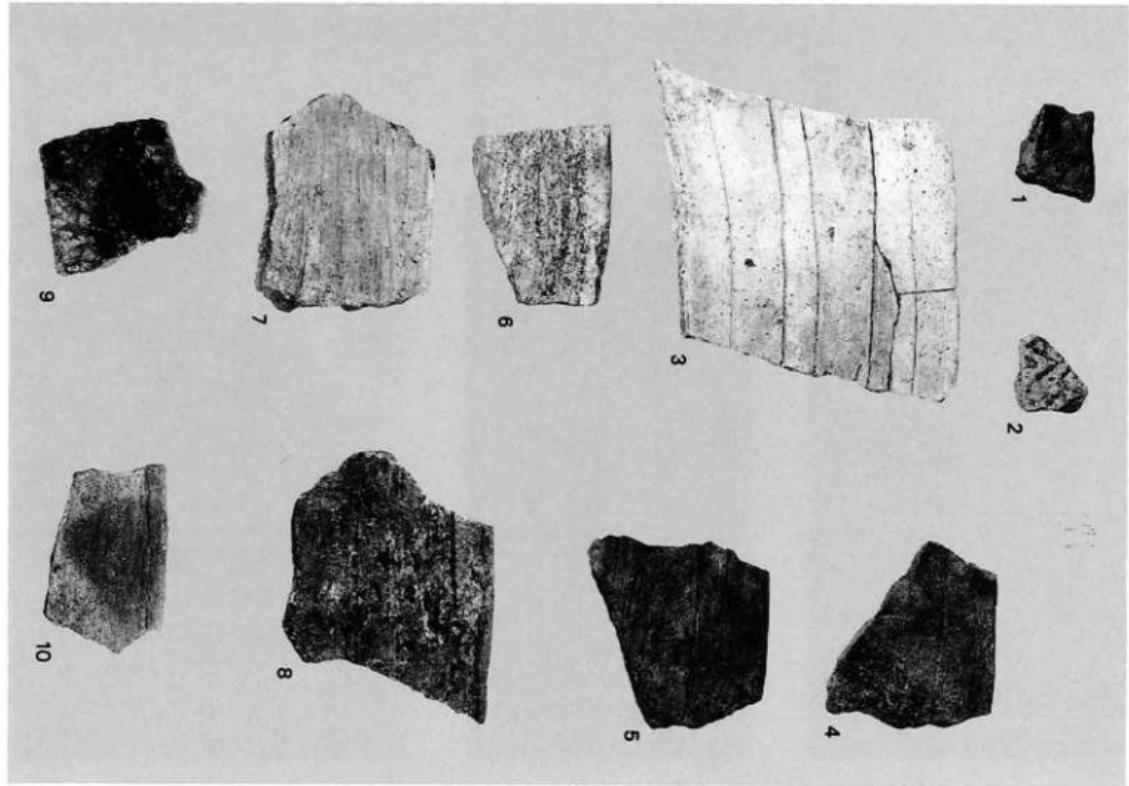
第2調査区西壁



第2調査区北壁

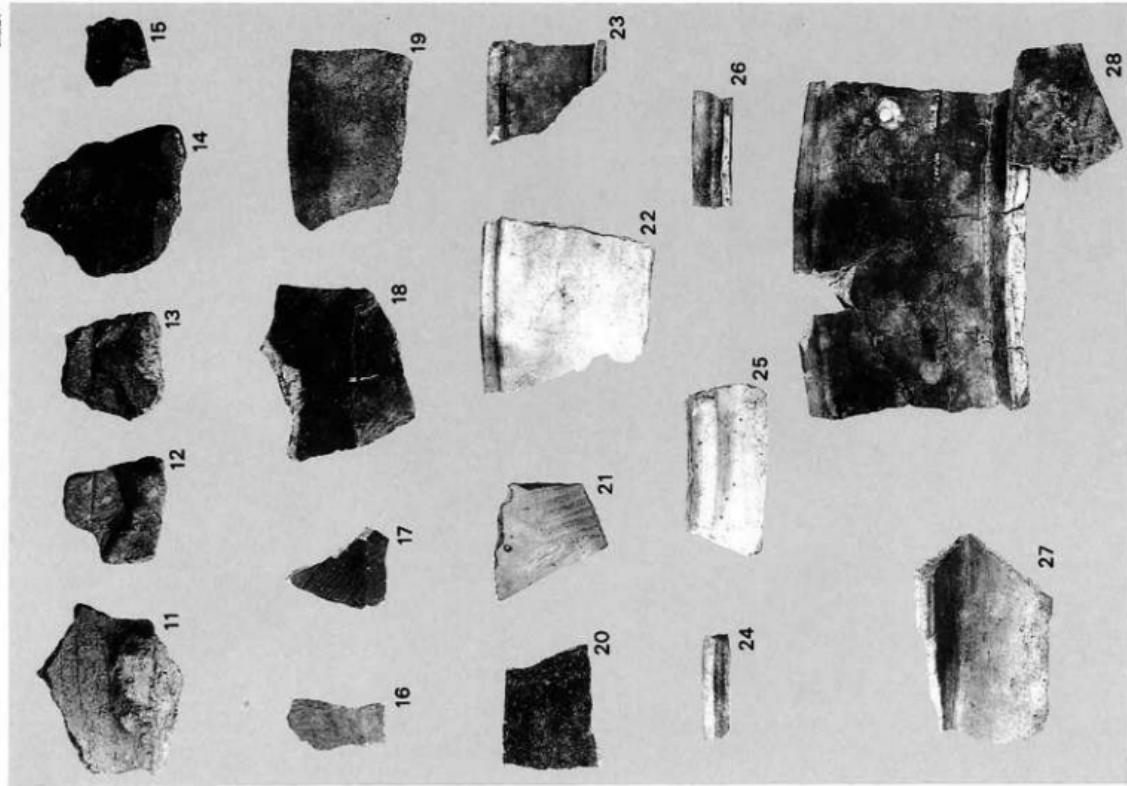
土層断面 (1/2)

圖版6



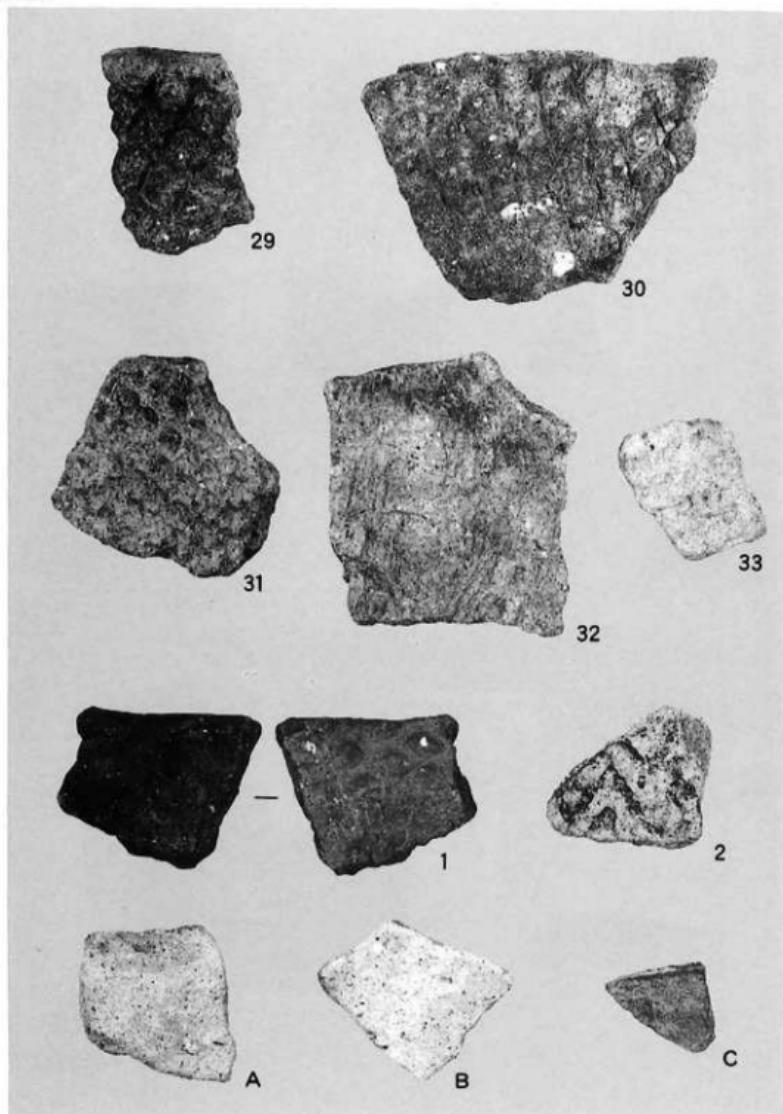
繩文土器①

圖版 7



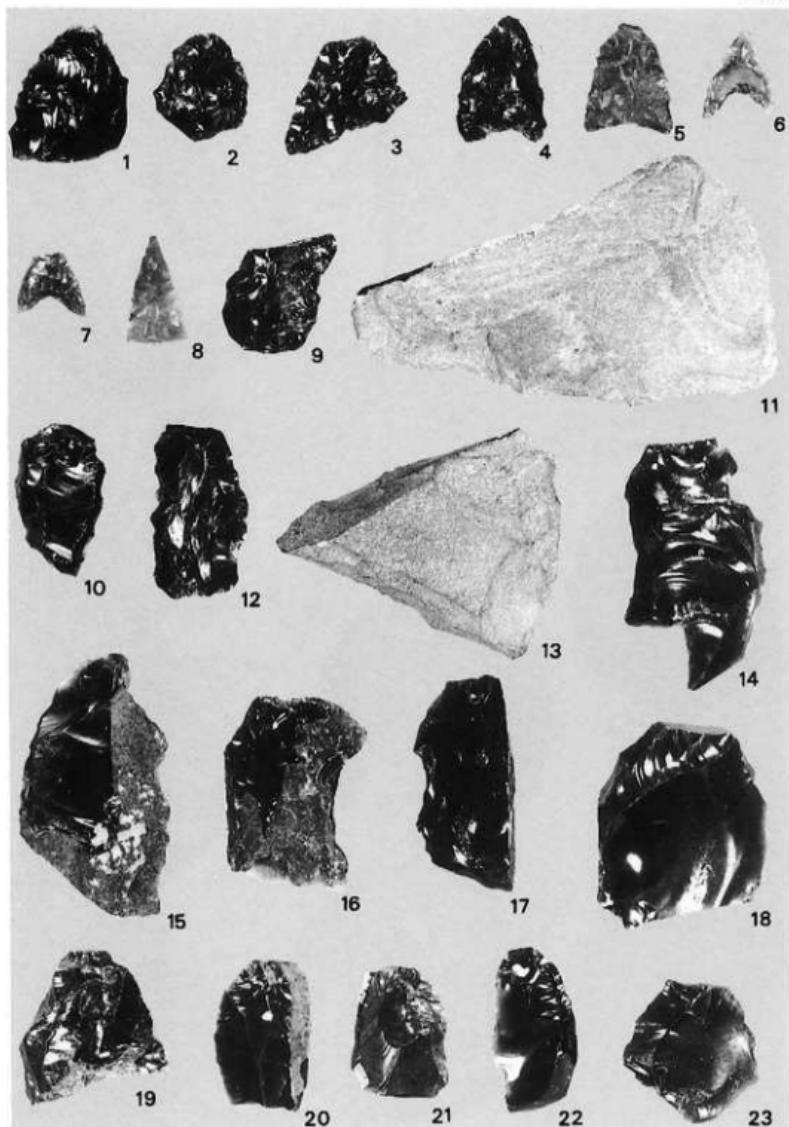
繩文土器② (1/2)

圖版 8



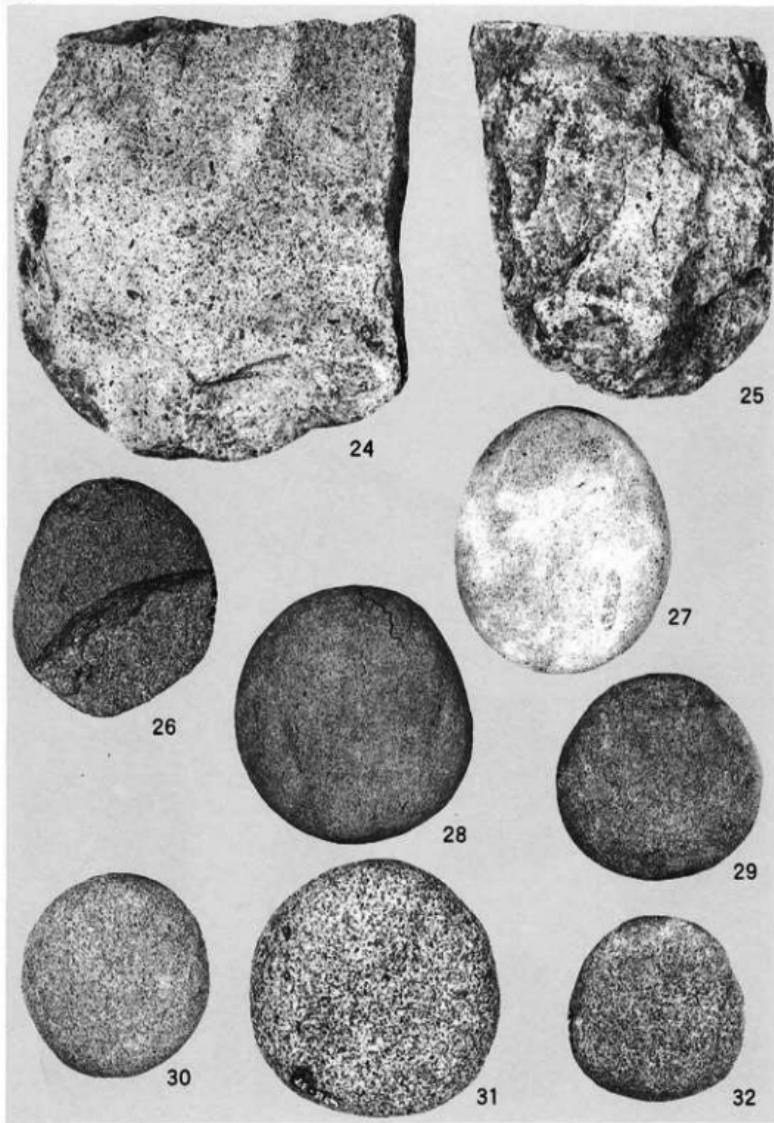
縄文土器 ③ (1/1)

図版 9



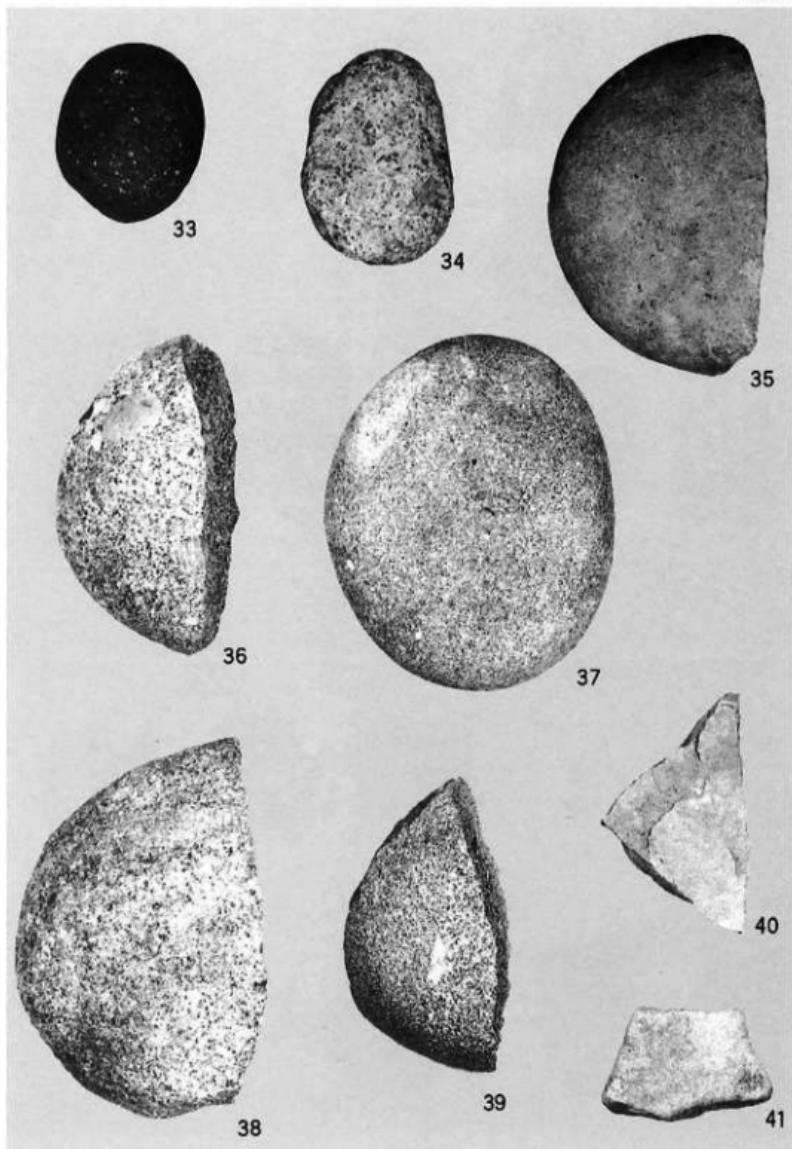
縄文時代の石器 ①

図版10



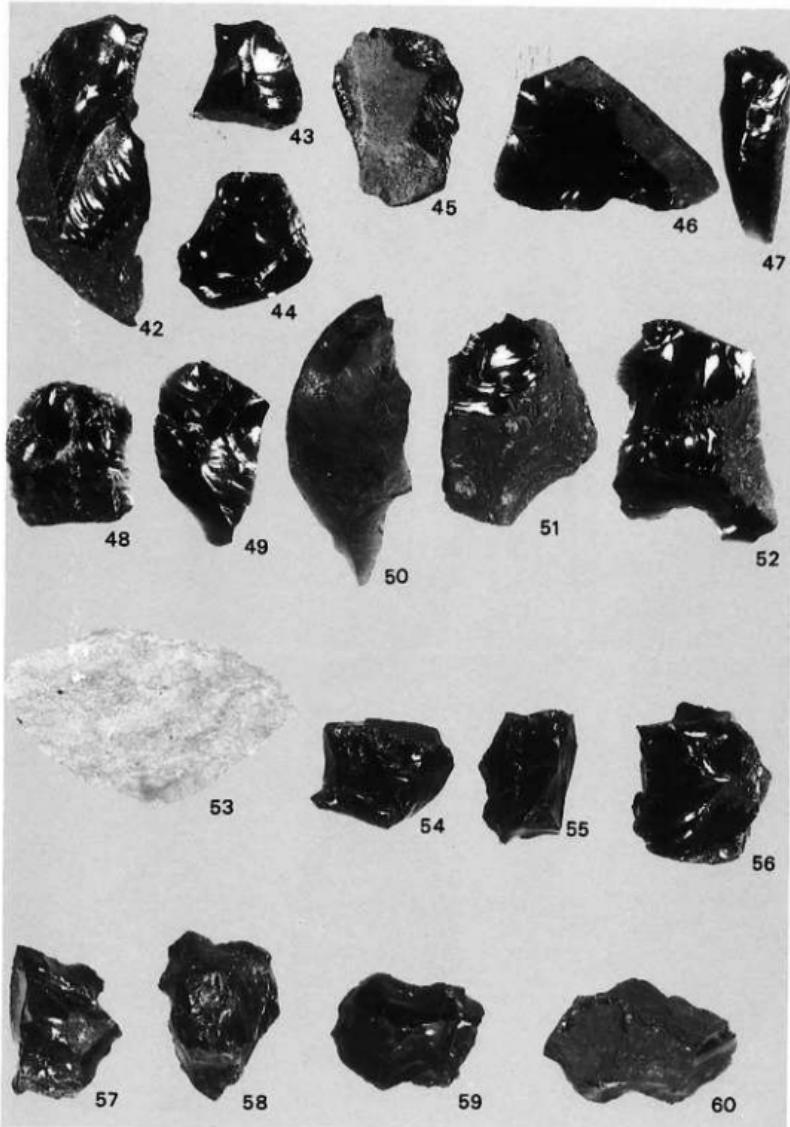
縄文時代の石器(②)

図版11



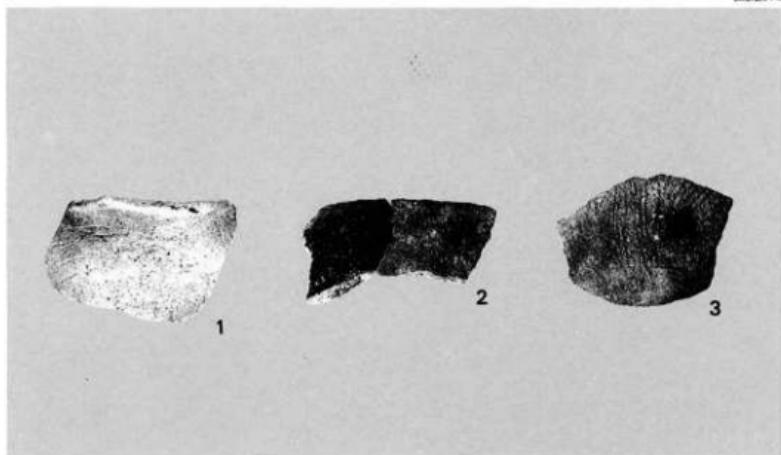
縄文時代の石器③

図版12

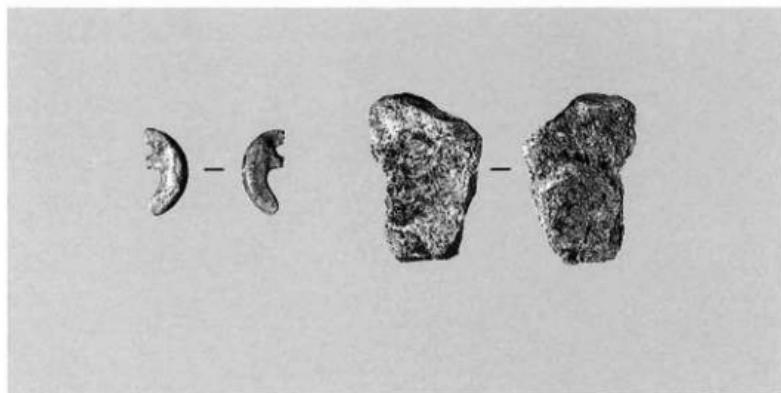


縄文時代の石器④

図版13



土器 (1/2)



勾玉・土製品 (1/1)

土器器・勾玉・土製品

II 七腕遺跡

— 北松浦郡江迎町所在 —



例　　言

1. 本報告は、昭和63年に実施した、長崎県北松浦郡江迎町七腕免堤の頭266-1に所在する、七腕遺跡発掘調査報告である。
2. 調査は、江迎町教育委員会が主体となり、長崎県教育庁文化課が調査を担当した。
調査関係者は下記のとおりである。
事業主体 平戸ゴルフクラブ株式会社
調査主体 江迎町教育委員会
調査担当 長崎県教育庁文化課
主任文化財保護主事 宮崎貴夫
文化財保護主事 村川逸朗
3. 調査時の写真撮影は宮崎、整埋時の遺物写真撮影は村川による。
4. 本報告の執筆及び編集は村川による。
5. 出土遺物及び図面、写真類は、現在県文化課で保管している。

本文目次

I 調査に至る経緯	71 (村川)
II 遺跡の立地と周辺の遺跡	72 (村川)
III 調 査	
1. 調査の概要	78 (村川)
2. 土 層	78 ()
3. 遺物の出土状況	78 ()
4. 出土遺物	85 ()
IV まとめ	90 (村川)

挿図目次

第1図 周辺遺跡の立地とその地形断面図	73
第2図 周辺地形と試掘調査横位置図	74
第3図 七腕遺跡の遺物出土状況及び土層図①	75
第4図 七腕遺跡の遺物出土状況及び土層図②	76
第5図 七腕遺跡の遺物出土状況及び土層図③	77
第6図 七腕遺跡の遺物出土状況及び土層図④	79
第7図 七腕遺跡十層図	80
第8図 七腕遺跡出土の石器①	81
第9図 七腕遺跡出土の石器②	82
第10図 周辺遺跡から表面採集された石器①	83
第11図 周辺遺跡から表面採集された石器②	84
第12図 周辺の遺跡(白岳遺跡)出土の石器	87
第13図 周辺の遺跡(白岳遺跡)の遺物出土状況及び土層図	88

表 目 次

第1表 七腕遺跡出土遺物一覧表	85
第2表 周辺遺跡出土石器計測表	89
第3表 七腕遺跡出土の石器計測表	89

図 版 目 次

図版1 七腕遺跡遠景・調査状況	95
図版2 TP-6・7遺物出土状況	96
図版3 TP-12付近景観	97
図版4 TP-4・5・6土層	98
図版5 TP-7・10・12土層	99
図版6 七腕遺跡出土の石器①	100
図版7 七腕遺跡出土の石器②	101

I 調査に至る経緯

北松浦郡江迎町と吉井町にまたがる白岳高原及び草ノ尾台地は、旧石器から縄文時代にかけての遺跡が数多く所在する所であるが、この場所に昭和62年10月、ゴルフ場建設を予定していることが新聞紙上において発表された。このゴルフ場の建設範囲内には、周知の遺跡である七腕遺跡があり、事業者である(株)平戸ゴルフクラブとの間で協議を行う必要性が生じてきた。昭和63年5月に、(株)平戸ゴルフクラブ、長崎県教育庁文化課、江迎町教育委員会の三者による協議を行い、遺跡の範囲を明らかにするために、①遺跡範囲の東西南北の4ヶ所に仮杭を打ち、盛土の後にその場所に標柱を建てる ②ホールと遺跡の範囲が入った図面を入れた説明板を建てること等が打ち合わせられた。

また、同年6月には、①盛土等の判断資料を得るために試掘調査を行うこと ②費用については原因者負担することが協議された。

昭和63年6月29日～同年7月5日まで試掘調査を実施した。調査の結果、旧石器時代の遺跡であることが明らかになったので、事業者と県教育庁文化課、町教育委員会の三者により、「七腕遺跡の保存等に関する協定書」を締結した。

II 遺跡の立地と周辺の遺跡

この七腕遺跡が立地する白岳原溶岩台地は白岳（373.3m）がピュート状をなし、その南縁に合戦原・白岳原・堤原などの平坦面を有する二重構造の溶岩台地で台地上には白岳池・大平池・道清池・福万寿池・堤原池・辻田池等多くの溜池が分布している。これらの溜池の周辺は、旧石器から縄文時代にかけての良好な遺跡となっている。

周辺の遺跡としては、まず、台地上の遺跡として辻田池遺跡、陣ノ尾遺跡、前田遺跡（以上吉井町所在）、白岳遺跡、福万寿池遺跡（以上江迎町所在）等があり、台地の東側の小渓谷中には、金城遺跡、福井洞穴、直谷岩陰（以上吉井町）等がある。この周辺の遺跡から表面採集された資料をみると、第10図の1～7、第11図の14・18がナイフ形石器であり、第11図の13の尖頭状石器、そして、同図15・16の台形石器もナイフ形石器文化期のものが多く、細石器文化期のものは、第10図の11と第11図の17の細石核の資料が2点と少ない。

また、白岳遺跡では、昭和60年3月4日～3月10日の7日間にわたり遺跡の範囲確認調査が実施され、良好なナイフ形石器文化期の遺物が発掘された。（第12・13図）この遺跡では第12図の1～5のナイフ形石器の他、4のエンドスクレイパー、5・6のコンケイブドスクレイパー、7～9のスクレイパー等が出土した。第13図をみてもわかる様に、第3層からは石器が出土するものの、第4層は、ナイフ形石器文化のプライマリーな層としてとらえられる。

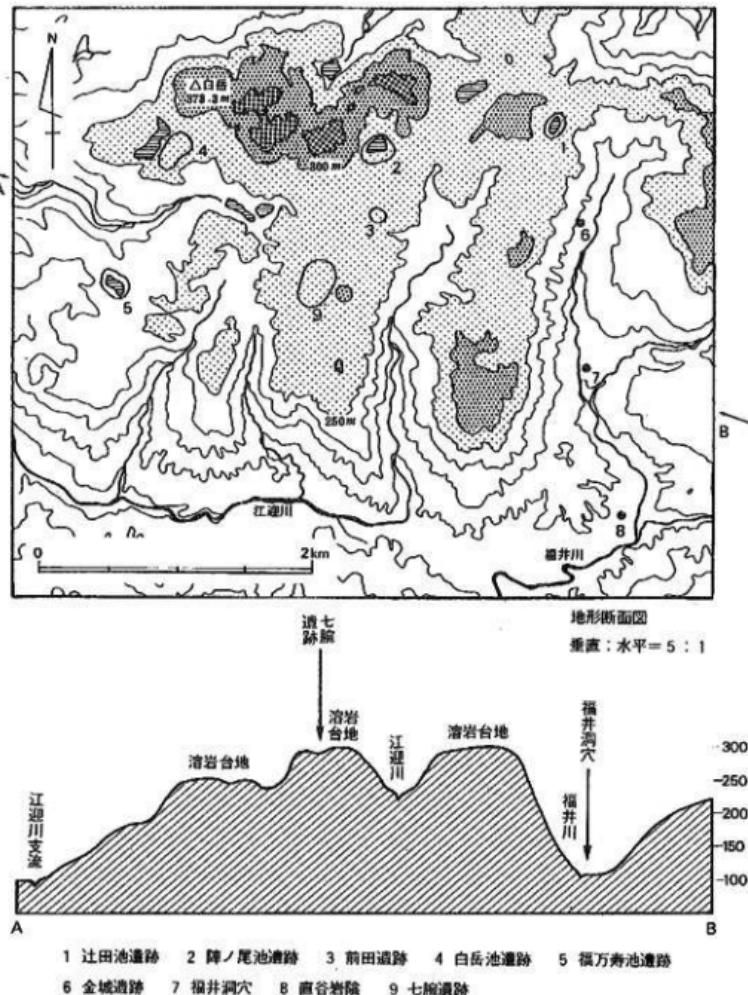
金城遺跡は、安山岩の原石産地であるが、尖頭器も採集されている。福井洞穴は、昭和35年から鎌木義昌・芹沢長介両氏により発掘調査され、第I～XV層までの15枚の土層が確認された。第II・III層で土器と細石刃核の共伴が確かめられ、最下層では両面加工石器が出土し、¹⁴C年代では31,900年より古いという値が出るなど、学史に残る重要な知見がもたらされた。しかし、第IX層と第VII層の間のナイフ形石器文化の時代が空白であった。直谷岩陰も福井洞穴と並行して調査され、細刀器、小刀器が層位的に発見されている。

第11図の19の彫器は、白岳遺跡より白岳を越えて、直線距離にして約2.5km北東の位置にある明賀谷遺跡採集のものである。同図の20は、この七腕遺跡発見のきっかけとなった灰青色黒曜石製剝片である。

註1 「土地分類基本調査」佐世保、長崎県 1974

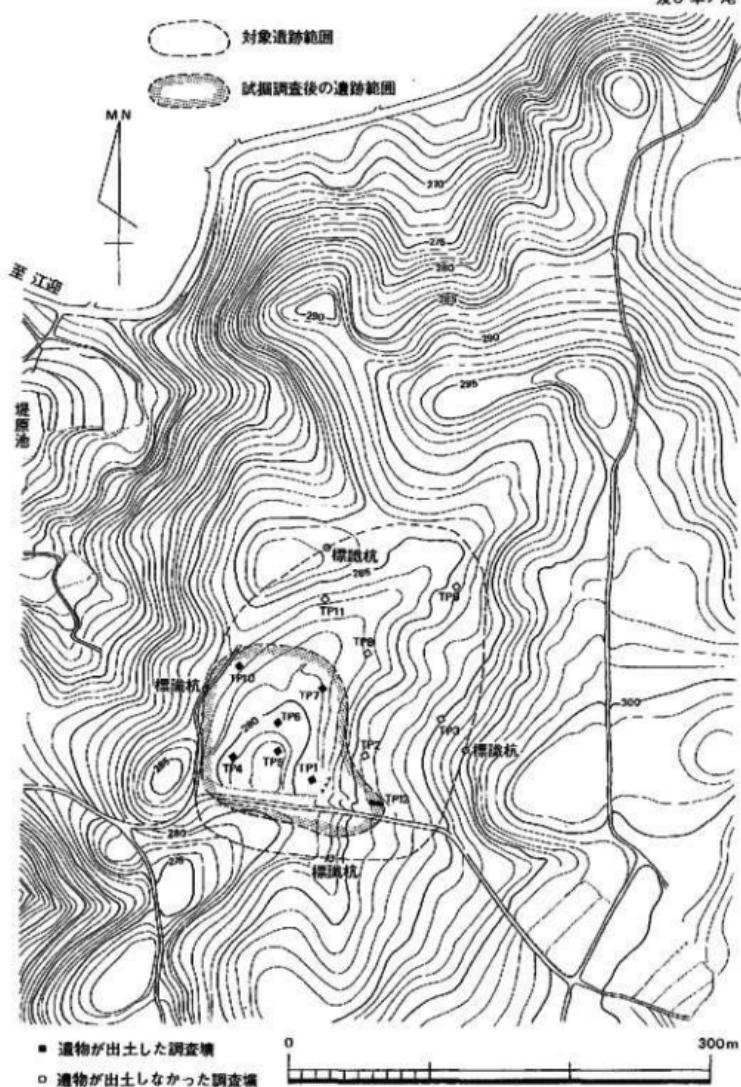
2 長崎県埋蔵文化財調査収報Ⅹ 「白岳遺跡」長崎県文化財調査報告書 第86集 長崎県教育委員会 1987

3 鎌木義昌・芹沢長介「長崎県福井岩陰遺跡」日本考古学協会第26回総会研究発表要旨 1960

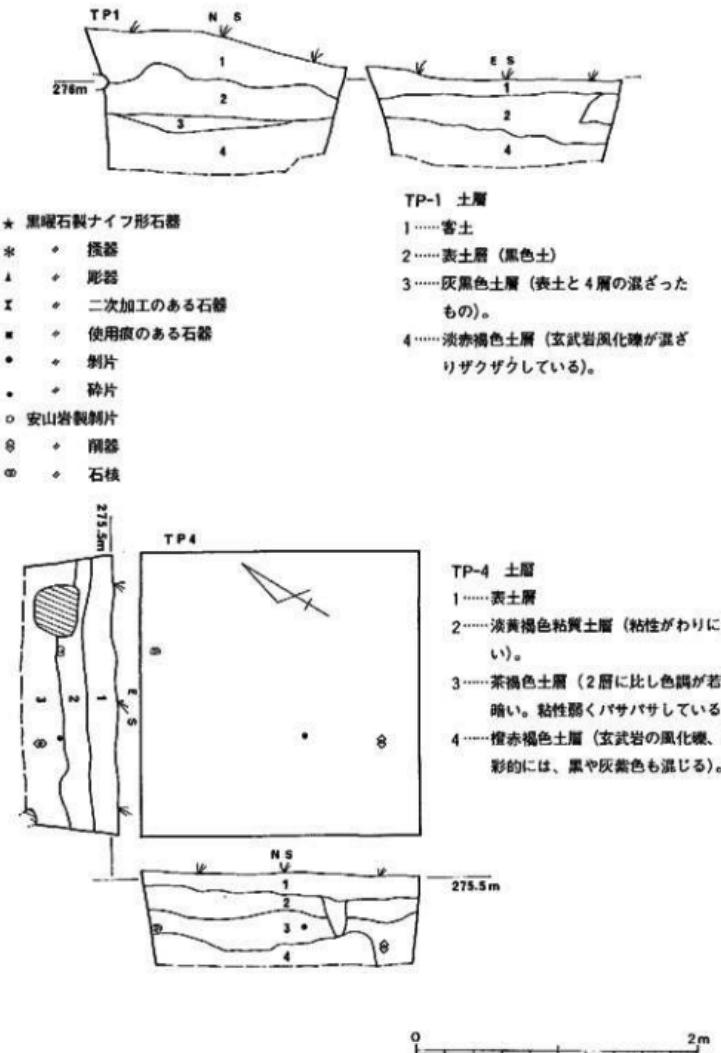


第1図 周辺遺跡の立地とその地形断面図

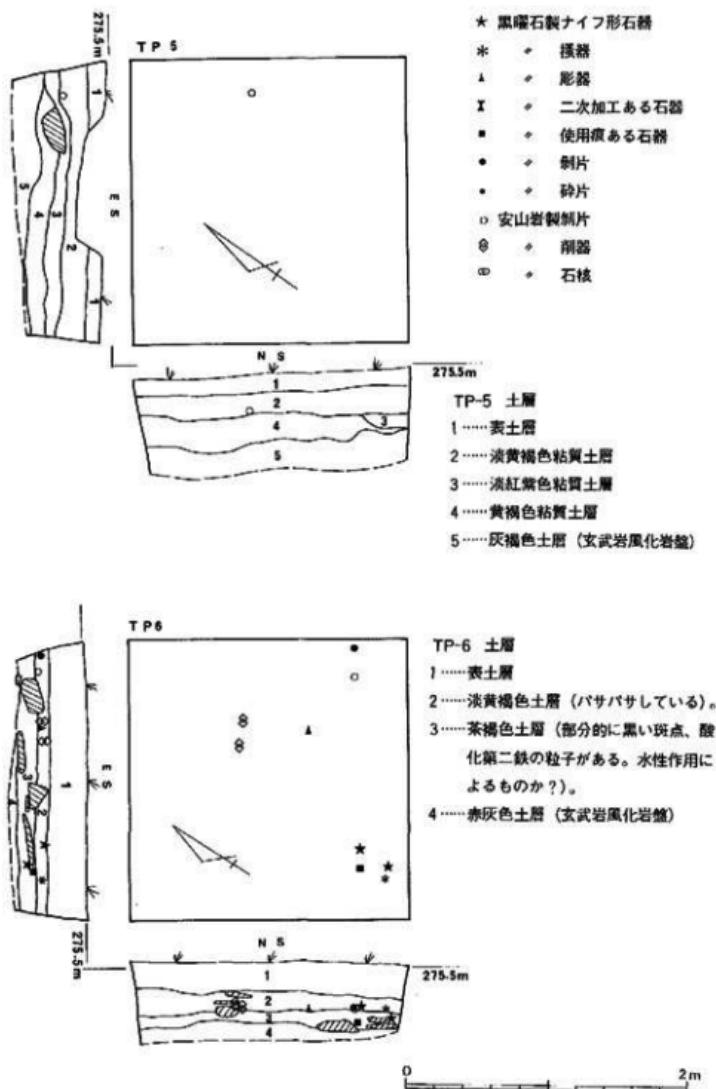
至 白岳国民休養地
及び草ノ尾



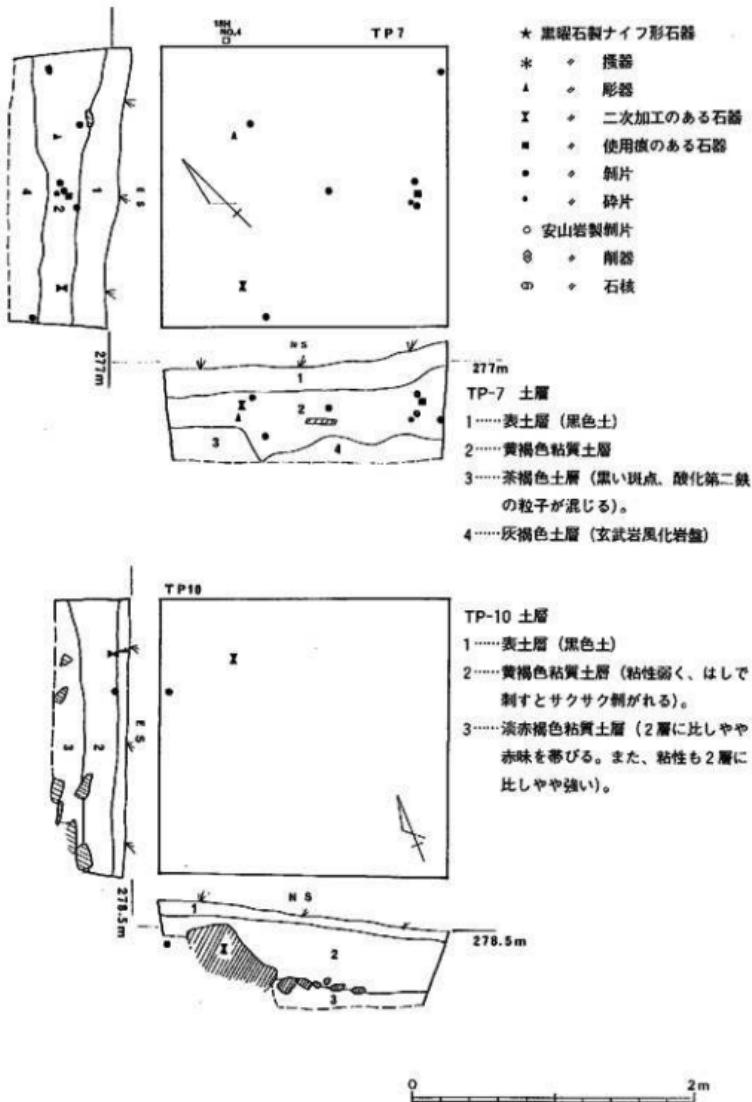
第2図 周辺地形と試掘調査場位置図



第3図 七腕遺跡の遺物出土状況及び土層図①



第4図 七腕遺跡の遺物出土状況及び土層図(2)



第5図 七輪遺跡の遺物出土状況及び土層図(③)

III 調査

1. 調査の概要

遺跡の広がりが予想される50,000m²の範囲にホールの方向を基準として2m×2mの調査場を11ヶ所(TP-1~11), 初当遺物が採集されていた地点に1m×8mの調査場1ヶ所(TP-12)を設定し, 遺跡の範囲確認調査を実施し, 計52m²の発掘を行った(第6図)。

2. 土層(第7~11図, 図版4・5)

土層は, 基本的には次の1~4層に大別される。

1層(表土層)

厚さ10cm程の薄い層で, 黒色でサラサラとした締まりのない表土層である。

2層(黄褐色粘質土層)

黄褐色系の粘質土層であるが, 色調の若干の違いによって細分できる。池内に設定したTP-4~6では黄色が強く軟らかい土層であり, 池周辺部の調査場では, 茶色っぽくわりと締まりのある土層である。6ヶ所の調査場(TP-4~7・10・12)で旧石器時代の石器の包含が認められた。

3層(玄武岩風化土粒混入茶褐色土層)

淡灰色の玄武岩風化土粒を含む土層。TP-6は, 鉄分の沈澱によって褐色味をおび, 水の影響が考えられる。池周辺部では, TP-12のように赤味をもつ土層もみられる。2ヶ所の調査場(TP-6・7)に旧石器時代の石器の包含が認められた。

4層(赤灰色風化岩盤土層)

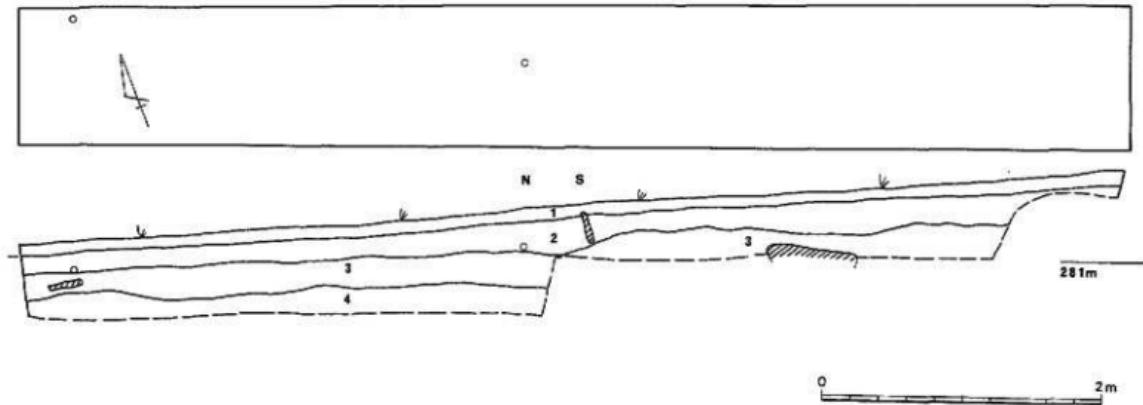
当地で, 「グミ盤」と称される玄武岩の風化岩盤土層である。無遺物層。それぞれの調査場によって若干色調が異なる。

3. 遺物の出土状況(第7~10図)

当遺跡の遺物の出土状況は, 2層と3層から旧石器時代の遺物が出土する。2層から遺物が出土したのは, TP-4~7・10・12の6ヶ所の調査場で, 24点の石器が出土した。3層から遺物が出土したのはTP-6・7の2ヶ所の調査場で3点の石器が出土した。TP-1調査場は, 池の土手を築く際に削平されたのであろうか遺物包含層は無くなっていたが, 1層から黒曜石剥片が出土したことにより, 元々は遺跡の範囲に含まれていたものと思われる。

TP-12付近では, 調査前の表面採集では黒色の黒曜石製剝片を2点, 灰青色の黒曜石剥片を4点, 合計6点の剥片を, 自然排水溝の北側傾斜面の2層(黄褐色粘質土層)から発見していくが, 今回の発掘では, 2点の安山岩製剝片が出土するだけにとどまった(第10図)。

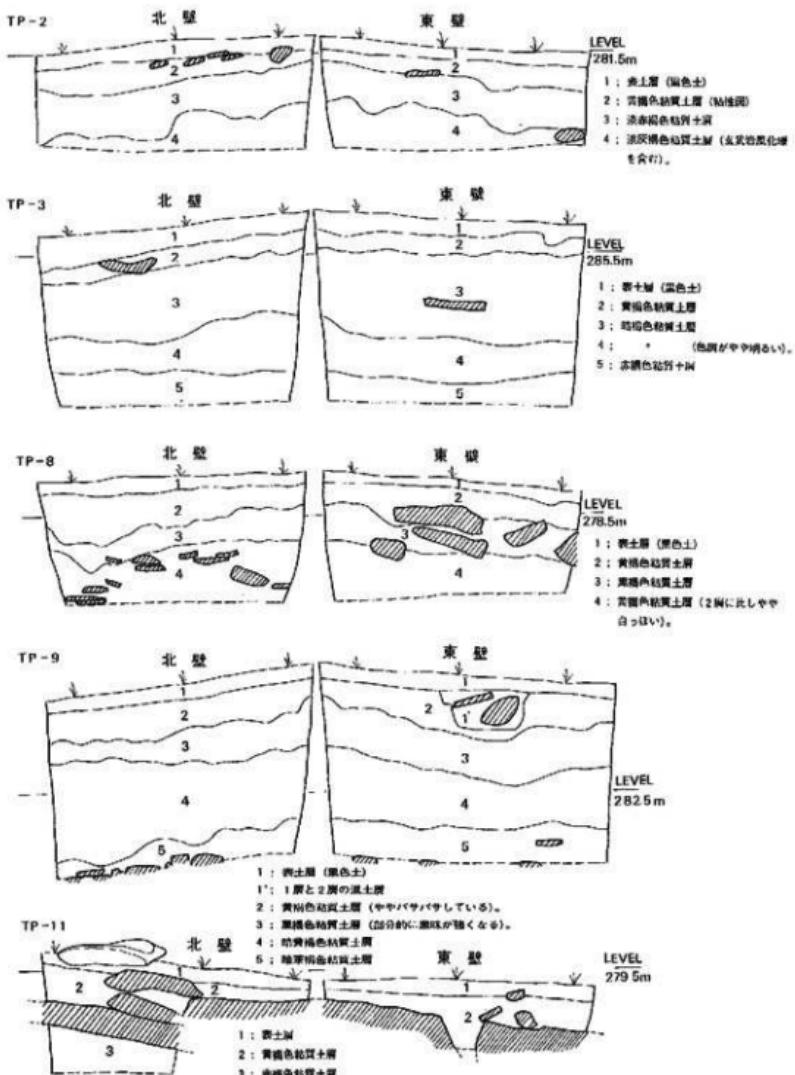
T P 12



- 1……表土層
- 2……黄褐色粘質土層（粘性廻し）
- 3……暗褐色粘質土層
- 4……赤褐色粘質土層

○ 安山岩製削片

第6図 七腕遺跡の遺物出土状況及び土層図④



第7図 七輪遺跡土層図

4. 出土遺物（第12・13図、図版6・7）

今回の調査によって、7ヶ所の調査場から27点旧石器時代の石器が出土し、また、表土層及び表面採集分の4点を合わせ計31点の石器の出上がみられた。

第1表 七施遺跡出土遺物一覧表

	2層	3層	その他 (表土及び表面採集)
TP-1			1層 黒曜石製剝片……2
TP-4	黒曜石製碎片……1 安山岩製削器……1 安山岩製剝片……1		
TP-5	安山岩製剝片……1		
TP-6	黒曜石製ナイフ形石器……1 黒曜石製搔器……1 黒曜石製彫器……1 黒曜石製剝片……1 安山岩製削器……2 安山岩製剝片……1	黒曜石製ナイフ形石器……1 黒曜石製使用歴ある剝片……1	
TP-7	黒曜石製二次加工ある石器……2 黒曜石製使用歴ある剝片……1 黒曜石製剝片……5 黒曜石製碎片……1	黒曜石製剝片……1	
TP-10	黒曜石製二次加工ある石器……1 黒曜石製剝片……1		
TP-12	安山岩製剝片……2		
池部分 表面採集			黒曜石製小型 ナイフ形石器……1 黒曜石製削器……1
計	24	3	4

1は、黒色黒曜石製ナイフ形石器。縦長剥片を素材としている。長さ42mmで中型といえようか。バティナも観察される。TP-6, 3層出土。2は、安山岩製石錐である。扁平な剥片を使用して石錐を作出している。七腕遺跡表面採集。3・4は、黒色黒曜石製二次加工ある石器である。この2点は形は異なっているが、それぞれに同様な条件で加工や使用痕が観察される。

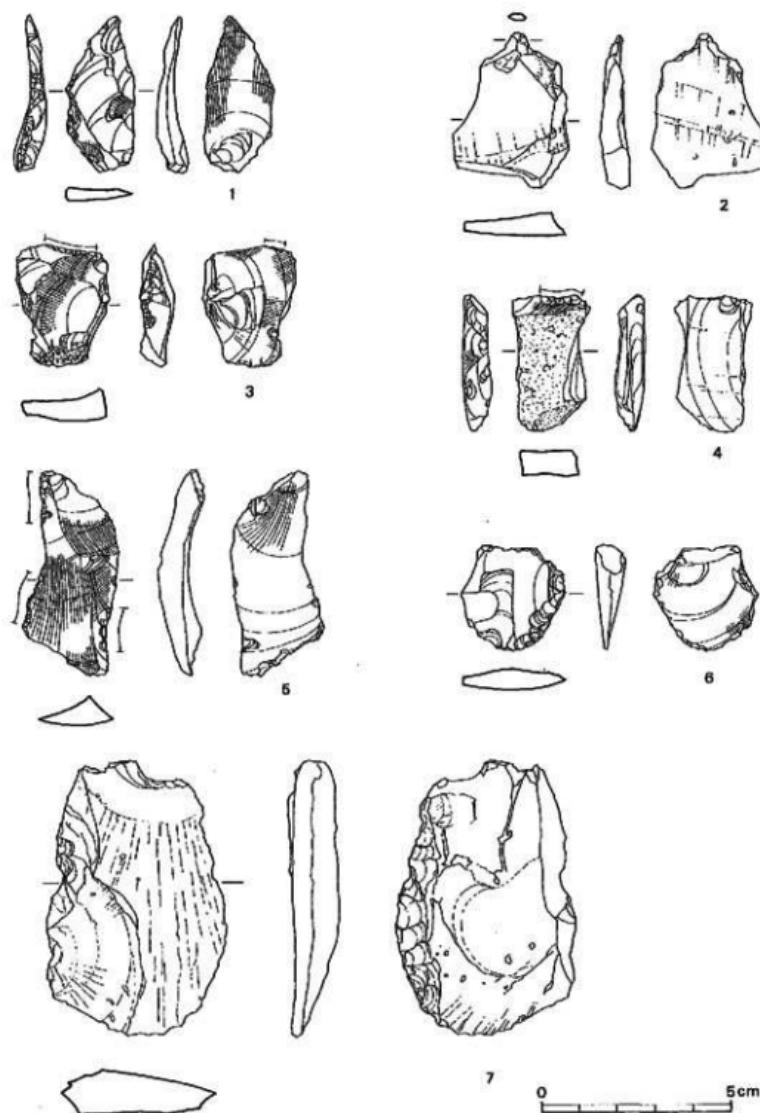
即ち、ともに横広の切断剥片を使用していること、刃部に使用痕がみられること、切断部に二次加工を施していること等々である。特に3の資料は形態的には台形石器に似ているところが注目される。3はTP-10, 4はTP-7出土。5は、黒色黒曜石製使用痕ある剥片。縦長剥片を使用している。TP-7出土。6は、黒色黒曜石製スクレイバー。打面の平坦部を除くとほぼ小円形をしている。表面採集。7は、安山岩製スクレイバー。打点をランダムに転移する石核から剥取された剥片を素材としている。主要剥離面側からのみ二次調整を施している。丁度手の中にすっぽりと納まる位の大きさである。TP-4出土。8は、黒色黒曜石製剥片。法量的にはちょうど縦横同じ大きさであるが、技術的には横長の剥片剥離技術によるものであろう。下部に新しい欠損がある。TP-7出土。9は、黒色黒曜石製剥片。切断している。TP-7出土。10も白い不純物が入った、やや粗質の黒色黒曜石製の剥片である。打面再生剥片の可能性もある。TP-7出土。11は、黒色黒曜石製石核、打面をランダムに転移して剥取していくタイプの石核である。残核としては小さい。表面採集。12は、安山岩製のコアスクレイバーである。原礫ある程度の厚みをもって剥取し、その素材の周辺から剥取していくタイプの石核である。使用痕がみられるところからコアスクレイバーとした。TP-4出土。

図版7の2は、黒色黒曜石製ナイフ形石器である。薄い剥片を素材とする。基部のみの残存。この資料をはじめとして図版7の1~9の9点は、TP-6の出土である。同図版の4は黒色黒曜石製彫器である。幅狭の打面を設定した後、グレイバーファシットを落としている。6は安山岩製の剥片である。7・9も、安山岩製のスクレイバー。7は、大きさが95mm×55mmを計り、半円形の形をしている。8は、黒色黒曜石製の使用痕ある剥片である。使用痕の部位が、コンケイブドスクレイバー状に湾入している。上述した黒曜石にはバティナ有。

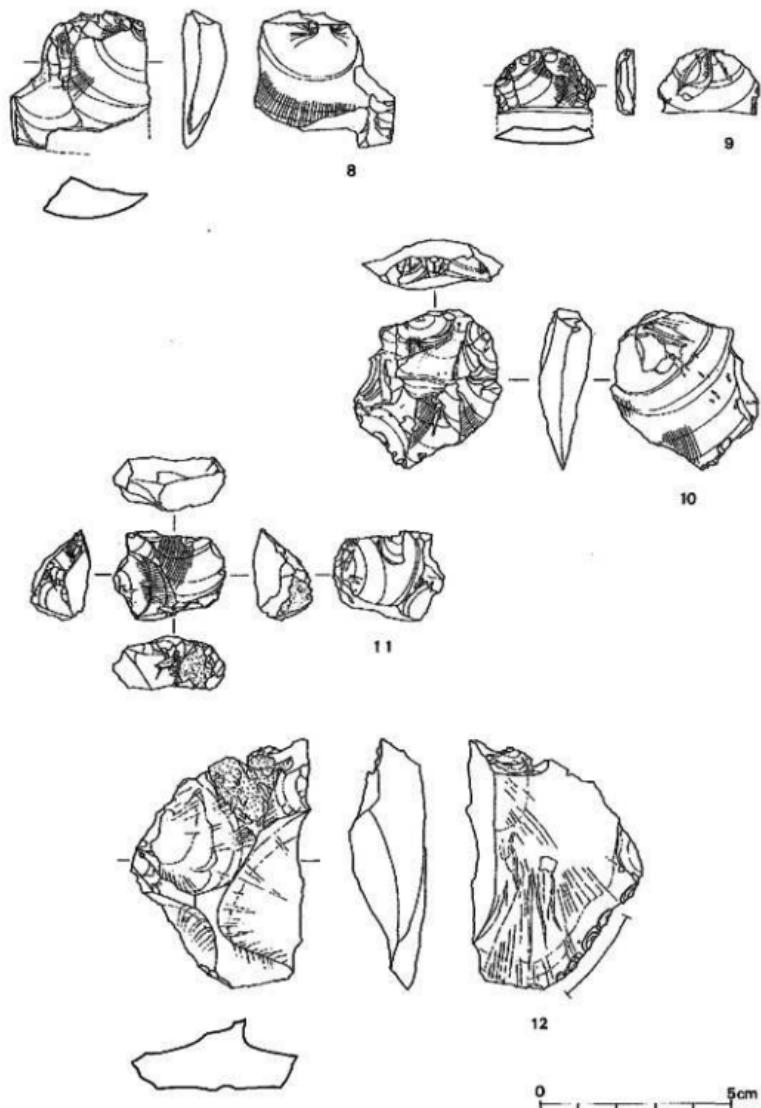
IV まとめ

当遺跡の2層・3層からそれぞれ各1点ずつ出土したナイフ形石器は、その特徴からナイフ形石器文化盛行期のものとみられ、石器表面のバティナ（風化）も古い様相を示している。また、石器に利用された素材は、ナイフ形石器の素材である縦長剥片と、第12図の3・4の二次加工ある石器のように、横広の剥片を用いているものもある。他に、彫器、撲器、削器等の石器が出土しているが、TP-6や7から出土した石器はそれなりにナイフ形石器に共伴するものと考えられる。

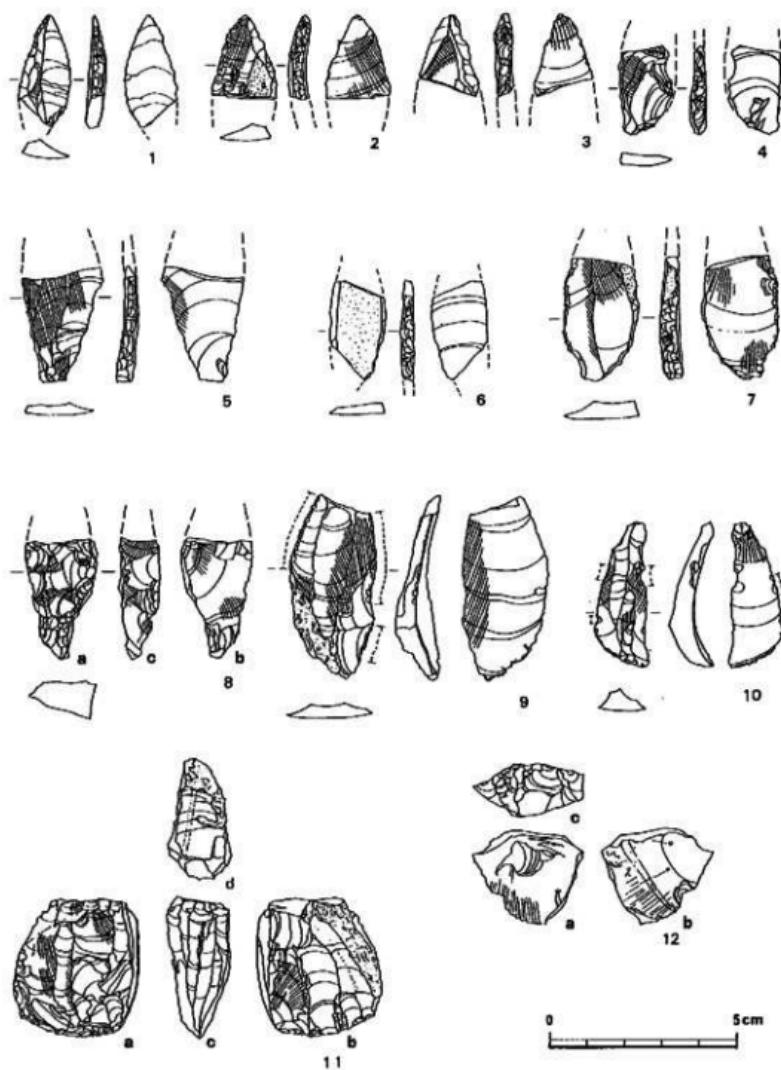
しかし、白岳遺跡出土品に類似した小形ナイフ形石器1点が池から表面採集されており、こ



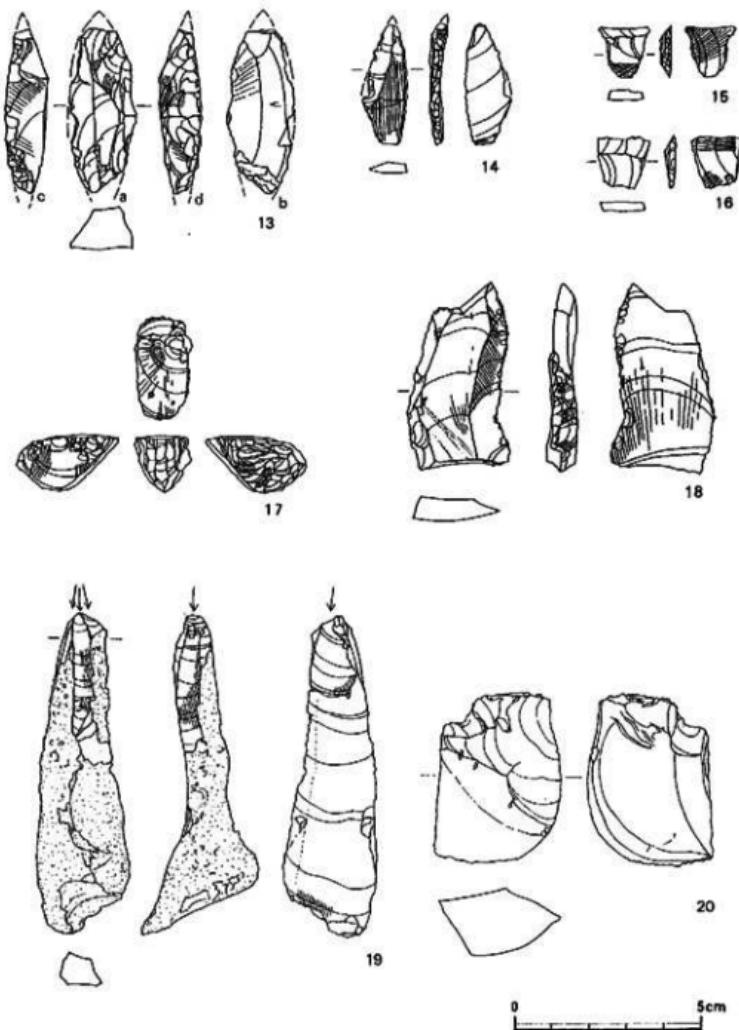
第8図 七腕遺跡出土の石器①



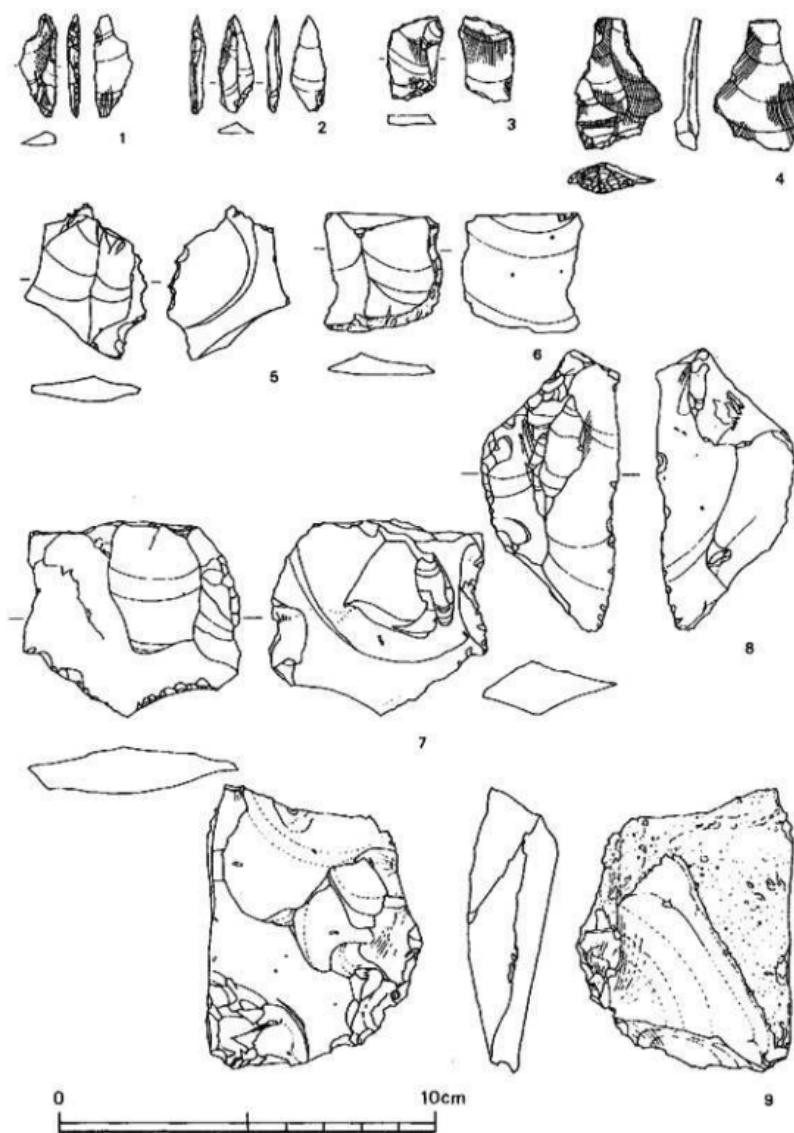
第9図 七腕遺跡出土の石器②



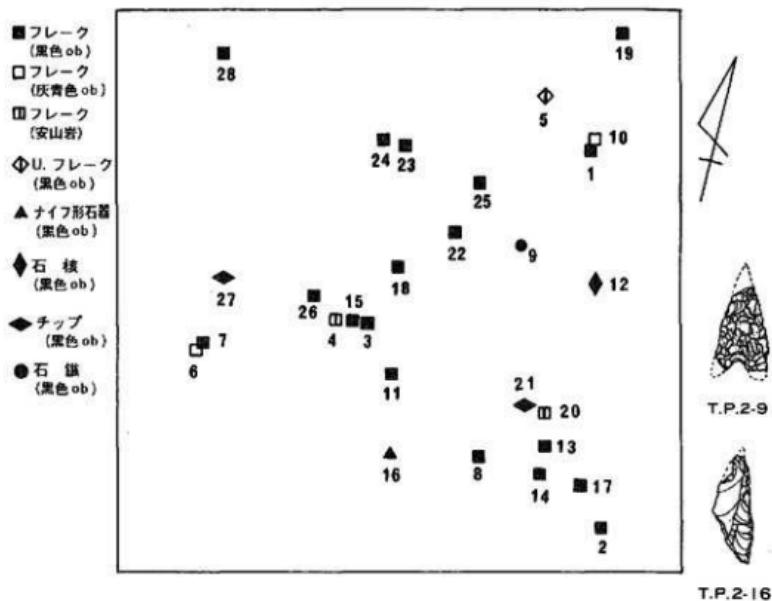
第10図 周辺道路から表面採集された石器①



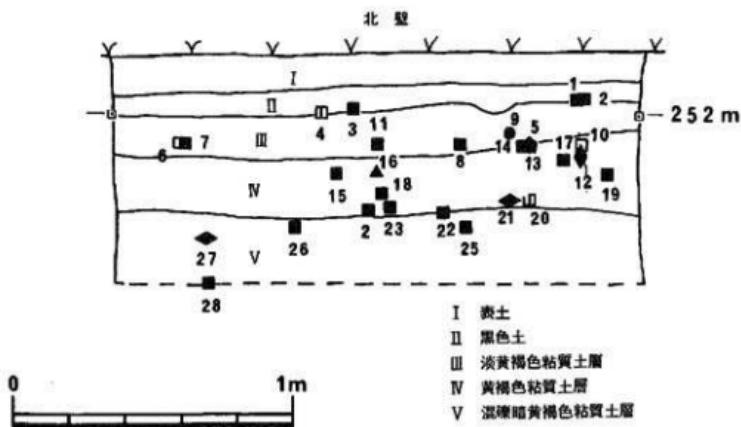
第11図 周辺遺跡から表面採集された石器②



第12図 周辺の遺跡(白岳遺跡)出土の石器



T.P. 2-16



第13図 周辺の遺跡(白岳遺跡)の遺物出土状況及び土層図

第2表 周辺遺跡出土石器計測表

団番号	器種	石材	最大長(㎜)	最大幅(㎜)	最大厚(㎜)	重量(g)	自然端面の状況	備考
1	ナイフ形石器	灰青色ob	30.5	12.5	5.0	1.5	—	
2	*	漆黒色ob	22.5	17.5	6.0	1.6	平坦	
3	*	*	22.0	15.8	5.5	1.3	—	
4	*	黒色ob	23.5	14.3	4.5	1.3	—	
5	*	*	30.5	22.0	6.0	2.4	—	
6	*	*	26.5	15.0	3.5	1.4	平坦	
7	*	*	32.8	20.5	6.0	3.9	*	
8	不明石器	漆黒色ob	32.0	19.0	11.0	5.0	—	
9	使用痕ある剝片	黒色ob	49.0	23.5	12.0	7.4	円錐	
10	*	*	38.5	19.0	12.0	2.5	—	
11	細石刃核	*	37.5	33.5	17.0	18.9	円錐	
12	打面再生剝片	灰青色ob	25.5	30.0	14.0	7.0	—	
13	尖頭状石器	*	43.0	18.0	11.5	8.0	—	
14	ナイフ形石器	黒色ob	32.0	12.5	5.0	1.2	—	
15	台形石器	*	13.5	13.8	3.0	0.5	—	
16	台形石器?	*	14.0	14.0	3.0	0.5	—	
17	細石刃核	*	15.5	27.0	16.0	5.3	円錐	
18	ナイフ形石器	*	50.0	28.0	8.0	9.4	—	ob中に白や黄の不純物
19	彫器	*	85.0	24.5	31.0	30.0	角錐	
20	剝片	灰青色ob	45.0	34.0	22.0	—		

第3表 七腕遺跡出土の石器計測表

団番号	遺物No	器種	石材	最大長(㎜)	最大幅(㎜)	最大厚(㎜)	重量(g)	バティナ	自然端面	折断	備考
1		ナイフ形石器	黒色ob	42.0	18.0	10.0		○			
2		石錐	安山岩	41.0	31.0	8.0	8.4				
3	七-10-1	二次加工ある石器	黒色ob	33.0	25.0	9.0	5.6	○		○	
4	七-7-7	*	*	36.0	21.0	8.0	6.6	○	平坦	○	白い不純物混入 石材粗質
5	七-7-6	使用痕ある剝片	*	54.0	25.0	12.0	7.0	○	—	—	
6	七-H	スクレーパー	*	28.0	27.0	8.0	4.3	○	—	—	
7	七-4-3	*	安山岩	73.0	48.0	14.0	47.1			—	
8	七-7-9	剝片	黒色ob	37.0	37.0	12.0	10.5	○	平坦	—	
9	七-7-10	*	*	18.0	26.0	5.0	2.3	○	—	○	
10	七-7-2	*	*	42.0	39.0	14.0	15.4	○	—	—	白い不純物混入 石材粗質
11	七-H	石核	*	24.0	30.0	16.0	8.0	○	平坦	—	
12	七-4-2	スクレーパー	安山岩	66.0	47.0	21.0	43.2			*	—

れは2層・3層出土のナイフ形石器よりもやや新しい様相をもつものである。

したがって、当遺跡は旧石器時代のなかでもナイフ形石器文化段階に位置するが、单一時期だけでなく、複数の時期にわたって遺跡が形成された可能性が考えられ、二万年前後から一万五千年前までの年代を中心とすると思われる。

北松地域は、旧石器時代の遺跡が多く集中しているが、発掘調査され内容が明らかになった遺跡は数少ない。また、当遺跡が立地する溶岩台地にしても、昭和60年に実施された白岳遺跡に次いで今回の調査が2例目である。いずれもナイフ形石器文化の遺跡である事を明らかにした訳であるが、周辺の遺跡で表面採集されたナイフ形石器文化期の資料も合わせて、この溶岩台地におけるナイフ形石器文化期の遺跡の群在を示したという意義がある。

というのは、この玄武岩溶岩台地の東側の小渓谷中には、約200mの比高差をもって福井洞穴が所在する訳であるが、この福井洞穴では、何故かナイフ形石器文化期の時代が空白であることを芹沢長介氏が次のように指摘している（芹沢1967）。「……（前略）……しかし、ここで注意しなくてはならないのは、福井洞穴においては、ナイフ形石器もしくは石刃を主体とする文化の大部分が欠けているということである。九州各地には、ナイフ形石器や石刃を多く出土する遺跡が知られているが、それらの時期にはどういうわけか、福井洞穴が住居として利用されなかったとしか考えられない。14C年代でいえば2万年前から1万4千～1万5千年前までのあいだであったろう。」と述べている。この空白であったナイフ形石器文化が、福井洞穴から至近距離にある台地上で、発掘調査により確認されたのである。この台地におけるナイフ形石器文化の立地と、洞穴における細石器文化の立地のあり方は際立っているが、萩原博文氏は、「西北九州の黒曜石旧石器製作遺跡」の中、「4、細石器文化期の遺跡」の中で、「ナイフ形石器文化期に共通して認められた、原産地あるいはその周辺の開拓地における石器素材の大量生産という文化現象は、細石器文化期には解体するようである。すなわち、原産地での細石核の大量製作は全く認められず、湿地周辺に大遺跡が形成されなくなる。そのかわり、洞穴、岩陰がよく使用されるようになり、泉福寺洞穴や福井洞穴などでは細石刃、細石核が大量に検出されている。このようなあり方は、松浦核地帯のみに認められ、他の地域では従来の遺跡立地と大きな変化はないようである。」と述べている。

この七腕遺跡も、地理的にはこの松浦核地帯の中に内包され、今度の調査で、ナイフ形石器文化の溶岩台地上における古地を明らかにし、その発掘事例を増したところに意義があろう。

以下5項目にまとめてみると、

- ① 今回の調査によって旧石器時代の石器27点が出土し、2万年前後から1万5千年前までのナイフ形石器文化の段階の遺跡であることが判明した。
- ② 現状は、溜池の堤と草原になっているが、当時も湧水がみられ、水辺に集まる動物の狩猟を行っていた生活の跡であったことが想定できよう。
- ③ 12ヶ所の調査場の内、7ヶ所の調査場から石器が出土し、池を中心とした東西130m×南

北130mほどの範囲に遺跡の広がりがとらえられた。

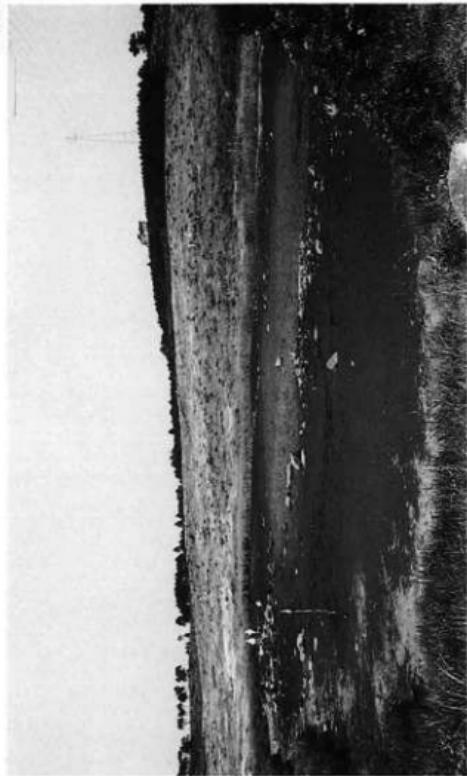
- ④ この溶岩台地において、ナイフ形石器文化期の遺跡である事を発掘調査により明らかにし、周辺の遺跡である福井洞穴との対比により、溶岩台地上におけるナイフ形石器文化から、洞穴における細石器文化への時代の変化による遺跡立地の移り変りについての見通しを示した。
- ⑤ 調査によって絞りこまれた当該遺跡の取扱いについて、今後の保存と顕彰について理解と協力をお願いするものである。

註1 鎌木義昌・芹沢長介『日本の洞穴遺跡』平凡社 1967

2 萩原博文『西北九州の黒曜石旧石器製作遺跡』ニューサイエンス社 P.P.17・18 1990

図 版

図版 1



七輪遺跡遠景(西南から北東を望む)



調査状況

圖版 2



TP-7遺物出土狀況



TP-6遺物出土狀況



TP-12付近景観（最初に遺物を発見したところ）

七號遺跡

圖版 4



TP-4 東壁土層



TP-5 北壁土層



TP-6 東壁土層

圖版 5



TP-7 東壁土層

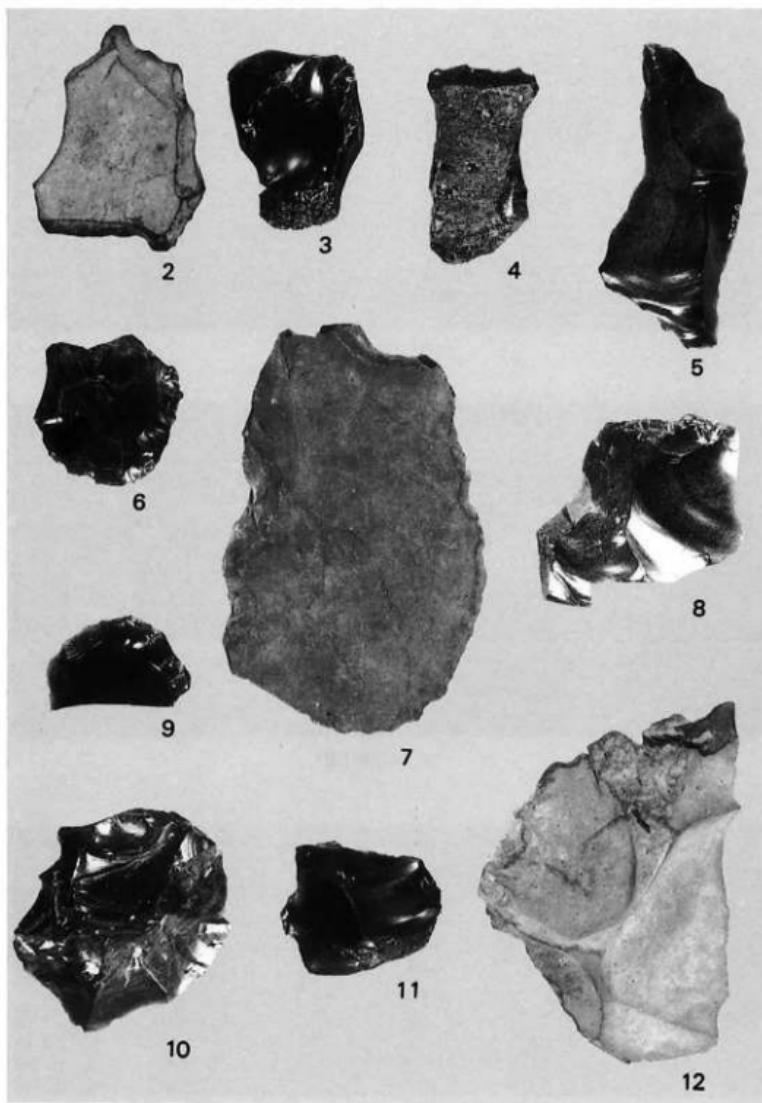


TP-10 北壁土層



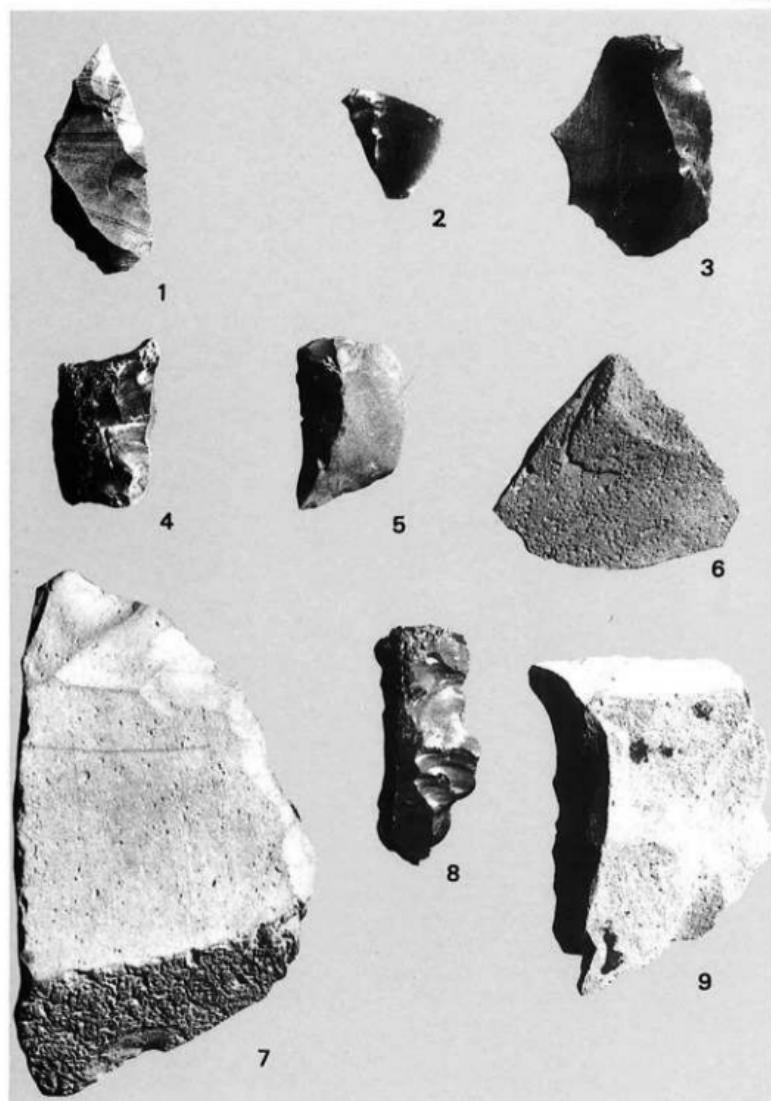
TP-12 北壁土層

図版 6



七腕遺跡出土の石器①(実大)

図版 7



七腕遺跡出土の石器 ② TP-6 (実大)

III 平川原池遺跡

—北松浦郡世知原町所在—



例　　言

1. 本報告は、鉱害復旧事業（平川原池地区）に伴う長崎県北松浦郡世知原町所在の平川原池遺跡範囲確認発掘調査報告書である。
2. 調査は世知原町教育委員会が主体となり、長崎県教育庁文化課が調査を担当した。
3. 調査担当者

分布調査　神尾 岩治　長崎県教育庁文化課長補佐
(現、長崎教育事務所総務課長)

田川　肇　　タ　　調査係長
副島 和明　タ　　主任文化財保護主事

範囲確認調査　原村 武利　世知原町教育委員会教育長
山口 秋次　　タ　　事務局長
船津 英雄　　タ　　社会教育主事
副島 和明　　長崎県教育庁文化課主任文化財保護主事
小野ゆかり　タ　　文化財調査員

4. 本報告の執筆は副島と小野が分担執筆し、本文目次に記している。
5. 遺物の実測・整図は小野、写真撮影は副島が行った。
6. 本報告の編集は副島・小野が担当した。
7. 出土遺物および図面・写真類は、現在県文化課で保管している。

本文目次

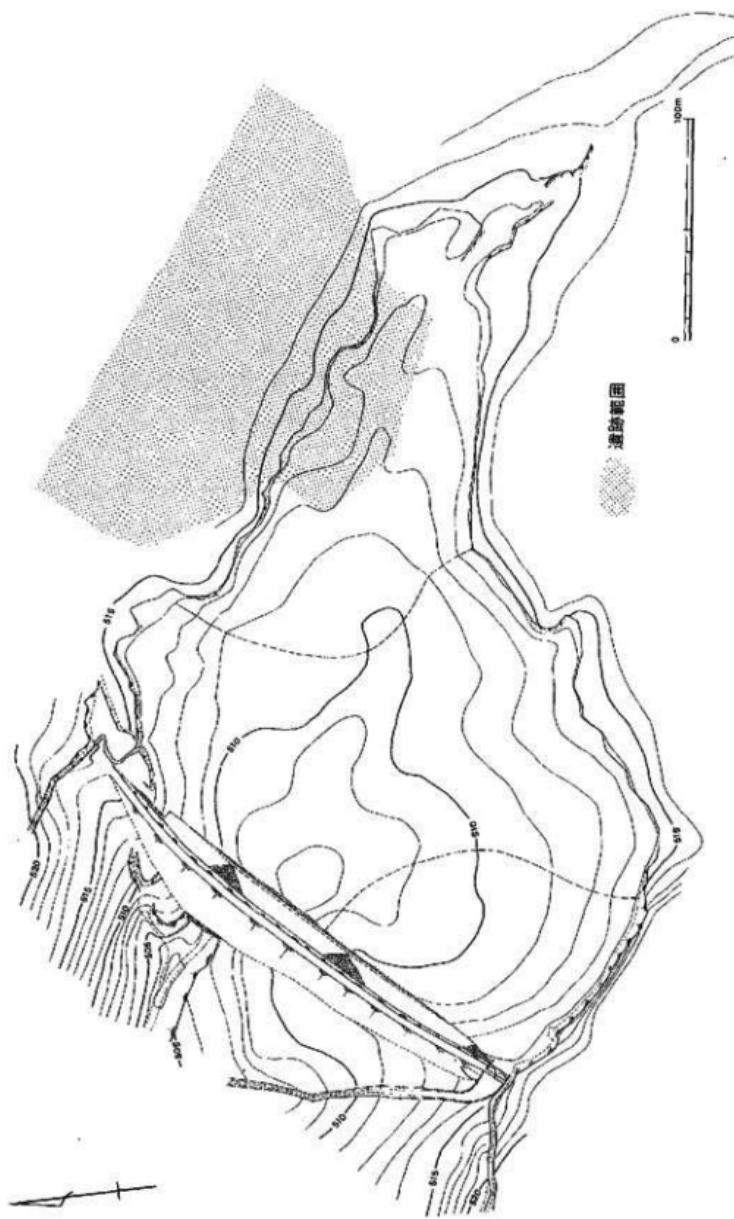
I 調査に至る経緯	107 (副島)
II 遺跡の地理的歴史的環境	108 (小野)
III 平川原池遺跡の調査	110 (副島)
1. 調査概要	110 (副島)
2. 土層	110 (小野)
3. 出土遺物	110 (小野)
4. 遺物の出土状況	114 (副島)
IV 小結	118 (副島)

挿図目次

第1図 平川原池周辺地形図	106
第2図 試掘場配置図	107
第3図 周辺の遺跡	109
第4図 土層断面図 (1/40)	111
第5図 繩文時代の石器 (2/3)	112
第6図 繩文時代の石器 (2/3)	113
第7図 試掘場 (TP-1) 第Ⅲ層遺物分布図 (1/40)	115
第8図 試掘場 (TP-2) 第Ⅲ層遺物分布図 (1/40)	116
第9図 試掘場 (TP-3) 第Ⅲ層遺物分布図 (1/40)	117

図版目次

図版1 遺跡遠景	121
図版2 土層・第Ⅲ層遺物出土状況	122
図版3 出土遺物	123
図版4 調査風景	124



第1図 平川原池周辺地形図 (1/2,500)

I 調査に至る経緯

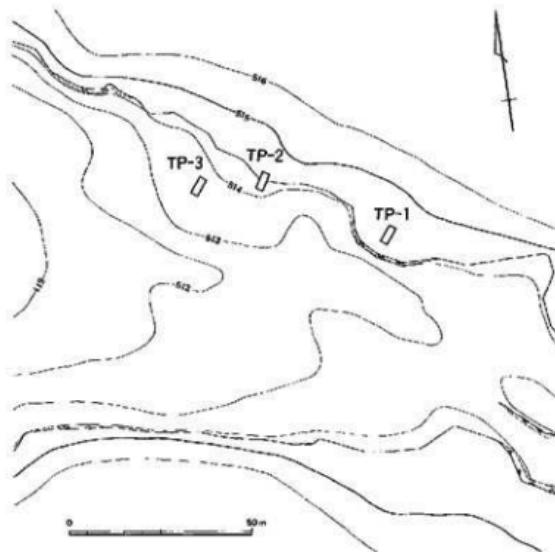
世知原町平川原池地区に、鉱害による漏水の漏水防止工事等鉱害復旧事業が町営事業（昭和61年11月～平成元年3月）として計画策定された。

当該工事着工時に計画範囲の一部に周知された埋蔵文化財があるので、その取扱いについて指導を受けたいと町教育委員会から連絡を受けた。

県文化課は早速現地踏査を実施し、現地で町教育委員会・町担当部局と三者協議を行って、工事計画区域内の範囲確認調査を実施し、協議の基礎資料を得ることになった。

範囲確認調査は町教育委員会が調査主体で、県文化課が調査を担当することになり、昭和61年12月15日から6日間にわたり、 $2\text{ m} \times 5\text{ m}$ の試掘場を3箇所設定して実施した。（当初、遺跡の範囲は工事計画区域内に約40,000m²の面積に分布すると考えられていたが、現地踏査および部分的な掘削工事の土層断面等の状況観察によって、約2,000m²の範囲に限られることが分かり、その範囲についての調査であった。）

その結果、工事区域内に約1,000m²の範囲に縄文時代早期の遺物が包含されることが確認された。以上の結果を踏まえて協議を重ね、当該部分は設計変更を行い盛土工法に変えて、現状保存されることになった。



第2図 試掘場配置図

II 遺跡の地理的歴史的環境

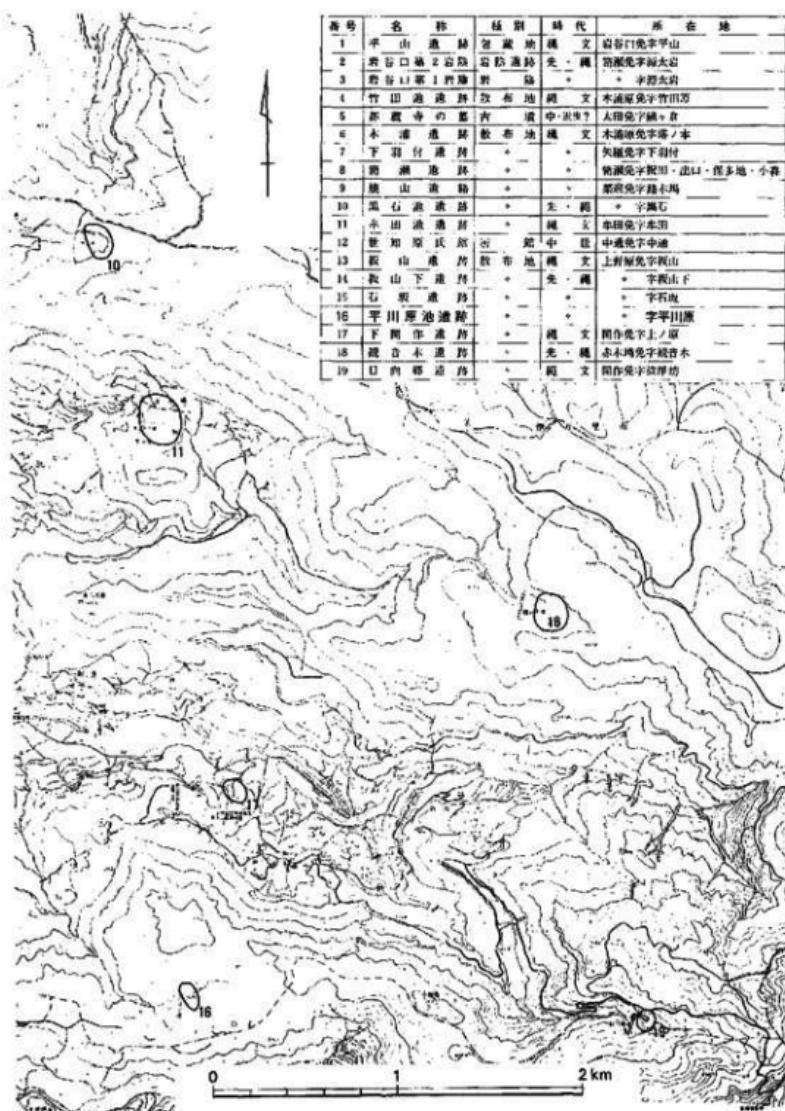
遺跡の所在する世知原町は長崎県の北部、北松浦半島のほぼ中央部に位置する。東は佐賀県伊万里市・同県西松浦郡西有田町、西は古井町、南は佐世保市、北は松浦市に接し県下で数少ない海を持たない町である。東端に半島の最高峰国見山(776.7m)があり、この山を水源にしている佐々川が北西に貢流してこの流域に集落を形成している。西方の谷の開口部を除く東・南・北の三方を国見連山に囲まれており標高が高く、寒冷なところである。

北松浦半島は溶岩台地で覆われており、長崎側にゆるやかに傾き、佐賀県側は断層線崖が急傾面を形成している。溶岩台地面は高原となっており、高地性遺跡が点在している。

平川原池遺跡は世知原町上野原免に所在し、標高500m以上の高さにある旧石器・縄文時代の遺跡である。ここは広大な池になっており、池を中心に尖頭器・細石核・搔器・石鏃等の遺物が散布している。同様の旧石器・縄文時代の遺跡は、黒石池遺跡、板山下遺跡、石坂遺跡、観音木遺跡などがあり、佐々川流域には昭和41年に古代学協会・世知原町によって発掘調査された岩谷口第1・第2岩陰遺跡がある。また黒石池遺跡・観音木遺跡も標高500m以上の溶岩台地上に分布しており、平川原池遺跡と同様の立地をしている。続く縄文時代の遺跡も点在し、代表的なものに竹田遺跡、大正時代から大量の石鏃の発見で知られる焼山遺跡がある。また日向郷遺跡は国見山を中心に観音木遺跡と対面の位置にあり同タイプの刃器が表面採集されている。他にも板山遺跡等10箇所程度ある。中世の遺跡では世知原氏の居館跡がある。世知原氏は応永2年(1395)に逝去した世知原市正という人物を開基としており、近傍の城山に世知原城を築いた。これは中世特有の根小屋式山城の体裁を整えていた。

参考文献

- 『世知原郷土誌』世知原町郷土誌編纂委員会 1971
『角川日本地名大辞典 42 長崎県』角川書店 1987



第3図 囲辺の遺跡

III 平川原池遺跡

1. 調査概要

遺跡は東側に佐賀県境を呈す国見山系(国見山標高776.7m等)と南側に佐世保市境(小塚岳標高632m等)等の山麓の標高510m程の台地上に立地する。

調査は昭和61年12月15日～12月20日まで、2m×5mの試掘場を3箇所設定し、調査面積30m²について実施した。

2. 土層

遺跡は溜池部分の北側に立地している。この中で遺跡の範囲確認調査を行った区域は、標高513m～515mに位置し、北東から南西方向へ傾斜している。試掘場は、池の水際の線より上の部分に設定し、傾斜に沿って北東から南西へ2m×5mのものを3箇所設けた。便宜上、東から西へ、TP-1, TP-2, TP-3と番号を付した。

土層の堆積状況は次のとおりである。

第Ⅰ層	表土
第Ⅱ層	暗黄色土層 (TP-1)
	暗赤黄色土層 (TP-2・3)
第Ⅲ層	黄色粘質土層 (TP-1)
	赤褐色粘質土層 (TP-2・3)
第Ⅳ層	淡灰黒色粘質土層 (TP-1～3)

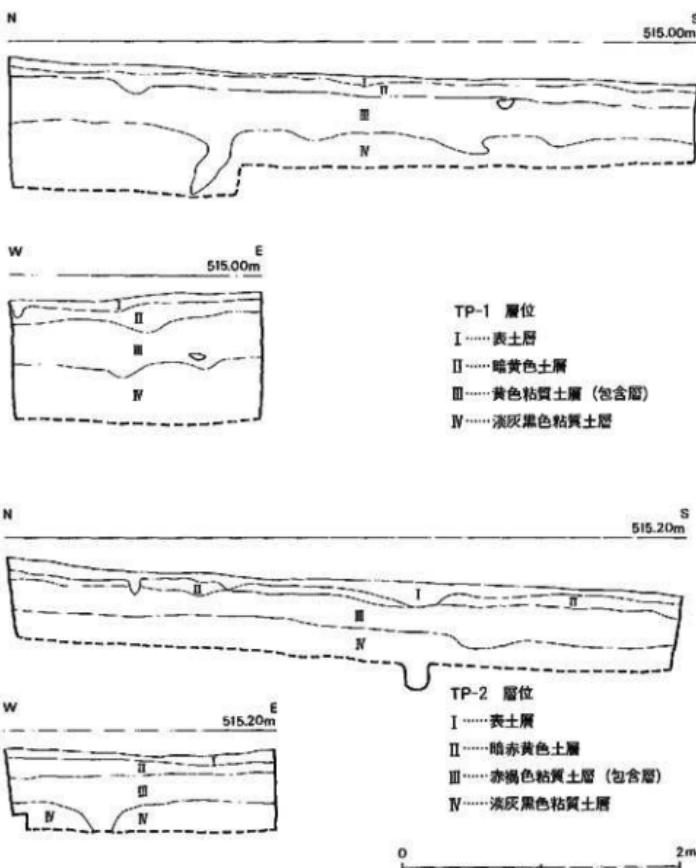
また、遺物はTP-1～3まで共通して第Ⅲ層から出土しており、遺物包含層であると思われる。

3. 出土遺物

TP-1～3までの範囲確認調査面積30m²から出土した遺物は全て石器類で、今回の調査では土器は出土しなかった。遺物の出土数も81点で、表面採集資料12点を合計しても93点と少ない。その内訳は碎片が67点と全体の70%以上を占め、次いで剥片16点、石鏃5点、石核3点、スクレイパー2点となっている。石器は全部で10点程で全体の10%程度である。ここでは出土した石器・剥片より12点を選び図示した。

石 錫（1～4）

Iは漆黒の良質な黒曜石を素材としている。両面を全面剥離調整しており脚部は深い抉りを持つ。長さ3.2cm、最大幅1.9cm、厚さ3.5mm。脚部の側縁部の一部に鋸歯状加工が認められる。



第4図 土層断面図 (1/40)

る。2・3は共に内湾気味の脚部を持つもので、両面を全面剥離調整している。形・大きさともよく似ている。4は脚部欠損の石鏃である。

スクレイパー（5・6）

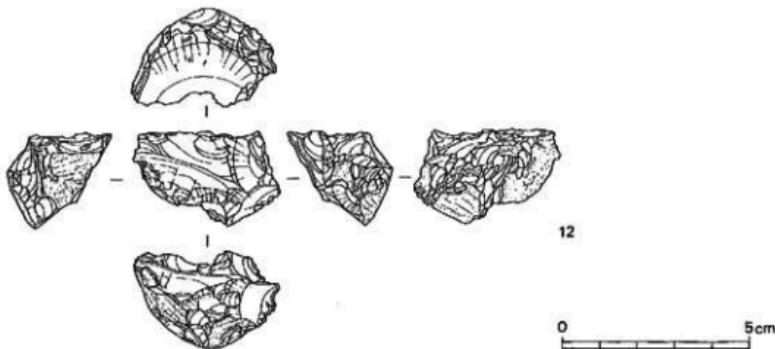
5は漆黒の黒曜石製で縦長削片を使用している。左側辺は両面から刃部加工が施され、特に表の調整が丁寧である。右側辺は裏面の上半部に細かい刃部加工がみられる。主要剥離面を残し、側辺の一部に自然面がみられる。長さ5.5cm、最大幅2.2cm、厚さ5mmである。6は黒曜石製で刃部は片面のみの調整でつくりも粗雑である。長さ2.5cm、最大幅2.2cm、厚さ1cmで一部に自然面を残す。

刮 片（7～9）

7は灰白色の黒曜石製で打面は自然面。8・9は黒色の黒曜石製である。

石 核（10～12）

10は黒色の黒曜石製である。打面・裏面は自然面で扁平な形をしている。長さ3.5cm、最大幅4.0cm、厚さ1.2cmである。11は縞模様の入った黒曜石製である。打面調整を行っている。長さ3.3cm、最大幅3.7cm、厚さ2.6cmで自然面を多く残している。12は黒色の黒曜石製で11と同タイプの石核である。長さ2.5cm、最大幅3.8cm、厚さ2.5cmである。



第6図 縄文時代の石器（2/3）



第5図 純文時代の石器 (2/3)

4. 遺物の出土状況

3箇所の試掘場共に第Ⅲ層に縄文時代早期と考えられる遺物が出土した。

各試掘場の遺物の出土状況について述べることにする。

試掘場（TP-1）は石核1点、石鎚1点、スクレイバー1点、剝片2点、碎片10点の総数15点の石器類が出土した。特に、遺物が集中する傾向はなく、試掘場内に点在する状況である。

石器の利用石材は、黒曜石A12点、その他の黒曜石1点、安山岩2点である。また、石鎚・スクレイバーは黒曜石A、石核はその他の黒曜石を利用していている。

試掘場（TP-2）は石鎚2点、石核1点、剝片3点、碎片18点の総数24点の石器類が出土した。特に遺物が集中する傾向はみられないが、TP-1に比べて出土点数が多い。

石器の利用石材は、黒曜石A21点、黒曜石B3点と黒曜石Aの利用が多く、石鎚・石核は黒曜石Aを利用している。

試掘場（TP-3）は石鎚1点、剝片7点、碎片34点の総数42点の石器類が出土した。この試掘場の遺物は、他に比べて集中する傾向がみられ、出土点数も多い。

石器の利用石材は、黒曜石A18点、黒曜石B20点、黒曜石C1点、その他の黒曜石1点、安山岩2点で、石鎚は黒曜石Aを利用していている。

以上の試掘場3箇所からは総数81点の石器類が出土したが、上器の出土は無い。

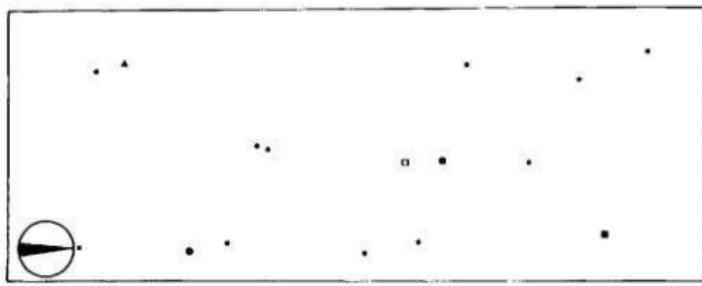
また、造物は西側に行くほど出土量も増える傾向を示しているが、石器の器種は石鎚、スクレイバー、石核、剝片等と少ない。

利用石材の黒曜石の種類は、断口の色調、特徴によって3種類に分けられ、それに該当しないものを、他の黒曜石とした。

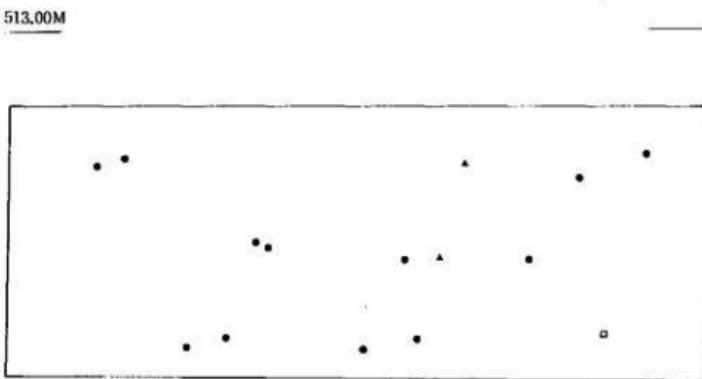
黒曜石Aは漆黒色、黒色を呈し、ガラス光沢に富み、良質である。原産地は腰岳、大崎半島、針尾が該当する。

黒曜石Bは灰青色、灰緑色を呈し、バティナが顯著である。原産地は針尾、淀姫（東浜）が該当する。

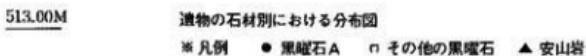
黒曜石Cは灰白色、灰色を呈し、ガラス光沢に富む。原産地は針尾と産地不明なものも含まれる。



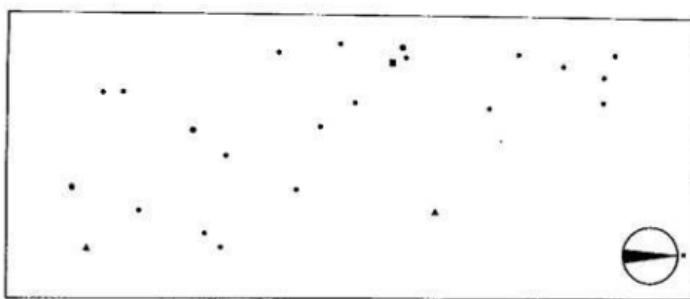
遺物の器種別における分布図
514.00M



513.00M



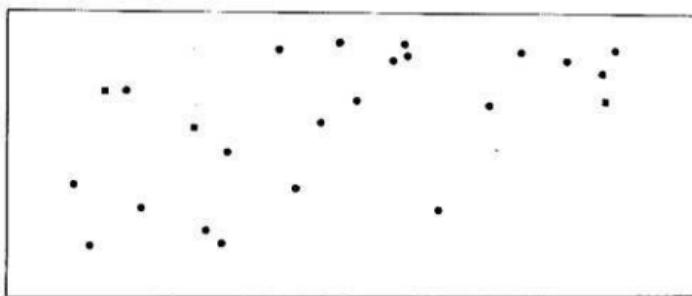
第7図 試掘場(TP-1) 第Ⅲ層遺物分布図(1/40)



514.00M

遺物の器種別における分布図

※凡例 ▲ 石錐 ■ 石核 ● 刻片 · 砕片

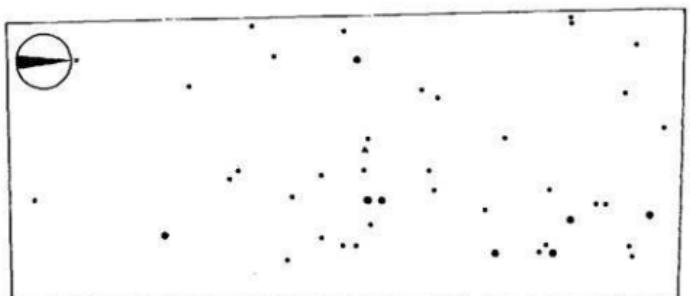


513.00M

遺物の石材別における分布図

※凡例 ● 黒曜石A ■ 黒曜石B

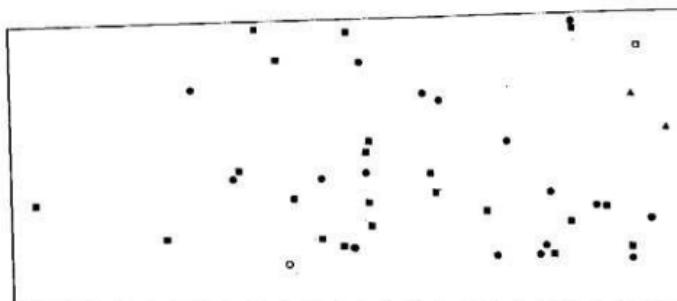
第8図 試掘場(TP-2)第Ⅲ層遺物分布図(1/40)



514.00M

513.00M

遺物の器種別における分布図
※ 凡例 ▲ 石錐 ● 刃片 • 碎片



514.00M

513.00M

遺物の石材別における分布図
※ 凡例 ● 黒曜石A ■ 黒曜石B ○ 黒曜石C □ その他の黒曜石 ▲ 安山岩

第9図 試掘場(TP-3) 第Ⅲ層遺物分布図(1/40)

IV 小 結

試掘樅 3箇所共に縄文時代の遺物が出土した。時期については、土器の出上りが無いので、確定は出来ないが、出土した石器類より縄文早期末頃と考えられる。

遺物は石鎌、スクレイバー、剝片、碎片、石核等と主要器種および数量も少ないが、当該工事範囲内外の未発掘部分にかけて、生活跡の大部分が在り、今回の試掘部分は中心部分からはずれた端部に当ると考えられる。

また、標高500mを越える高地に立地する遺跡としては、本県においても数少ない例の一つで、定住する様相よりも季節的に狩猟のために点々と移動する生活の場の一つであったと思われる。

試掘調査の結果を基に協議を重ねた結果、当該工事区域に含まれる遺跡については盛土を行って、現状保存を図ることになった。

また、今回の調査では出土しなかったが、表探資料では先土器時代の細石核、細石刃、尖頭器等多数採集されており、別の地点に先土器時代の遺物包含層が存在すると考えられる。

図 版

図版 1



遺跡遠景

図版 2



試掘壕 (TP-1) 土層堆積状況



試掘壕 (TP-2) 土層堆積状況



試掘壕 (TP-1) 第III層遺物出土状況 (西より)



試掘壕 (TP-2) 第III層遺物出土状況 (南より)



試掘壕 (TP-2) 第III層遺物出土状況 (東より)



試掘壕 (TP-2) 第III層遺物出土状況 (南より)

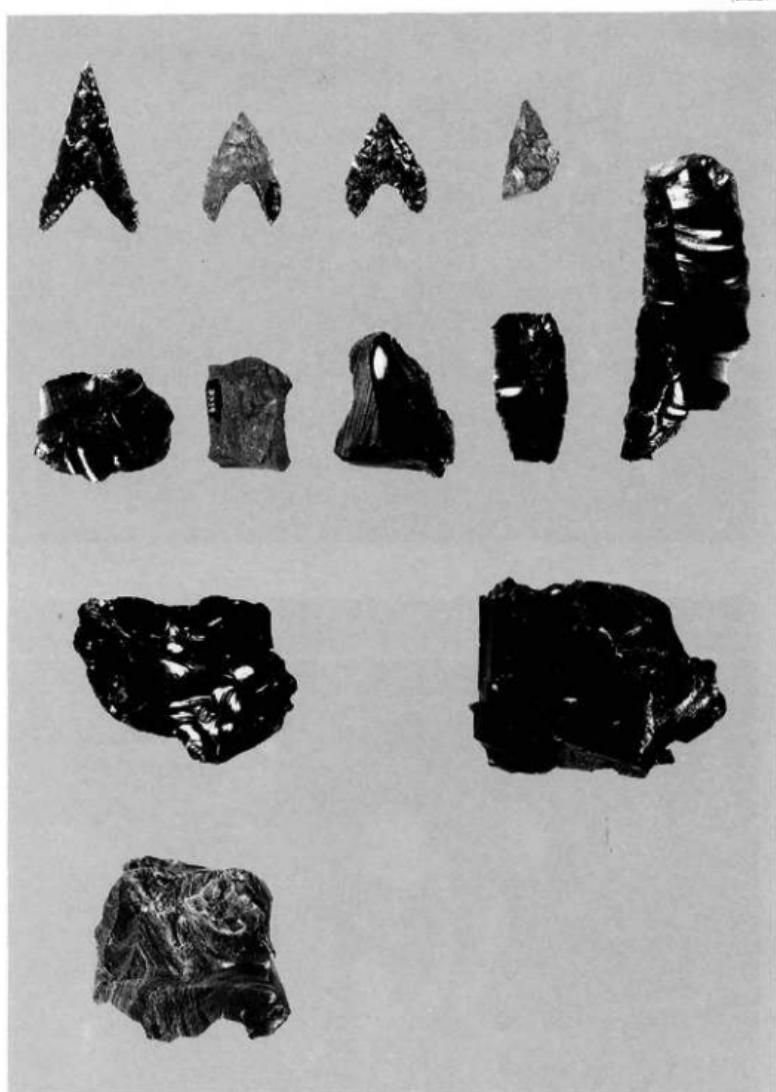


試掘壕 (TP-3) 第III層遺物出土状況 (西より)



試掘壕 (TP-3) 第III層遺物出土状況 (南より)

土層・第III層遺物出土状況



出土遺物

図版 4



調査風景

IV 唐比北森ノ木遺跡

——北高来郡森山町所在——

例　　言

1. 本報告は、北高来郡森山町の主催で長崎県文化課が実施した、刎舟出土地の調査報告である。
2. 調査は、森山町教育委員会が主体となり、長崎県教育庁文化課が担当した。調査関係者は下記のとおりである。

調査担当　長崎県教育庁文化課主任文化財保護主事　藤田和裕
長崎県教育庁文化課　　文化財保護主事　町田利幸
3. 本報告に使用した写真の撮影は藤田による。
4. 本報告は藤田・町田が分担執筆し、文責は本文目次に記している。

本文目次

I 調査に至った経緯	129 (藤田)
II 立地と環境	129 (タ)
(1) 地理的位置	129 (タ)
(2) 周辺の遺跡	130 (タ)
III 調査	131 (タ)
(1) 出土状況	131 (タ)
(2) 土 屑	132 (町田)
(3) 出土の剣舟	132 (タ)
IV おわりに	133 (藤田)

挿図目次

第1図 遺跡位置および周辺地形図	130
第2図 剣舟出土位置図	131
第3図 北壁土壙図	132
第4図 出土剣舟実測図	133
第5図 唐比塔ノ本出土剣舟実測図 (参考)	133

図版目次

図版1 剣舟出土地遠景	137
図版2 調査風景	138
図版3 出土の剣舟 (全体)	139
図版4 出土の剣舟 (部分)	140
図版5 唐比塔ノ本出土の剣舟 (昭和49年出土)	141

I 調査に至った経緯

昭和57年1月29日夕刻、北高来郡森山町教育委員会より「唐比から丸木舟が出土した」との報告が電話でなされた。水田の所有者が排水溝を掘り下げていて発見したもので、工事は一時中止しているが、どのように対処すべきか、とのことであった。これに対し、しかるべき調査をするまで現状での保存を依頼し、課内での協議を行った。排水溝工事の変更で現地保存が可能か、さらに、可能な場合あるいは不可能な場合の調査についてであったが、とりあえず現地での確認を急ぐことになった。

翌1月30日、田川肇主任文化財保護主事が現地で町教育委員会職員と落ち合った。写真撮影と略図作成のあと土地所有者を交えての協議を行ったが、その結果は以下のとおりである。

- ・排水溝工事は路線を変更し、丸木舟はそのまま現地に保存する
- ・その際でも最小限の記録保存措置を行う
- ・将来他の目的で工事を行う場合は事前に町教委に連絡し、本格的な調査を行う
- ・排水溝工事は、最小限の記録保存措置が終るまで待つ
- また、町教委に対しては
 - ・記録保存のための調査に、必要な予算措置を講ずること
 - ・近い将来、周辺陸部を含めた唐比遺跡の範囲確認調査事業を計画すること
 - ・前回出土の舟の保管状態（施設の破損や水の汚れ等）の改善を図ること
 - ・唐比遺跡のみに限らず、遺跡の周知徹底を図ること
- 以上の指導を行い、記録保存のための調査を3月下旬に実施することとなった。

II 立地と環境

(1) 地理的位置

刎舟の出土した位置は、北高来郡森山町唐比西名北森ノ木319番地である。

長崎半島と島原半島に囲まれた千々石湾の一一番北の奥になり、島原半島を扼する狹隘な愛野地峡の南端にあたる。千々石湾の北岸は愛野断層と呼ばれ、標高100m前後の断崖となっており、この断層の切れた部分に千々石湾を巡る海流によって砂嘴が形成され、その後背地に低湿地が広がっている。刎舟の出土したこの平地は、東西約1.3km、南北0.8kmほどの広さで、もともと潟地であったのを水田にしたため、深田が多いと言われている。そのため、往時は胸まで没して田植えをしたとのことであるが、近年客土をしてからさほどではないとのことである。

刎舟は、この低湿地の南西部、西側の道路から200mほどのところから出土した。昭和49年に刎舟が出土した唐比塔ノ本（第1図No.21）からは、西北西に300mほどの地点にあたる（第1図No.22）。

(2) 周辺の遺跡

森山町では近年まで、知られている遺跡の数が少なかった。しかし昭和56年度から遺跡周知事業の一環として、県内市町村での分布調査を実施することとなり、森山町分として行った調査の結果、町内で20箇所の遺跡が確認されるに至った。

ここでは町内の遺跡で、唐比周辺にあたる町南部のものに限って紹介しておきたい。なおここで使用している遺跡の番号は、森山町での遺跡台帳の番号であることを断っておく。

剱舟の出土した地点から西北西約2kmのところに、東西約0.5km、南北約1.2kmの盆地があり、殆どが水田として利用されている。遺跡はこの周辺の緩やかに傾斜する畠地に多く、9の西ノ角遺跡^{註1}は弥生時代中期から古墳時代初頭にかけての遺跡であり、弥生時代からこの盆地の開発が始まったものと考えられている。17の木正手遺跡は古墳時代の遺物散布地で、10~12は柏原古墳群1~3号墳、13~15は椿川古墳群1~3号墳、16は長坂古墳となっている。

剱舟の出土した平地周辺は遺跡がほとんどなく、18の小原遺跡が遺物散布地として知られているにすぎない。なお西方4.3kmほど隔てた諫早市松里町には、海岸に面して縄文時代中期から後期にかけての有喜貝塚^{註2}が古くから知られている。

註1 『西ノ角遺跡』長崎県文化財調査報告書第73集 1985 長崎県教育委員会

註2 『有喜貝塚』諫早市文化財調査報告書第5集 1984 謙早市教育委員会



第1図 遺跡位置および周辺地形図

III 調　　査

排水溝の工事を一時中断した状態で、水漬けになっていた刎舟のまわりの排水から作業を始めた。今回の調査は、この刎舟を現地にそのまま残すという前提のもとに行い、出土位置の確認と記録・現状の写真撮影・出土状況の図化等を終了した段階で埋め戻した。

(1) 出土状況

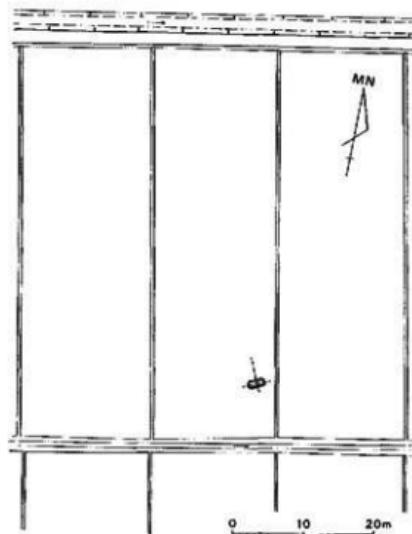
前後の向きをおおよそ東北東から西南西にとり、その中心線は北から65度東に振れている。このため、舟の向きは東西に向くものとして以下は述べることとする。

現在の水田地表面から15cmの深さで舟べりの一番高い部分に達し、舟底は東側にわずかに低くなっている。内面の一番低い部分の標高は0.74m、高い部分で0.89mあり、1/15ほどの傾斜がある。左右への大きな傾斜はないが、南側にわずかに傾いて座している。

今回刎舟の出土した水田の標高は約1.28mで、昭和49年に出土した水田面より数十cm高い。

舟の内部には、水性植物の葉や茎・ヒシの実・蓮の実と思われるものなど多くを含んだ黒褐色の腐植土が詰まっていた。舟の底に接する状態で中央部に三個、西側に二個の人頭大ほどの安山岩の角礫が残されていた。しかし、この角礫が当初から置かれていたものか、あるいは後年、何らかの状況でこのようなになったものかは不明である。ただ当初からのものであるならば、網の錘か釣糸を付けた網の錘などの漁具的な使用方法、あるいは舟の碇的な道具の部分なども考えられるが、現状では不明というしかない。

先にも述べたように、今回の調査は現状での保存ということを前提としていたので、刎舟の形状が確認できるだけの範囲しか掘り下げをしなかった。そしてその範囲のなかでは、この刎舟以外の遺物は一点も認められなかった。



第2図 刎舟出土位置図

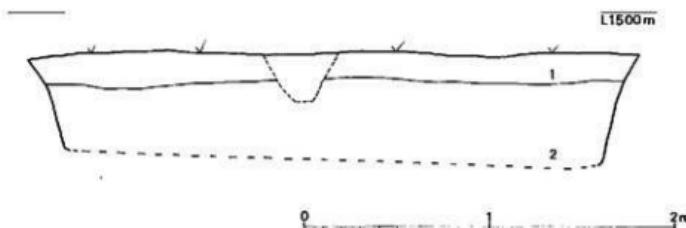
(2) 土層

現状は水捌けの悪い湿田地で、稲作のほか蓮根の作付け等を行っている。この湿田地に一步足を踏み入れると水が滲みだす。

また、耕作土を掘り下げるとき黒褐色の腐植土が現われるが、ぬかるんだ土壤のため足が抜け出せない状況であった。

堆積土層は1層が耕作土（湿地で蓮根・稲の作付け）、2層に黒褐色土（ヒシ・蓮の実・植物の葉等を含んでいる）があり、刳舟はこの層中より出土している。

今回の調査では、現状のまま舟の保存をすることとなったため、2層までの掘り下げまでを実施した。



第3図 北壁土層図

(3) 出土の刳舟

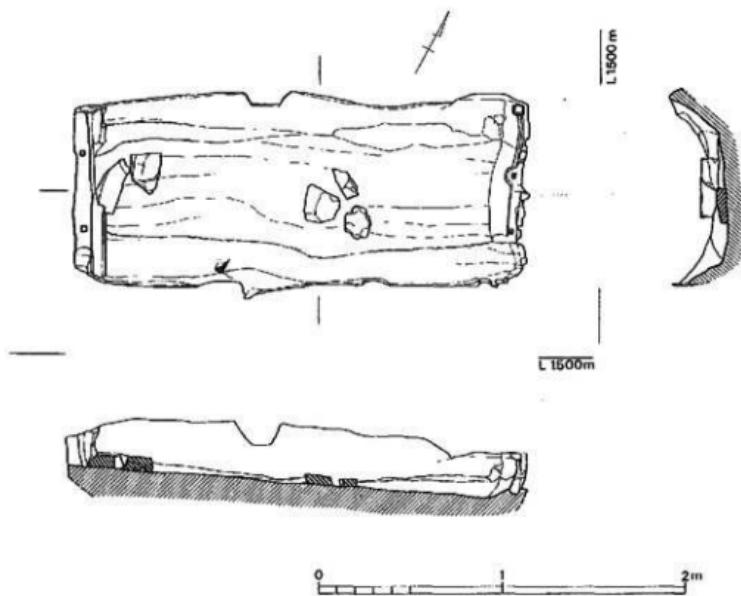
巨木を断ち切り、二つ割りにしてくり抜いた半円形状を呈している。保存状態があまり良くなく、特に中央部は破損が著しい。

全長は251cm、幅113cm、舷側端から舟底まで約30cmほどである。舷側部分で2cmほどの厚みが認められたが、舟底部分の厚みについては掘り下げを行っていないため不明である。

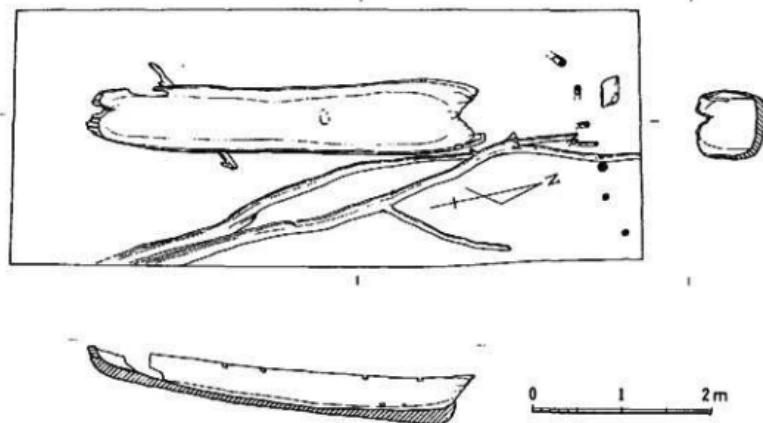
加工痕は両端部に認められ、東側で3個、西側で2個の2~6cm角の大きさの穴が穿たれている。その内側には、幅約5cmほどの深さ1~3cmの溝状の柄が作り出してあった。

また、東側断面の端部から20cmのところで緩やかな段差がついている。

以上の状況から、刳舟の前後に板状の部材を組み合わせて取り付けた、準構船であったとも考えられる。



第4図 出土舟実測図



第5図 唐比塔ノ木出土舟実測図（参考）

IV おわりに

丸木舟の材質は針葉樹でないことは明瞭であり、正確な樹種同定はしていないが、おおかた楠であろうと思われる。規模は、長さ251cmで、前回（昭和49年）出土したものに較べると短いが、幅はやや広い。しかし、出土時の状況から観察すると、両側面にやや開いたもののように思われ、もともとは、まだ内側に傾いて上方に立ち上がっていたものであろう。舟べりの高さが、表土の耕作上層下面の高さにはほぼ一致しているのは、もう少し上まであった舟べりの端部が、耕作時に損傷を受けた可能性も考えられる。

構造についてみると、両端部に溝状の加工を施し、その外側に穿孔していることから、溝に板状の木材をはめ込み、穴に棒状のものを立てて板材を補強し、安定を図ったであろうことがうかがえる。このほか前後に継ぎ足して舟の形にしたとも考えられる。このような際の防水には、溝状部分に松脂や布切れ、あるいは草木の繊維などを詰め込むことで可能であったろう。

以上のように、この舟は両端部に加工を施していることから半構造船あるいは準構造船とも呼ばれ得るものと思われ、単なる丸木舟より一段進んだ段階のものようである。出土した例も少なく、船舶の発達史という面から、またこのような技術の伝播という面からも極めて貴重なものといえるであろう。

昭和49年に発見された剣舟についても同様であるが、今回の剣舟の出上が発見と同時に剣舟と直感され、町教育委員会への連絡が直ちになされたことについて、次のような伝説がこの地に残されていたことも、一つの要因になったものと思われる。それは、「肥前高来郡唐頃村蓮池山補陀林寺水晶觀世音略縁起」に見られる、「今を去ること千年以上も前の天慶年中、唐頃の領主渡辺某に、虎御前という息女がいた。美しく育ち、館の隅の櫓を大事に育てていた。天暦十年夏の頃、虎御前はこの櫓を伐って舟とし、觀音丸と名付けて池に浮かべていたが、舟とともに没して救われなかった。その後500年ほどたった文亀三年、旱魃のため天下大いに窮し、この池に祭壇を祭って法要したところ雨降りたり、沈んでいた櫓の舟が水晶の觀音と共に出現した」というものである。この話を伝える補陀林寺水晶觀世音は、今回剣舟の出土した地点の北東約0.5kmのところにある。以上に伝えられた話は、かつてこの地がまだ水田として使用されていなかった頃の、このような剣舟を使用していた状況を伝えるのかも知れず、またこういう剣舟が時々出土したことから言い伝えられた、とも考えられる。

前回出土の場合もそうであるが、今回出土した剣舟の中はもちろん、その周辺においても、製作、あるいは使用された時期を示す遺物は全く出土しておらず、年代は一切不明というほかはない。将来、この舟材の一部を使えば、放射性炭素の測定によっておおまかな時代判定の可能性は残されている。ただ、この近辺が沼沢であったころに使用されていた剣舟であろうことは、間違いないものと思われる。

図 版

図版 1



朝舟出土地遠景



調査風景

図版 3



出土の刳舟（全体）

図版 4



出土の刺舟（部分）



唐比塔ノ木出土の刺舟（昭和49年出土）

長崎県埋蔵文化財調査集報XII

平成2年3月31日

発行 長崎県教育委員会
長崎市江戸町2-13

印刷 (有)エスケイ印刷
長崎市宝栄町18-15